デュエリスト　アシュマ　第一話　見参！秘剣・朧霞

高岡　佳司

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
デュエリスト　アシュマ　第一話　見参！秘剣・朧霞

【Ｎコード】
Ｎ５４７０Ｆ

【作者名】
高岡　佳司

【あらすじ】
養父の遺言により『万人殺しの妖刀鬼虎』を捜す旅をしていたアシュマ・アトーは、ノリトレア王国にやってくる。が、そこでは、レキソタニアから王女アーチェル・アップルトンがノリトレアの武芸師範、ガルマイン・デッドの手により拉致され幽閉の身になっていた。ガルマインは過去、世界を滅ぼしたという遺物、『バヴェル』を復活させようとしていた。アシュマは鬼虎を手にする事が出来るのか？アーチェルの運命は？ガルマインの野望とは一体？剣と野望とが交錯するＳＦファンタジー第一弾！デュエリストアシュマ『第

一話見参！秘剣・朧霞』ただ今参上！

第一節　囚われの姫君

漆黒の夜空に星々が瞬いていた。
しかし、その瞬きは弱々しく、月の光りに掻き消されそうだった。
その暗夜に、月の光りに反射して白く浮き上がっている物があった。
その白銀に光っている物体は、後端から先端に向けて美しい流線型を描き、上から見ると先端から後へ向けて扇状に広がっている。
球状の物体が流線形の上に鎮座していた。
そこから前に構造物が伸びている。
流線形の物体には、左右に円錐状の物体が付いており、それぞれ四つの穴が穿たれていて物体の後端まで突き抜けていた。
この物体は『船』であった。
しかし、その船は海に浮かんでいるのではなかった。
その船はどの様にして浮力を得ているのか、空を航行していた。
そしてこの船は、宵闇の静寂を破るように、うなり声のようなエンジン音を響かせて空を滑る様に航行していた。
この船が通り過ぎた後には飛行機雲が沸き起こり、それはさながら船の航跡のようにもみえた。
この船の窓と言う窓から漏れている明かりと、船体に付いている航空灯が、煌く星のように見えた。
この白銀に輝く船こそノリトレア王国艦隊旗艦『ハーティアー』であった。
この戦艦ハーティアーを中心に小型の船、巡洋艦や駆逐艦が数隻配備されていて、ハーティアーを警護していた。
この煌びやかに輝く白銀の船だったが、ある一室だけには明かりが点っていなかった。
この部屋には、小柄な少女が、控えている女の侍女と共にいた。
わずかに窓から入り込む星明りだけがこの部屋の照明となってい

た。
星明りがぼうっと少女の輪郭を表した。
花びらの様に美しいドレスをひらひらとさせ、どこまでも真っ直ぐな、美しい栗色の髪の毛を揺らしている。
長く密度の高いまつ毛と黒目がちの大きな瞳を持ち合わせた美しい眼はどこか窓の外を見つめている。
潤って張りのある形の良い薄紅色の唇はきゅっと真一文字に引き締められていた。
少女は人形のように動こうとしない。
そこには、美しい人形が椅子にもたれているように見えた。
しかし突然に、
「ガチャッ！」
と、言う音と共にドアが左右に開いき、部屋の照明が点く。
「！」
その少女が一瞬ドアの方へと目をやり、そして視線を元に戻す。
それが、少女が人形でない事を表していた。
大柄で壮年の男が、やはり侍従と共に部屋に入ってきた。
侍従は手押しのワゴンに、冷えた果実酒をのせて、大柄な男に付き従っている。
大柄な男は、着衣の上からでも、鍛えている事が分かるほどの体つきで、腰に刀を佩びていた。
その男の倣岸そうな目が少女を捕らえる。
「ご機嫌はいかがですかな？　アーチェル様」
男はアーチェルと呼んだ少女に向かい、頭頂に頭髪をわずかに残して剃り上げた頭を、形ばかりに垂れる。
少女は無表情に男を一瞥すると、何事も無かったように視線を窓の外へと転じた。
「座ってもよろしいかな？」
「……」
男はそう言うと、少女の返事も待たずに、向かい側に座ってしま

った。
男の侍従が男と少女の前にグラスを置き、果実酒を注いでいく。
大柄な男と対照的に小柄な少女が、細工が施されたテーブルを挟んで対峙している。
少女は弱々しく儚げで、しかしそれが少女を可憐で美しく見せていた。
「もう少々でわが国の領空内に入りますぞ。アーチェル様」
大柄なその男はアーチェルの為に注がれた果実酒の杯を指し示し、
「アーチェル様もどうですかな？」
等と促す。
「……」
少女はまるで、黙る事で反意を表しているようだった。
その様子を見た少女の……女の侍従が、大柄な男に向かって言葉を投げつけた。
「無礼ではございませんか！　ガルマイン殿！　王女を……アーチェル様をこの様な場所に監禁して……今すぐアーチェル様を解放なさい」
「よい」
初めてアーチェルと呼ばれた少女が言葉を発した。
「しかしアーチェル様……！！」
女の侍従が叫ぶ。
「よいのです」
アーチェルはそう言って彼女の侍女を制する。
「監禁ではありませぬぞ、侍従殿。我らはあくまでアーチェル様を我が国にお招きいたすのだ。アーチェル様を監禁などと、そのような事、ある筈もなかろう？」
ガルマインと呼ばれた男は悪びれた風も無く言った。
「たかが一国の武芸師範が！　この、痴れ者！」
侍女は叫ぶと、どこにどう隠していたのか、手のひらに収まるほどの小さな拳銃を取り出し、銃口をガルマインに向けた。

実際アーチェルの出自国、レキソタニア王国は、この世界の聖書に記されていて確認できる古代からの名家の一つで、国の規模こそ小さいが最も権威のある国の一つであった。
事実、どれだけの国力をもつ国と言えどもレキソタニア王国を軽んじる事など出来はしないし、してはいけないものだった。
それを考慮に入れれば、アーチェルの侍従の反応もわかろうかと言うもの。
ただ、アーチェル自体の人形とも見て取れるその表情や素振りは、生来のもので、決して安っぽい自尊心（プライド）から出たものではなかった。
「おやめ！」
アーチェルが叫ぶ。
「大丈夫です、アーチェル様」
侍女が震える手でそう言う。
「さあ、撃ってみよ……！」
ガルマインが誘いを掛ける。
「……」
アーチェル付きの侍女の拳銃を持つ手が小刻みに震える。
「さあ！」
「！！」
パン！
ガルマインの大声につられる形で侍従は拳銃を撃ってしまった。
「つっ！」
部屋中に乾いた音が響き渡り、思わずアーチェルは目を瞑ってしまった。
硝煙の匂いがする中、恐る恐る目を開いてみる。
すると驚いた事に、弾丸がガルマインの胸板より二十センチ程の所で宙に浮いていた。「……！！」
アーチェルがやや驚いたふうに、弾丸を見つめていた。
ガルマインが弾丸を見ると、コトリと落ちてテーブルに転がった。
バタンと扉がいきなり開いて兵士が数名、剣を構えて入ってきた。

「ガルマイン様！！　ご無事ですか！？」
「大事無い。下がれ」
「ですが……」
兵士はガルマインのことを案じたが、
「さがれ」
の、一言で下がらざるを得なかった。
「はっ！」
兵士たちは部屋の外に去った。
「これが『念者（ねんじゃ）』の能力（ちから）ですよ、アーチェル様」
ガルマインはテーブルに落ちた弾丸を指で摘みながら言った。
「これは危ないですからな。こちらで預からさせていただきますぞ」
ゆっくり手が伸びて、侍女の手にあった銃を奪った。
侍女は半ば放心して、ガルマインのなすがままである。
「これにて失礼したほうが良さそうですな。どうぞ、ごゆるりとお寛ぎください」
そう言ってゆっくり立ち上がると、ドアの方に向かった。
ドアの所でガルマインの侍従に何か耳打ちをした。
「何かございましたら、この者をお使いください。それでは」
ガルマインはそのままドアの外へ去っていく。
ガルマインの侍従が部屋に残った。
要は、アーチェルを監視する者以外の何者でも無かった。
再び部屋の明かりを落として、アーチェルは伏せ目がちに窓の外へ目を向けた。
何を考えているかは本人にしか分からない。
そして、静寂だけがその部屋を支配した……。

空に何かが浮かんでいた。
両翼があり、エンジンもついていたが、人一人分しか乗せられないような小さな乗り物だった。

風に任せて右に左に揺られる様は『凧』を連想させる。
『凧』から『船』に向かってケーブルが一本延びていた。
ケーブルは船尾に引っかかっていて、凧に乗っていた者が船に乗り移った事を連想させた。
「何？　侵入者？」
ガルマインは船にしては広すぎるほどのブリッジでその報告を受けた。
それは司令官の席で、ガルマインが、いくら一国の武芸師範であっても、一介の武芸者である事に代わりは無いのだが、軍内でどれだけの力を秘めているのかを表していた。
「はい…船尾で斬殺された死体がありましたもので……」
「何人侵入した？」
ガルマインはまだ若い士官に尋ねる。
何人侵入したかで、艦内の警備体制が変わるのだ。
ひいては、アーチェルへの警護体制も変わるのである。
単純だが、非常に重要な事だった。
「は？」
「何人侵入したと聞いている！」
「は…それが何人侵入したかは分からないのであります」
ガルマインは要領を得ない士官に苛立ちを覚えながら命令した。
「馬鹿者！　分からないで済むか！まずはアーチェル様の身辺警護を更に厳重にしろ！　その上で全艦に警備網を敷き、艦内から侵入者を燻り出せ！」
「は…はっ！！」
「今すぐだ！かかれ！！」
「はっ！！」
ガルマインに叱咤されて、若い士官は慌ててブリッジを後にした。
「…『奴等』の手のものか……？」
ガルマインは謎の言葉を一人呟いた……。

「うあぁぁっ！」
「ぎゃぁっ！！」
船尾の方から悲鳴と人同士が争う音が聞こえてきた。
「船尾の方からだぞ！！」
パン！パン！パン！
「うっ、うわああっ」
「じゅ、銃が、きっ、きかないぞ！！」
言葉と銃声が無秩序に飛び交っている。
「うわぁっ！！」
ドシンと、兵士が袈裟に斬られて吹っ飛んできた。
「やつも『念者』だ！　銃は通じないぞ！！」
「誰かガルマイン様に連絡を入れろ！！」
ズシュッ！
肉を裂く音と共に、一人、また一人と兵士が犠牲になって行く。
「があっ！！」
侵入者は、右手に血塗られた刀をぶら下げて、船尾の少し開けたデッキに佇んでいた。
仮面で顔を隠し、上半身裸のその男は、鍛えられた筋肉を隠す風でもなく身体を晒し、　腰から下は黒い野袴で足元は足袋を履いている。
すでに、十何体かの死体があたりに転がっている。
「気をつけろ！！　中々の手練れだぞ！」
そこは色々な声が混じって、すでに騒乱状態になっていた。
「敵は一人だぞ！　囲んで押し潰せ！」
侵入者の周りには船の兵士が剣を手に持ちつつ、じりじりと包囲の輪を縮めていく。
が、皆同士討ちや、侵入者の剣に掛かる事を恐れて、誰一人切り掛かろうとする者はいなかった。
そこにいる兵士全員が、たった一人の『侵入者』に飲み込まれて

いた。
兵士達は、侵入者に対して包囲して優位な立場にいるのにもかかわらず、皆、固まってしまったかの様に、動けないでいる。
侵入者は、不意に輪の正面に飛び込んだ。
「ひっ……ひいいいぃ」
侵入者は下から刀をすり上げる様にして兵士の股から腹部を断ち割った。
「ぎゃあああっ！！」
兵士たちは一瞬の事に驚き、身体を硬直させてしまったかの様だ。
「がぁっ！」
侵入者は返す刀で次の兵士を袈裟に斬っていた。
「うっ、うわぁあぁぁっ！」
恐怖が頂点に達し、皆が我先にと逃げ出した。
「ひっ…ひっ、ひっ……」
逃げ遅れた兵士たちが、通路のそこここの端に腰を抜かしていたり、うずくまっていたりした。
侵入者は、戦意を失った兵士にも情けを掛けず、一人一人丁寧に切り刻んで行った。
侵入者は何かを探している様である。
壁に掛かっている艦内地図を見つけ、自分の行くべき道筋を確認したようであった。
侵入者は後に死者の山を築いて、その場を後にした。

士官は慌てふためいて、再びブリッジに飛び込んできた。
その姿は返り血にまみれていて、凄惨な印象をあたえた。
「ガ…ガルマイン様に御…御報告申し上げます！！」
若い士官は息を切らせながら報告を始める。
「騒々しいっ！　何事か！」
「はっ！侵入者は船尾に侵入した模様、人数は一名の模様ですッ！」

ガルマインは、全くいまさら何事かと言う表情ですこし苛つきながら、若い士官に目を向け……
「そのような事はお前の所で処理をせい。結果のみを報告せよ」
そう言い放った。
若い士官は、いよいよ緊張し、更に報告を続けた。
「し、侵入者は『念者』と思われ、銃器類での対応は効果的ではなく、侵入者に対し、剣士三十名で対応。二十一名が死亡、重傷者を含め七名が負傷。侵入者は包囲網を突破し、現在行方不明。艦内に警戒網を敷き行方を追っているところであります！」
「何？」
ガルマインは目だけを若い士官に向ける。
「馬鹿者！！　侵入者を見失うなど以ての外じゃ！！　引き続き艦内に警戒網を敷き、侵入者を追い詰めよ！」
「はっ！！」
「……いや、待て！」
ガルマインは視線をしばらく上にしたまま何かを思案していたが、不意に目を若い士官に向けなおすと、言葉を継いだ。
「艦内の戦闘要員の三分の一をアーチェル様の部屋に配備させよ」
「は…はいっ！」
「アーチェル様にはこのブリッジにおいで頂くようお願いするのだ……いや、それはわしがやろう。行けっ！」
「はっ！」

「よいのです。わたくしはここで」
アーチェルは視点を窓の外にやりながら、そう答えていた。
その瞳はどこか悲しげである。
「それはなりませんぞ。アーチェル様」
ガルマインは多少苛つきを覚えながら話を続ける。
「此処には、もう少しで侵入者がやってまいります」

「かまいませぬ」
アーチェルは突き放したように言った。
まるで全てを放念したかのようである。
しかし、ガルマインにとってはそうはいかなかい。
侵入者の目的が、アーチェルの拉致なのか、殺害なのか判然としないが、どちらにしてもあの『計画』に支障が出てしまう。
それだけは是が非にも避けねばならない。
「アーチェル様…侵入者が此処に来るのでありますよ。此処は場所を移した方が……」
アーチェルの侍女もここはガルマインと同意見だった。
「警護の方々も必要ありませぬ。無駄な血は見とうない」
これは、アーチェルの本音である。
自分のために血が流れる事を、善しとしないのである。
「しかしそれでは……」
アーチェルの侍女がオロオロと困っている。
「人間、死ぬときに死にます」
アーチェルは既に達観したようである。
ガルマインは計算が狂ったと思った。
当初の予定は、侵入者の目的がアーチェルだと踏んで、ここにおびき寄せようと思ったのだ。
だが、アーチェルは頑として動こうとしない。
「分かりましたアーチェル様。アーチェル様はここにおいで下さい。その代わりここの護りは我らにお任せを」
ガルマインは努めて丁寧に言う。
アーチェルの譲歩を引き出す為である。
でなければこんな小娘に頭など下げるものかと思うガルマインだった。
しかし……
「いりませぬ。無駄な血は見とうない」
アーチェルは同じ答えを繰り返すばかりである。

「……」
ガルマインは最後の選択を迫られた。
無理矢理にでも、アーチェルを他の場所に移すか、アーチェルをこのままに、ガルマイン一人がここに残って、アーチェルを護るか……。
ガルマインは暫しの間迷った末に、後者の方の選択をした。
「分かりました。アーチェル様。兵は引かせます。但し私が警護致しますのをお許しください。宜しいですかな？」
「……」
アーチェルは沈黙を通した。
ガルマインはそれを肯定の意として汲み取った。
「少尉、この部屋より兵たちを、この部屋に繋がる通路という通路に配置させよ。但し侵入者を発見しても手を出すな。わしに、連絡を入れるだけでよい。わかったな」
「はっ！　これより通路に兵を配置、警戒に当たります」
ガルマインは若い士官に命令を出し、士官はそれを復唱する。
直ちに兵たちは引き、部屋はアーチェルと侍従、そしてガルマインとほんの数名の兵士を残すのみとなった。
「ガルマイン殿」
初めてアーチェルから口が開いた。
「たとえ、侵入者といえども、殺めずに、捕らえるに留めて下さいませ」
ガルマインは何を言うのかと思ったが、口の上にはのせず、
「分かりました」
そう言うに止めた。

「きっ、来ました！　侵入者です！」
通路に詰めていた兵士たちに緊張が走る。
「ガッ、ガルマイン様に連絡を入れろ！！」

「い、いいか！　皆、手を出すなよ」
「こっ、こちら後部デッキ、B通路。ただいま侵入者と遭遇。これより……」
兵たちは混乱の呈を見せていた。
侵入者も、いささか戸惑う。
侵入者である自分に対して、手を出してくる気配を見せずただ通路の片側に固まって、通過を容認しているような態度に、違和感を覚えたからだ。
むしろ、滑稽と言っても、過言ではなかった。
ただ、通過を許してくれそうだとしても、狭い通路だ。
通り際に脇から刺されようものなら、それを避ける術は無い。
「どけ！」
侵入者は威嚇をしてみる。
今度は護っている兵達が戸惑った。
「どけ」と言われて、退けるだけの余裕など空間的に無いのだ。
「どけ！！」
侵入者は再度威嚇してみる。
がたごとと、兵たちは慌てながらその場を引くしかなかった。
兵たちはその場を引き上げ、侵入者を除いて、その場から誰も居なくなった。
その後、要所、要所で同じ様な事が繰り返された。
「罠…か…」
侵入者はそれでもひるむ風も無く道を進んでいった。

「……来たか……」
ガルマインは一人呟く。
部屋は、しんとしていたので、その呟きはアーチェルにも侍従にも聞こえた。
扉の向こうから殺気なのか、気が膨れ上がってくるのが、アーチ

エルやその侍女にも分かるぐらいである。
「アーチェル様……」
侵入者に対して侍女は主人に助けを求めるように名を呼ぶ。
「大丈夫。大丈夫ですよ、アン」
アーチェルは怯える侍女をなだめるように言う。
暫くの静寂の後、
「ぎぎぃっ」
扉が左右に押し開かれる。
そして、静かに侵入者が部屋の中へと入ってきた。
侵入者も、これまでの雰囲気と異なっているのが分かったのか、警戒の度合いを上げた。
「これまでとは違うという事か……」
侵入者が呟く。
「そういうことだ」
ガルマインが応じる。
「『七賢人』の手のものか？」
ガルマインは聞きなれない言葉を発した。
「貴様に応える義理は無い。そこに居るのが『コアユニット』か……まさかこんな少女とは……よくも見つけ出したものだ……」
侵入者も聞きなれない言葉を吐いた。
そして、アーチェルの方を向く。
アーチェルの方を向いている侵入者に対して、
「おしゃべりな侵入者もいるものだ」
そう言いながらガルマインが刀をすらりと抜いた。
「確かにそのとおりだ」
侵入者も刀をぎらりと抜いた。
ガルマインは構えを八双にとる。
侵入者は刀を下段に構える。
ガルマインは「これは…」と思った。
侵入者の構えから、

（これは、並々ならぬ腕前だ）
そう見て取ったからである。
「ガルマイン、殺してはなりませぬ」
双方の殺気を受け取ったか、アーチェルがガルマインに言葉を投げかける。
（無茶を言ってくれるものだ。これだから高貴な方々というものは……）
ガルマインは心の中で呟いた。
双方腕前が互角なのか、ぴたりと構えたまま動こうとしなかった。
ぴーんとした緊張感がその場に張り付いていた。
そのままじりじりと、時間だけが流れていく。
緊張感に耐えられなくなったか、アーチェルの侍女が思わずテーブルに肘をぶつけた。
ごとり、と、テーブルが鳴った。
その音を合図に、静寂は破られ、二人が一斉に動いた。
侵入者は下段から円弧を絵描き、ガルマインは刀を八双から直線的に刀を振り下ろしていた。
円を描く運動と、直線的な運動、双方の刀の軌跡が勝敗を分けた。
わずかな差で、ガルマインの刀が、侵入者の頭を、仮面ごと断ち割っていた。
「！！」
アーチェルに驚愕の表情が刷(は)かれる。
仮面の下から、堀の深い端正な顔が現れた。
まだ若い青年だった。
侵入者は目でアーチェルの方を向いたが、既に目は見えてないらしく、視点を虚空に躍らせながら、どっと床に倒れ込む。
「ふうーっ」
ガルマインは息を吐き、刀を懐紙で拭くと鞘に収めた。
「殺してはならぬと言うたのに！」
アーチェルはガルマインを非難した。

「そうは申しても手を抜ける相手では御座いませなんだ。気を抜けばこちらが倒されてしまいまする」
ガルマインは非難するアーチェルに向けてそう応えるしかなかった。
アーチェルは一人
「なぜ……」
と、呟いていた。

第二節　碧髪の若君

惨劇のあった白銀の船は、母港に停泊していた。
母港に停泊といっても、高い塔に舳先を繋いで宙に浮かんでいるだけだったが……。
先日の惨劇で辺りに飛び散った血や肉片を綺麗に洗浄し終わった所である。
ハーティアーが接舷している一際高い、その塔は王宮の一部、中央大塔と呼ばれる王宮の中枢部であった。
中央大塔は東西南北の大塔を従えており、四塔の二倍の高さを誇っていた。
塔は幾つも建っていたが、その悉くが白い壁で建てられており、青い空に映えて清楚な印象を与えていた。
王宮は幾つもの塔が幾何学的に配置され、上下左右に向けて対称的に並んでいた。
王宮は、塔が主な施設で、そこに幾つもの役所なり、何なりが入っていて、それらが連携して始めて王宮として機能していた。
更に王宮の周りを、堀と塀が幾重にも取り巻いており、戦時には城塞の要も兼ね備えているようだった。
しかしこの美しい王宮は戦時より平時に相応しい顔を見せていた。
その王宮の一角に、弓道場がある。
武道に関する道場は四つあって、いわゆる刀剣に関する武道所は二棟、弓道場はここにある一棟、その他は、武芸大会等が催される、観覧舞踏場が一棟と、以上四棟となっていた。
弓道場からは、矢を射る音が、そして矢が的に当たる音が聞こえてくる。
射場には、背の高い、眉目秀麗な青年が弓を射ていた。
涼しい目元はその知性を現し、その引き締まった口元は能弁さを表していた。

何度も何度も同じ動きで弓を射る姿は、律動的な美しさを醸し出していた。
碧く長く艶やかな髪の毛が印象的で、弓を射るたびにたなびいている。
線が細く背の高いその青年は、名画家の描いた肖像画のように美しかった。
その脇には小柄な老人が控えている。
「若、ガルマインが、レキソタニア王国の王女を拉致して戻ってきたようです」
老人が若者に報告をしている。
「そう……かっ」
若者は矢を射ながら応えている。
「『そうか』では御座いませぬぞアルスティーン様。これはノリトレア、レキソタニア、双方の国の体面にかかわることですぞ！　ほおって置けば、いずれ国際問題に発展するのは必至！　ここはすみやかに、レキソタニアの王女にお戻りいただくのが得策かと……」
若者は再び弓に矢を添え、弓を引きながら応える。
「爺、そう簡単に言うがな、簡単にはいかんな……これは……なっ！」
アルスティーンと呼ばれた若者はそう応えていた。
この若者こそノリトレア王国の王子にして王位継承権第一位であるアルスティーン・ノリトレア、その人であった。
側にいるのは、おそらくアルスティーンの使っている『草』であろう。
「何故ですか、若！　爺は納得いきませぬぞ！」
老人は憤った風でアルスティーンに抗議する。
「まず、ガルマインが父上のお側にはべるのに難くない立場にあることだ」
「それは、あ奴めが『武芸御指南役』の立場を利用しての事ですか」
「そうだな。父上はガルマインに全幅の信頼を置いているからな。

レキソタニアの王女が『表敬訪問して来た』といえば、そうかと言って信じるだろうな……。お体の調子もよくないし、全てにおいて気弱になっておられる」
「しかし若、王女が違うと言ったなら話は変わってきますぞ」
「王女は大層御聡明なお方と聞く。おそらくそうは言うまいよ」
「何故で御座います、若？」
アルスティーンは弓を脇に手挟み応え始めた。
「既に王女は侍女等を含め軟禁状態と聞く。レキソタニアの民は、王女を人質にされているといえよう。それが国際問題の火種となり自分に害が及ぼうとした時、ガルマインは保身のために王女をためらいも無く殺めるだろう。そうなれば、それこそ国際問題になるだろうな。もしかしたらそれだけでは済まないかも知れない。そうなれば犠牲になるのは罪も無い民草。王女はそれこそ草葉の陰から御自分のせいで血が流されるのを、黙って見ていられなかろう。だから王女は何もいえないのさ。尤もガルマインもそこまで読んでの所だろうけどね」
「若、草葉の陰からなどと言葉がすぎまするぞ」
老人はアルスティーンを諌める。
「そうだな。控える」
「しかし、そのままでも、国際問題には発展しますぞ」
「それも無いだろうな。王女自身はそれこそおそらく、『表敬訪問』と内外に表明なされるだろうさ」
アルスティーンは一拍おいて話を続ける。
「僕も色々なしがらみがあって、王女をお救いできるかどうか……おそらくガルマインの企みから王女を助ける事の出来るのはハグム・マグマイヤーだけだろうね」
老人は一歩前に出て応える。
「もうお一方の『武芸御指南役』でございますな？　でも、あの方は政治のことに関して少し疎いかと……」
「少し疎い方がかえって良いのさ。あの頑固オヤジの事だ。真正面

からガルマインにぶつかっていくだろうね」
　アルスティーンはどこか遠い目をして話していた。
「それに若……」
「分かっているさ。少し気になることもあるしね」
「例の『発掘現場』のことに御座いますな？」
　老人は再び頭を上げて、訊く。
「ああ……軍に働きかけて、一体何を発掘しているのか？　学者たちを囲い込んで何を調べさせているのか？　……このタイミングにアーチェル王女を『さらってきた』のに一体何の意味があるのか……？」
　アルスティーンは再び弓を構える。
「探りを入れるのでありますな？」
「ああ、頼むよ。爺……。あ、爺」
「何でございますかな、若」
「ガルマインはそれだけじゃなく、最近は屋敷にて『あるお方』なる人物とやたら会っているという噂をよく聞く。こっちの方も探りを入れられれば入れておいてくれ」
「分かり申した。しばしお待ちを」
「爺、あまり無理をするなよ。歳なんだから」
「何を言います。若。痩せても枯れてもこのアベニ、まだまだ若いものには……」
「分かった、分かったよ爺。私が悪かった」
「分かって頂ければそれで結構。では、失礼仕ります」
　アルスティーンがそこまで言って、老人はその場から気配ごと消え去った。
「全く面倒な事……をっ！」
　アルスティーンの放った矢は、空を切り裂き、的の真ん中を射抜いた。

白亜の塔の城のその奥、黒く塗りこまれた館と道場を兼ねた実に大きな屋敷があった。
白く美しいこの城の敷地中で、黒く塗りこまれたこの館は異彩を放ち、大いに違和感を醸し出している。
館というより見ようによっては戦時の平城といった感じで、ここにガルマインの一党とも言ってよい、門下生たちが寝起きしている。
事実、戦時には、その機能を持つ館で、元老院でも色々と取り沙汰されたが、この城の場所的にも、機能的にも中心である、中央大塔のすぐ喉元である所にあることから、ガルマインの反乱を恐れ、告知する事も撤去する事も出来ずにいた。
その異彩を放つ大きな屋敷にガルマインは帰ってきた。
大きい広間の玄関にガルマインは足を踏み入れた。
「親父殿、お帰りなさいませ」
「ガデウィンか……」
ガルマインは自分を「親父」と呼ぶ大兵に声を掛ける。
ガデウィンと呼ばれた若者は、実に大兵と呼ぶに相応しいなりで、見たところ身長は二メートル前後と大きく、強力な膂力を秘めているように見て取れた。
無骨そうで武辺一辺倒だが、どこか屈折した感じの青年の様に見える。
言うなれば、どこかに執念深さと執拗なサディズムを併せ持った性格の持ち主、といったところか……。
この若者は公に出来ないガルマインの私兵をまとめる役割を担っている。
又、ガルマイン無い時、ガルマインに変わって、国内にいるガルマインの一党を束ねる役目も併せ持っている。
「変わりないか？」
これは何も息子を慮(おもんぱか)って聴いた言葉ではなかった。
「はい、特に」
ガルマインたちは廊下を進んで行きながら訊く。

「発掘現場はどうなっている？」
「はい。順調に」
「誰かに気取られたという事は？」
「最近はアルスティーンの手の者が、少々煩(うるさ)いかと」
つとガルマインは廊下の途中で止まった。
「規模が規模だからのう。気取られないという方が無理な話か……」
ガルマインは歩みを再びはじめ、自室に入り、着替えをメイドに手伝わせながら話を続ける。
「それにしてもアルスティーンか……面倒な奴に目をつけられたものよ。まぁ、アルスティーンなど、『あのお方』さえおれば、あとでどうとでもなるものよ。ふふふ」
ガルマインは意味ありげな含み笑いをした。
「それに『例の者達』が嗅ぎ付けた模様です」
「そちらの方が問題よ」
ガルマイン達は再び歩き始め、
「どれ、久しぶりに稽古でも見てやるか」
そう言って稽古所のほうへ歩んでいった。

「……私が？」
アルスティーンは、素っ頓狂な声を上げて応える。
「はい。今宵の武芸大会、国王様お体の調子宜しく無く、差し支えなくば代わりに……」
大臣は恐縮しながら言う。
アルスティーンはその言葉を　中央大塔から自室のある東の大東へと繋がる廊下で聞いた。
武芸大会と言っても、ガルマインが国王に『国内の武芸奨励』にと薦め、毎月一回行われる、小規模なものである。
出場者は予め八名までに予選にて絞り込まれ、本戦にあたると言う物である。

又、本戦は、城内にある武道場で行われ、王族やそれに順ずる者が、歓談や食事をしながら、試合を眺める事が出来る施設がある。
「私に父上の代わりに王女のお相手をせよ……と？」
「は……国王様の命なれば……」
「父上直々におっしゃられたのか？」
アルスティーンは厳しく聞き質した。
「は？　そうで御座いますが……？」
アルスティーンはほっとした様子で察する。
（それならば、ガルマインの意向は含まれてはいないか）
「王女はご覧になられるのか？」
大臣は
「も、もちろんで御座います」
そう応える。
アルスティーンは話題を転じて訊いた。
「父上と王女との会談は上手く行ったのか？」
「はっ、それはもう和やかに御歓談なされておりました」
「そうか。それは重畳」
「ただ、国王様途中にて俄かにお加減芳しく無くなり、会談も途中で中止の事と相成り、アーチェル様、残念の御様子で御座いました」
「そうか」
アルスティーンは少し落胆した。
「ところで、アルスティーン様」
「何だ？」
大臣は何かを報告しようとしていた。
「は。ハグム・マグマイヤーの息子が今回出場するようです」
アルスティーンは少し驚き、
「そうか！　……オルバニアンが出場するか」
自分の事の様に喜んだ。
「は。確かそのような名かと」
大臣も少し嬉しそうにして言う。

どうやらガルマイン派よりハグム派らしい。
「そうだな……試合が始まる前にでも、顔を見に行くのも一興だな」
アルスティーンは自分に納得させるように呟いた。
「は？」
大臣にはアルスティーンの呟きが聞こえなかったらしい。
「では今宵の事、宜しくお願いします」
「うむ　わかった」
「それでは、失礼致しまする」
大臣はかしこまりながらその場を去った。

城内にある幾つかの武道場のひとつ……。
もう一人の武芸御指南役、ハグム・マグマイヤーの道場「錬武館」の奥から、木刀が一合、二合と打ち合わさる乾いた音が響いてくる。
この錬武館、構えこそ大きく、規模の大きい物だったが、どこか素朴で枯れた渋みのある造りになっていた。
まさに、質実剛健と名高いハグム・マグマイヤーに相応しい道場と言えるだろう。
ここに道場主が寝起きする母屋と弟子たちが寝起きをする長屋。
そして道場の後は細々とした建物……。
道場の構成はそういった事になっていた。
そしてここ、道場では、壮年の男が若者相手に組み稽古を行っていた。
すると、どどっ、と若者が羽目板に転がって倒れる。
他の弟子たちは床に正座して成り行きを見守っている……。
「そのようなざまでどうする！？」
若者を叱咤（しった）するこの者こそ、ガルマインと対を成すもう一人の武芸師範役、ハグム・マグマイヤーその人である。
「お、親父……！！」
そう言って、立ち上がろうとする若者は、ハグムのその息子、オ

ルバニアン・マグマイヤーと言った。
二人だけの稽古は既に四時間近くに達しようとしていた。
しかし若さ溢れるその身からはこれから伸びようとする若木のような健康さと強さがあった。
濃い眉と強い眼光は意志の強さを想像させる。
赤く燃えるような色の髪を後ろに束ね、オルバニアンは、木刀を杖に立ち上がろうとしている。
「さぁ！　来い」
「わかってるよ！！」
ただ、不器用そうな、その様が珠に傷だった。
オルバニアンは構えを直して再びハグムに向かっていった。
かーんと乾いた音がしてオルバニアンは再び羽目板に転がった。
「馬鹿者！　真正面ばかり突っ込んできおって！　お前は猪か！！」
「なにを！？」
オルバニアンは再び立ち上がり今度は右の脇構えに構えて突っ込んでいく。
「お前は馬鹿か！」
ハグムは一喝した後、オルバニアンの右脇構えに転じた構えから、円弧を描いて伸びてくる軌跡を、八双の構えから打ち下ろされる鋭い一撃が、オルバニアンの木刀を叩き落した。
からんと木刀を落としたオルバニアンが怒りのこもった眼でハグムを見返す。
「何が馬鹿なんだよ！　何が気に入らないんだ！？」
「それすら分からんか！？　馬鹿者！！」
「今夜の武芸大会に息子が出場するんだぞ！　何が気に入らないんだ！　それとも今から優勝するように鍛えなおすってのか！？　そんなに流派の看板が大事なのかよ！？」
「優勝云々だの、流派の看板がどうだのそんな事を気にするわしではない！！　そんな事も分からんのか！　この大馬鹿者！！」
「うるさいなぁ！　馬鹿馬鹿言うな！」

そう言うとオルバニアンは、脱兎のごとく駆け出して、庭に降り、そのまま道場を後にした。
そんなオルバニアンを見て、ハグムは
「馬鹿者が……」
と、呟く。
当のオルバニアンは、道場近くの草原に一人寝転んでいた。
草原と道場の間には木が生い茂っていて林をつくり、一種、草原と道場を隔離した感があった。
オルバニアンは草原に寝転び空を見上げ眩しそうに目を細めていた。
草原を伝ってくる風が心地よい。
「昔はあんな親父じゃなかったのにな……」
オルバニアンは昔に思いを馳せた。
「……『父上』か……」
「お父上がどうかしたかい？」
「お、おわぁっ！？」
オルバニアンは突然の声に驚き思わず飛び退く。
「だ、誰だっ！？」
オルバニアンは声の持ち主を探し、辺りを見回す。
すると声の主を見つけ思わず、
「ア・ア・ア・…」
驚いていた。
「『ア』がどうかしたかい？」
若者は気さくに手を半ば上げ、それを左右に振りながら、こちらに向かってきた。
「ア、アルスティーン様！！」
そこに居たのは『若君』アルスティーンである。
「はっ！！」
オルバニアンはその場に平伏して口上を述べ始めた……が……。
「ア、アルスティーン様には御……ごきげんうるわしっちゃられっ

……てててっ！！」
……舌を噛んだようだ。
「ははっ……。慣れぬことはしない方がいい。久しぶりだね、オルバニアン」
アルスティーンは兄のように、優しく声をかけた。
「はっ。アルスティーン様も」
「また、『親父殿』と喧嘩か？」
「喧嘩なんて……親父はいつも俺の事を認めてくれないんだ……。今日だって『馬鹿者』の一点張り。一体俺のどこが馬鹿なんだ……。俺にはもう、何がなんだか……」
アルスティーンは「ふう」と一息つくと言葉を継ぎ始めた。
「なぁ、オルバニアン。親というものは、いつでも我が子の事を心配するもんじゃないかな？　心配だから我が子の至らぬところを直してやろうとするんじゃないかな？『馬鹿者』は、その心配心の表れじゃないかな？」
「そうでしょうか？　うちの親父はただの剣術馬鹿で、俺のことを心配するなんて、そこまで気がまわらないだけですよ」
「うちの父上だって同じようなものさ」
「え？　アルスティーン様も？」
アルスティーンはオルバニアンの側に腰を掛ける。
「ああ。さすがにハグム程、激烈じゃないけどね。色々と小言を言われたものさ」
「そうなんですか？　まさか？　アルスティーン様が、俺と一緒だなんて」
「ただ、私の場合十八年前の事があるからな……大分甘やかされたものよ。自分でも甘ったれた人間に育ったと思うよ」
「そんな、甘ったれただなんてアルスティーン様はそんなお方じゃ……十八年前って……何かあったん……あっ！　す、すいません、俺、気づかなくて……」

十八年前……それは次期国王の継承権を巡って国論を二分し、紛争直前にまで発展した事を指していた。
現国王リーマス・ノリトレアは年老いた王だが、十八年前もとても若い王とはいえなかった。
これまで跡継ぎも生まれず、次期国王を誰にするか、宮廷内で紛糾し、事態の解決の糸口が見えなかった。
混乱した事態を解決する為、王は外からの血を入れることを発表する。
即ち、王家の縁故を頼り、養子をもらい、嫡子とすることだった。
養子に来た子、アルスティーンは当時八歳。とても聡明な子であったという。
事態はアルスティーンを、王位継承権第一位とすることで沈静化に向かっていた。
ところが事態が一変する事が発生する。
王に男子、『ルーラン』が生まれたのだ。
再び王位継承権の順位を巡って国論は二分された。
継承順位決定後の利権も含め、さまざまな思惑から、双方派閥を組み、論争を交わしてきた。
双方の言い分はこうだった。
アルスティーン派はルーランが端た女に生ませた下賤な子とし、王位継承権にすら上らない、と、言うもの。
一方のルーラン派は例えどのような腹でも国王の嫡子に代わりは無く、養子のアルスティーンは王位継承権第二位だとするもの。
双方の派閥の話は平行線をたどり、そのまま論争が過熱、次第に一触即発の様相を呈してきた。
最早、双方の派閥が武力衝突以外、解決しない様思われた。
ところがその最中、リーマス国王がルーラン王子が、急な病にて逝去した事を発表する。
当初は暗殺説、王自ら王子に手をおかけになったと言う説、さま

ざまな説が流れたが
やがて沈静化。
王位継承権はアルスティーンに落ち着き、今に至る。
「あの騒動で、一体何人の人間が死んだんだろうって。こうまでして決めなきゃならない王位って、一体なんだろうって……」
「アルスティーン様……」
オルバニアンは、王子と呼ばれる人でも、こんなに悩むものなのだなと思う。
そう思った後にこの人も人間なんだなと思い、当たり前かと思い直してみる。
「ところでオルバニアン」
話が重くなったのを感じ、アルスティーンは話題を変えようと思った。
「何でしょう？　アルスティーン様」
「ハグムの道場から君が出場するんだ。君が優勝するんだろうね？」
「いえ、そんな事……」
オルバニアンは慌てて首を横に振る。
「謙遜なんかしなくていいのに」
「いえ、謙遜なんかじゃないんですよ、アルスティーン様」
「と、いうと？」
「それは……」
オルバニアンは草の上に座りなおし話を続ける。
「今回、とんでもない『化け物』がいるんですよ」
「『化け物』？」
「ええ、予選で見かけたんですけど、先ず相手の攻撃が絶対あたらないんです」
「攻撃があたらない？」
「あらぬ方に木刀を振っているというか、空を切らされているというか……」
「それで？」

「勝ち方があっけないんです。相手の木刀を弾き飛ばすか、木刀をたたき折るか……
後の後をとるというか……俺が見た限り全部そんな勝ち方ですね……」
「へえ……それは興味深いね。どんな奴なんだい？」
アルスティーンは草原の上にごろんと横になって聞いている。
「まだ若い男ですよ。俺よりは年上ですね。アルスティーン様よりは少し若いかな？　背格好もアルスティーン様よりは低いかな？　百八十センチぐらいですかね？」
「うん、それで？」
「見た感じは鍛えているけどガチガチじゃなく、細身でしなやかな感じでした。存在感はあるのに、影が薄いっていう、ちぐはぐな感じでした」
「存在感はあるのに、影が薄い？　ぜんぜん真逆だね」
「ええ、矛盾するんですが……。多分、相手によって使い分けているんだと思います」「顔とかそんなのはどんな感じなんだい？　厳(いか)つい奴なのかい？」
「いえ、結構いい男でしたよ…端正な顔立ちって言うか、彫が深いって言うか……栗色の混じった黒い瞳と髪の毛が印象的でした。ただ……影が暗いというか……」
「ただの優男ってわけでもなさそうだね……名前はなんていうんだい？　その化け物君は」
「確か、『アシュマ・アトー』……って言ってました」
「『アシュマ・アトー』ねぇ……それが『閃光のアシュマ』だったら大変だ」
「なんですか？　その『閃光のアシュマ』って？」
「なんだい？　仮にもお前さんは武道指南役の息子だろ？」
「そんな事、知らないものは知らないんです」
オルバニアンは少し憤りを感じる。
「まぁまぁ…。『閃光のアシュマ』って名前はね、最近、武道界で

よく聞く名前なんですよ。名前の由来は知らないけどね」
アルスティーンはオルバニアンをなだめながら話した。
「そうですか。まぁ、名前はともかく、あんなのを見ると勝てる気がしませんね、実際」
「そうなんだ……」
二人の会話がいったん途切れた。
「じゃあ、僕はそろそろ行くよ」
「すいません。最後に変な話をしてしまって」
「いや、中々面白い話だったよ」
そう言ってアルスティーンは立ち上がり裾を払う。
「又、聞かせてくれ」
アルスティーンはそう言って王宮の方へ立ち去っていった。
「はぁ……」
オルバニアンが半ば呆然としていると、草原の向こうから声が掛かった。
「オルバニアン様ー。そろそろお戻りになってくださーい。武芸大会に出遅れますよー」
「分かったー。今行くー」
オルバニアンは、気を取り直して立ち上がり、軽く尻を払った。

第三節　見参！アシュマ・アトー

武芸大会の行われる武道場は、丸い形をしていて、階段状に観客席を設けてある。

中心には武舞台があり、観客席がすぐ側にまで来ていたが、フェンスで仕切られており隔離されている。

来賓席や王族の席、武道に通ずる者の席には、やはり、一般の観客席とは隔離されていて、その身の安全が確保されていた。

宵の時間、武芸大会会場の観覧席で、アルスティーンはアーチェルが来るのを待っていた。

普通ならば、父の国王と共に、王女の出迎えをすべき所なのだが、ガルマインがどう出るか見極めようとした為に、挨拶の機を逸してしまったのである。

結果、その時点で、政治的にはガルマインに一歩出遅れてしまった形になった。

一般観客席は既に満杯だった。

それにしてもアルスティーンはオロオロと落ち着かない様子である。

アーチェルが来る予定時間が、既に十数分と過ぎていたからだ。

アルスティーンが苛々(いらいら)して右に左に動くたび、アルスティーンの傘持ちと侍従が跡に付き従って、やはり右に左に動いていた。

アルスティーンは、本当に王女はどうしたのだろうと思ったその時、通路の向こう側から、儚げな美しさを湛えた、人形のような少女が侍従を付き従えて歩いて来るのを見た。

アーチェルの傘もちは、やはり飾りである大きい傘を掲げ、少女を護るように歩いてきた。

アルスティーンはその美しさに一瞬、我を忘れた。

目の前にアーチェルがやって来てから暫らくして、アルスティーンは我に返って、動揺を隠しながら、アーチェルに挨拶をした。

「お初にお目にかかります。ノリトレア王国王子、アルスティーンにございます。挨拶が遅れてしまい、大変失礼を致しました。以後お見知りおきを」
アルスティーンはアーチェルの手をとり、その甲に口付けをする。
アーチェルは影のある微笑みを湛えながら、応えた。
「レキソタニアのアーチェルです。御丁寧な挨拶痛み入ります」
「それでは、こちらへ」
アルスティーンは王女を席へと誘う。
その時後ろから、ガルマインが傘もちと侍従を連れて遅れてきた。
「ガルマインか」
「は。アーチェル様、アルスティーン様共に、ご機嫌麗しく恐悦至極に存じます」
ガルマインは通り一遍の挨拶をする。
「うむ、大儀である」
アルスティーンも通り一遍の返答をする。
「……」
それに対しアーチェルは沈黙を守り通した。
そんなことはお構いなしにガルマインはアルスティーンとアーチェルの間の一席後ろ、一段高い所に陣取る。
見ようによっては、ガルマインがアルスティーンとアーチェルを従えているようにも見える。
アルスティーンはそんなガルマインを小賢しく思ったが、そんなことはおくびにも出さずに、ガルマインに声をかけた。
「ガルマインよ今宵の武道大会には、『化け物』が出るそうじゃの？」
「……化け物ですか？」
ガルマインが訊きなおす。
「ガルマイン。お主は国外に出ていて知らぬであろうが、予選で相手に一かすりもさせず勝ち残った輩がいるようだぞ？」
「ほう」

「化け物？」
アーチェルが恐る恐る、アルスティーンに聞いてみる。
「ええ、『アシュマ・アトー』という名の物の怪らしいですよ」
「まぁ……」
この話題にはガルマインも身を乗り出してきて、
「その者は『閃光のアシュマ』ですかな？　もしかして」
聞き質(ただ)した。
アルスティーンは癇(かん)に障(さわ)ったが、
「さぁ？　分かりません。ただ今回ここに居る『アシュマ』殿は相当の怪物らしいですよ」
揶揄して言った。
ガァ～ン！
銅鑼(どら)の音が鳴る。
「わぁぁっ！！」
と、観客席が沸く。
既に武道大会は王国国民にとって数少ない娯楽の一つとなっていた。
「あっ」
アーチェルが驚き、小さく声を上げる。
『これより第百八十二回武道大会を開催いたします。』
場内アナウンスが、館内に響いた。
『東方、リンク・ストワ！　……西方、オルバニアン・マグマイヤー！』
「おっ、早速のお出ましか」
「あの方が物の怪にございますか？」
アルスティーンの一言にアーチェルが小声で反応した。
「いえいえ、あの背の小さい方は『オルバニアン・マグマイヤー』といいましてね、我が国の武術指南役の御子息なのですよ」
アルスティーンは飲み物をテーブルに置きアーチェルに応えていた。

「では、ガルマイン殿の御子息なのですか？」
アルスティーンはやや困った風な顔をする。
「いえいえいえ、我が国は武術指南役を二家取り抱えておりまして、もう一方の家の御子息なのですよ」
そう、アルスティーンは答えた。
「まぁ、そうですの」
アーチェルは何かを納得したらしい。
ガルマインは複雑な表情でそのやり取りを聞き流していた。
「始め！！」
試合場の中央にいる審判が試合の開始を合図した。
「やぁっ！！」
「とおっ！！」
両者気合を発し、試合が始まった。
オルバニアンは八双、対して相手は正眼に構える。
オルバニアンは刀身に気合を込めるように、ゆっくりゆっくりと、上段に構えなおす。
オルバニアンはつま先に力を込めて、じりじりと間合いを詰め始めた。
相手も間合いを詰めて来る。
とうとう、相手が互いの間合いに入る、一足一刀の間合いになった。
オルバニアンの胴はがら空きで隙を作っている。
それは、オルバニアンの「誘い」であった。
相手も「隙」に気づいていたが、上段からの一撃を恐れて手を出せないでいた。
オルバニアンは気後れせず更に気合を充溢させて、相手を威圧する。
オルバニアンの威圧に耐え切れず、相手は『誘い』の中へと吸い込まれていった。
相手は正眼から構えを右脇構えに構え直して、オルバニアンの胴

を狙う。
相手の切っ先が胴に決まるかと思われたとき、肩口に大きな衝撃が走った。
オルバニアンの上段打ちが相手の肩口に、見事決まったのである。
「わあぁっ！」
会場が一気に沸いた。
「まぁ」
小さく声を出してアーチェルは喜びを表した。
「ふぅーっ……」
オルバニアンは大きく息を吐いて、相手と共に試合場の所定の位置に戻る。
「オルバニアンも中々やるな。そちの息子と戦ったらいい勝負なんじゃないかな？」
アルスティーンは徐ら後ろを振り向きガルマインに言う。
「お戯れを。オルバニアン殿とうちの愚息とでは、てんで相手になりませぬ」
ガルマインはにやりと皮肉っぽく方頬をゆがめて見せた。
アルスティーンは爬虫類を見たような気色悪さを覚えて前に視線を戻した。
その折に、横目にアーチェルを見てみたが、アーチェルは瞳をじっと試合場に向けたままだった。
その後、第二試合、第三試合と順当に行われいよいよ第四試合。
『東方、ホドウ・センク！　……西方、アシュマ・アトー！』
場内にアナウンスが響き渡った。
「お、化け物君の登場か」
アルスティーンは一人ごちた
「あの方が『化け物』さんですの？」
アーチェルがアルスティーンの独り言に反応したようだ。
「え、ええ。そのようですね」
アーチェルはオペラグラスを取り出し『化け物』の顔を見てみた。

すると……
「あ！　あの方はっ……！」
オペラグラスのその先にいた『化け物』はアーチェルが船に囚われていた時、何故か単身アーチェルを奪いに来て殺された『仮面の男』と瓜二つ……いや、まさに本人そのものだった。
ザンバラにきられた、少し濃い目の栗色の髪の毛。
しなやかで猫科の動物を連想させる鍛えられた肉体。
彫の深い端正な顔立ちに、髪の毛と同じ色で、深い影と虚無感を湛えた瞳。
アーチェルは端正な顔立ちで陰のある男に何故か惹かれた。
いや、惹かれたとしても、それを本人はそうとは認識出来ていないだろう。
しかし何故、死んだはずの人間が、ここにいるのか？
何故わざわざ武道大会などと、目立つ場所を選んだのか……？
何故あの男に、惹かれているのか……？
それは、アーチェル本人にも分からない事ばかりだった。
「あの方？」
アルスティーンは、アーチェルの様子から、知っている男なのかと感じた。
ガルマインもアーチェルの反応を訝しがって、オペラグラスを取り出し覗いて見た。
「！　あ奴はっ！！」
すぐさまガルマインは、側近の者に耳打ちをする。
「！」
アーチェルはガルマインの行動に危険なものを感じた。
アーチェルはアルスティーンにすがる事にした。
アーチェルは努めて大きな声で
「アルスティーン様、あの殿方……『アシュマ・アトー』様の試合が終わりましたら、わたくしの所までおいでいただくよう、取り計らっていただけませんか！？」

そう願い出た。
アルスティーンはアーチェルの剣幕に多少驚いたが、何か含む物があると感じ、アルスティーンの側近の物を呼んで、ガルマインにも聞こえる声で言う。
「あの者……アシュマ・アトーなる者を、試合が終わり次第、アーチェル様の元へ、必ずお送りする様に取り計らえ」
ガルマインは、
「ちっ」
軽く舌打ちをし、再び側近を呼んで耳打ちをし、不機嫌な体で再び座りなおす。
アルスティーンの侍従は、
「はっ」
そう答え更にその部下に何事かを伝え、元の場所に着いた。
かーん、と乾いた音がして、審判の「それまで」という声が響いて、会場が沸く。
が、これは勝者を称えて沸いているのではない。
あちこちから怒号と罵声が聞こえてくる。
それは、一体何故か？
審判も少し困惑の呈だったが、勝者の名乗りをあげた以上、判定を覆すわけには行かなかない。
三人が少し視線を外しているうちに、試合は呆気ない程簡単に終わってしまったのだった。
「あっ」
アーチェルが小声を漏らし、試合を見逃した事を残念そうにしていた。
アルスティーンも何が起こったのか、戸惑っている。
続いて第五試合が始まるようだ。
『東方、ムータ・ハホベル！　……西方、オルバニアン・マグマイヤー！』
双方、所定の位置につき一礼をなす。

ガァ～ン！
銅鑼の音と共に試合が始まった。
「はっ！」
気合を漏らしオルバニアンは上段に構えを取った。
それに対して相手方は、切っ先をオルバニアンの喉元にぴたりと狙った崩した正眼の構えを取る。
オルバニアンは、相手の切っ先が、だんだん自分に迫ってくるような錯覚に陥った。
オルバニアンは、これが相手の誘いと共に、一撃必殺の構えと見て、切り込みたくなる衝動を必死にこらえる。
相手も相手で、先ほどの上段から繰り出される、稲妻のような一撃を、試合場の影から見ていて、迂闊（うかつ）に手を出すのは危険として、動き出せないでいた。
じりじりと時間だけが過ぎていく。
オルバニアンも相手方もだんだんと息が上がる。
たまらず、相手側は、
「ふぅーっ」
と、大きく息を切らせた。
次の瞬間、間合いの外から、オルバニアンが飛び込んできて、一気に間合いを詰め、上段からの一撃を見舞う。
相手方も慌てて下方から、オルバニアンの喉元めがけて突きを入れてきた。
オルバニアンは、首をひねって相手方の突きをかわすと共に、相手の肩口へ電光石火の一撃を送った。
ごきっ！　と、鎖骨の砕ける音がして、相手方は手で肩口を押さえ、よろよろとその場にへたり込む。
「それまで！　勝者、西方、オルバニアン・マグマイヤー！」
会場が沸いた。
オルバニアンは初めてその場で大きく息を吐いた。
「まぁ、アルスティーン様、あのオルバニアンというお方、又、勝

ちました」
「そうですね。中々やりますね」
何故かこの二人はオルバニアンに肩入れしている。
「さて、次は化け物君か。今度こそ試合をちゃんと見ないとね」
アルスティーンはおどけて言った。
「はい」
アーチェルはそう応じた。
『東方、タンブ・ルゲマ！　……西方、アシュマ・アトー！』
「あぁ……」
アーチェルは言葉を漏らした。
どうやら、アシュマの身を案じているようだった。
無意識にその小さな手で握りこぶしを作り、かすかに震わしせ、その瞳は心配げにアシュマをじっと見つめていた。
アルスティーンは横目で
（こうしてみると、まだまだ幼い少女に見えるな）
そう思い、少しアシュマという若者に嫉妬を覚えた。
「はじめ！！」
ガァ～ン！
銅鑼の音と共に試合が始まった。
試合が始まったとたん、相手方はきょろきょろと辺りを見回し、まるでアシュマを見失ったかのようにあたりをうろうろとし始めた。
アーチェルも我が目を疑った。
アシュマが消えたように見えたからである。
それは、アルスティーンや、ガルマインも同じだった。
ただ、あまりの非常識さに声を出すのが、憚（はばか）られた。
それにかまわず当のアシュマは、普通にすたすたと相手側へと歩み寄って行き、姿を現して、かーん、と木刀を叩き落し、姿を現して、切っ先を喉下へ突きつけた。
「そ、それまで！」
審判は戸惑いながら、試合を終わらせる。

「八百長！」
「いかさま！」
今やアシュマの試合では、会場は不満を表す怒号の嵐が吹き荒れている。
それほどまでに呆気ない幕切れだったのだ。
「はあぁ……」
アーチェルは安堵の声を漏らした。
（格が違いすぎる）
ガルマインは思う。
（『閃光のアシュマ』なのか？　それとも『奴等』の手のものか？）
ガルマインは、アシュマを危険視するようになっていた。
「次はオルバニアン・マグマイヤーとアシュマ・アトーとの試合ですな」
ガルマインは皮肉っぽく言った。
「あっ」
アーチェルは小さく悲鳴を漏らす。
双方、アーチェルの『お気に入り』だったから。
「大丈夫ですよアーチェル様。二人とも『無事』に試合を終えますよ」
アルスティーンはアーチェルを安心させようと、言葉を掛ける。
「そうでしょうか？」
「ええ」
「よかった」
アーチェルの安堵も束の間、次の試合を開始するアナウンスが聞こえてくる。
『東方、オルバニアン・マグマイヤー！　……西方、アシュマ・アトー！本試合が今回の決勝戦になります』
「あぁ……」
アーチェルが不安そうな声を上げる。
会場が沸いている。

ただし、決勝戦を期待しての声ではない。
これまでアシュマが、呆気ないほど試合を勝ち上がってきた事を、『不正』だと思い、『公平な』試合を望んでの怒号であった。
ガァ～ン！
銅鑼の音と共に試合が始まった。
そんな怒声など気にならないかのように、二人は刀を構える。
いや、アシュマは右手に木刀をだらりと下げたまま、構える気配を見せなかった。
反対にオルバニアンは木刀を得意の上段に構える。
（こいつ、馬鹿にしてるのか？）
オルバニアンは少しばかり憤(いきどお)った。
上段の構えに更に気合を入れたとき、『それ』は起こった。
アシュマの姿が周りの背景に『溶け込む』ように薄くなっていく。
「！？」
オルバニアンは驚愕した。
常識的にあってはならないことだった。
アシュマはどんどん背景に溶け込んでいって、今にも消えそうになっている。
オルバニアンは軽いパニックになっていた。
「えええいっ！！」
焦ったオルバニアンはアシュマの『影』に思わず飛び込んでいった。
オルバニアンの木刀は空を切った。
途端にアシュマがオルバニアンの右側に現れた。
オルバニアンはぎょっとして思わず防御しようとしたが、時、既に遅し。
オルバニアンの木刀は、かーん、という音と共にアシュマの木刀に叩き落されていた。
「攻撃が単調だな」
「え？」

オルバニアンは聞き違えたのかと思った。
試合はアシュマに勝ち名乗りを上げていた。
続いて優勝者を称え表彰台に上ったが、表彰式は怒号と罵声の中、執り行われる。
だが、オルバニアンは分かっていた。
やはりアシュマはとんでもない、『化け物』だという事を。

控え室でアシュマは、優勝のトロフィーをゴミ箱に捨て、その場を後にしようとした。
アシュマにとって、優勝のトロフィーなど、どうでも良かった。
アシュマは『ある物』を探しにこの国に来たのだ。
その『ある物』の手がかりを求めて、武道大会とやらに出てはみたが、成果は得られず別の方法を探ろうかと思っていた。
その『ある物』は必ずこの国にある。
それだけは間違いない。
いや、間違いがあるはずは無かった。
でなければ、この旅自体の意味が無くなる。
「おい、待てよ！」
アシュマは振り向く。
そこにはオルバニアンが立っていた。
「俺に何か様か？」
アシュマは自分の無銘の豪刀を腰に落とし差しにし、その場を去ろうとした。
「あれは、どういう意味だ？」
「意味？」
「俺に言った言葉だよ！　『攻撃が単調』だの、何だのって……！！」
「言ったとおりの意味だ」
「だからどんな意味なんだよ！？」

オルバニアンは今にも爆発しそうな勢いで聞いた。
「あとは、自分で考えろ」
「なっ……！！　自分で考えて分からないから、聞いているんじゃないか！！」
「そう、すぐに答えが出るか、『馬鹿者』」
「なっ、このぉ！！」
オルバニアンはアシュマに殴りかかったが、軽くかわされてしまった。
おまけに、つま先を出され、それに引っかかってオルバニアンは、派手にすっ転んでしまう。
アシュマはこれ以上つまらない時を過ごすつもりは無かった。
「こっ、このおぉ！」
「だから、単調だといった」
「なにおう！？」
そこで、後ろから声をかけられる。
「しつれいします。アシュマ・アトー様にございますな」
オルバニアンは、出鼻をくじかれた。
アシュマは振り向くと文官が二名控えている。
「役人風情に『様』付きで呼ばれる覚えは無い」
アシュマは文官などお構いなしに、去ろうとした。
「お、お待ちください、アシュマ様。アーチェル様がお呼びにございます」
「アーチェル？誰だ、それは？」
「レキソタニア王国の王女様にございます」
「王女なんかに用は無い」
「そこを曲げて……王女様が是非にと」
そこへオルバニアンが割って入っる。
「おい、待てよ！　俺の方が先口だ！　でしゃばるんじゃねえ！！」
「面倒な奴だな…」
アシュマはうんざりした様子だ。

「いいだろう。その王女様とやらの元へ案内してもらおう」
「おお……」
「有難うございまする」
二人の文官は喜んだ。
「てっ、てめえ！　逃げんのか！！まてよ、こら！！」
オルバニアンは今にもアシュマに飛び掛ろうとしている。
文官達は慌てた。
「え、えい」
そのうち一人がオルバニアンを羽交い絞めにする。
「なっ！！　てめぇ、何しやがる」
「さぁ、案内してくれ。ここにいてもろくな事は無い」
アシュマは面倒くさそうに言う。
「はっ、はい……こちらへ」
残った文官がアシュマを案内した。

アシュマは、文官に連れられて城中を移動して行く。
そのうちの高い塔の……北の大東の入り口へ着いた。
この塔のかなり高い所にアーチェルは半ば幽閉されているそうだ。
それを思うと、
「アーチェル様が不憫でならない」
文官は漏らしていた。
北の大塔は五つある大塔の内の内の一つで、主に賓客用の部屋と施設がある。
内部は互い違いの二十螺旋の階段が外壁のすぐ内側にあり、一階フロアには放射状にエレベーターが六箇所設置されている。
この内部レイアウトは基本的に残りの四つの大塔と同じであると言う。
ただし中央大塔は、東西南北の大塔より大きいので、スケールが違うと言う事だった。

入り口の脇には屈強そうな男たちが警護についていた。
「どこへ行く？」
アシュマたちが塔の中へ入ろうとすると、男達に呼び止められた。
「アーチェル様のところへ」
アシュマを案内してきた文官が応じる。
「それはならぬ。何人たりともアーチェル様の所への人の出入りを許してはならぬとのガルマイン様のお達しである」
「これはしたり。それではまるで幽閉ではござらぬか。アーチェル様はこの国の賓客。かような措置が許されようか」
「賓客なればこそである。自由に人が出入りできるとなればアーチェル様の警護に支障が出る」
「このお方は、アーチェル様直々に御呼ばれした客人におわす。これはアルスティーン殿下も御承知の事。それを邪魔したとあっては警護の任に当たっているガルマイン殿のお立場も悪くなり申そう」
ガルマインの部下と思しき男たちは、向き合ってひそひそと何事かを話し合っていたが、やがて……。
「アーチェル様のお客人となれば話は別。通られよ」
道を開ける。
アシュマは文官の後を追って塔の中に入って行く。
「アシュマ様、不快な想いをさせてしまい申し訳ござらぬ」
「いや、良くある事だ」
「今の男たちはガルマイン・デッドと申す、我が国の武芸師範役の手の者達です。最近では、軍部などとも通じていて、色々とよからぬ噂など常に付きまとっています。アーチェル様も半ば拉致する形でレキソタニアからつれて来られたようなもの。今ではガルマインに物申す事が出来るのはアルスティーン殿下だけのようなもの。情けない限りです……」
アシュマは、
「何処にでも、そのような輩はいる。気にするな」
無表情なまま言った。

塔を上りある部屋の前に来る。
扉の前でも、塔の入り口と似たような問答が行われた。
そして、ここはアーチェルが軟禁されている部屋の中である。
詳細は聞き取れなかったが、くぐもった声が漏れてきたのでアーチェルは扉の方へ歩み寄って行く。
「アーチェル様、あぶのうございます」
侍女がアーチェルを諌(いさ)める。
すると、
「大事無い」
アーチェルは更に扉に近づいていく。
すると、
「アーチェル様」
扉の向こうから文官の声がした。
「はっ、はいっ！」
少し間の抜けた声で、アーチェル自らが、応えるかたちになった。
「アシュマ・アトー様をお連れしました」
「！　す・すぐにお入りになって下さい」
アーチェルが慌てて、扉から飛び退く。
「アーチェル様、はしたのうございます」
侍女が追いかけていったが、プシュッ、と音がして扉が左右に開いてしまった。
アシュマは臆する風も無く扉をくぐり、入り口のところでアーチェルと鉢合わせた。
アーチェルは、始め驚いた風だったが、勤めて落ち着いた様に装い、微笑(ほほえ)む。
「い、いらっしゃいませ、アシュマ様」
「あんたが、アーチェルか。世話になる」
アシュマは言い、部屋の中へと入る。

「それでは、私はここにてお待ちしています」
アシュマを案内してきた文官は、アシュマが出てくるまで部屋の外で待つようだった。
部屋の中は落ち着いた雰囲気で、調度品もすっきりして品のある物がそろっていた。
アシュマはこの部屋に好感を持った。
部屋の照明も、明るすぎず暗すぎず、それが落ち着いた雰囲気を醸し出しているのかもしれない。
この部屋は、元々アーチェルの部屋ではなく、ノリトレアに帰属するわけだから、この部屋を設計した者なり、内装を担当した者なりのセンスが良い事になろう。
「アシュマ様。こちらにお座りになって下さいませ」
アーチェルが直接応接間にアシュマを誘い、ソファに座らせる。
「アン、アシュマ様にお茶を淹れてくださいな」
アーチェルは侍女に命令を下す。
「はい、アーチェル様……」
そう応え、頭を上げてアシュマを見つめた。
あの折、仮面の男が現れたとき、侍女もあの場にいたのである。
仮面の男とアシュマが瓜二つなのをみて、危険な香りを嗅ぎ取った。
「アーチェル様お耳を……」
「アン。何事か」
「お耳を」
「なぁに？」
侍従はアーチェルの側へ寄り耳打ちをする。
アシュマはそれを見てみぬ振りをする。
アシュマはそんな事を何度も見せ付けられてきたのだろう、そんな事はとうに気にしなくなっている。
（アーチェル様あの殿方は危のうございます）
（大事無い。さがれ）

（しかし、王女……）
（アシュマ殿に失礼である。さがれ）
（はい）
侍従は頭を下げて、お茶を淹れに行った。
「失礼しました。アシュマ様」
「……気にしていない。用件は何だ？」
「……」
アーチェルは暫くアシュマを見つめていた。
そして、アーチェルは何か、感極まったのか、押し黙ってしまった。
いや、話す事が出来なくなっていた。
「……どうした？」
アシュマは、アーチェルの様子がおかしい事に気がつき、あらためて彼女の顔を見つめた。
実際、高貴な人の顔を眺める事は、大変失礼な事であるが、アシュマはそのような事には関せずにアーチェルを見つめている。
二人は暫し見つめ合う形になっていた。
そしてアシュマは思った。
そこにはガラス細工の様に繊細で、迂闊（うかつ）に触れてはすぐにも砕けてしまいそうな、そんな危うい美しさを湛えた少女がいることを。
そして、そんな脆さをもった少女をアシュマは何故か不憫に思った。
「やはり、『あの方』ではございませんのね」
「……『あの方』？」
「ええ……。でもよくよく考えればそんな事はないのに……」
アーチェルは悲しげな瞳を見せた。
続いてアーチェルは自分が連れ去られてここに来るまでの経緯を話し始めた。
半ば拉致されるように船に乗せられた事。
船では軟禁状態で旅をしてきた事。

仮面の男がやってきて船内を血に染めながらアーチェルの元に来た事。
ガルマインに仮面の男が倒された事。
そして、仮面の男とアシュマが生き写しだった事。
「……そして自分が仮面の男だと……」
「ええ、そしてもしそうなら、ガルマインの手からお護りしようと思ったのです」
「……そうか……」
アシュマはこの娘は意外にも芯が強いと思った。
「御本人でないにしても、関係者、と言うことはないのですか？」
アーチェルはアシュマの身を案じ、そう聞く。
「……ないな。全く」
アシュマの応えは素気ない。
「それでもガルマインはきっとあなたに害をなします」
「……関係ないな、俺には」
「では、何故この国に？」
アーチェルはアシュマにすがりつく。
「探し物があってな。そいつの為だ」
アシュマは茶をすすりながら答える。
「……それにしても何故こんな素性も知れない男に加担するんだ？」
「血を見たくないのです。わたくしのために、もう……。それに……」
「それに？」
「あなたに、死んで欲しくないのです」
「何故？」
「それは……」
アーチェルは応えに窮していた。
何故なら、自分でも何故そうであるのかが、分からなかったからである。
「仮面の男と俺を重ね合わせているのなら迷惑千万。止めてもらお

う」
「確かにそうかも知れません。……でも、それだけではないのです！」
「では、何があると？」
「……自分でも……よく分かりません……」
アーチェルはあの時……アシュマを初めて見たときから惹かれていたのかもしれない。
だが、アーチェル本人はそれを知ってか知らずか……はたまた、運命の悪戯か……、それを自覚できないでいた。
「……そうか……だがこの俺に加担するなら、それは無意味な事だ」
「何故です？」
アーチェルは逆にアシュマにすがる様に尋ねる。
しかし、次にアシュマから発せられた言葉は、アーチェルにとって心臓に氷の刃を突き立てられるよりも、残酷なものだった。
「もう、べっとりと、血に塗(まみ)れているって事だ。そして何時(いつ)、誰に倒されるかわからない……そんな男なんだ、俺は。だから、護ってもらわなくていい……」
「そんな……」
アーチェルの瞳が涙に潤む。
アシュマはその瞳を見て後悔をする。
少し言葉が過ぎたようだった、と。
「……少し長居をし過ぎたようだ」
アシュマはひっそりとその場を立った。
「……」
アーチェルは下を俯いて押し黙ったままに、アシュマは一瞥(いちべつ)し、その場を後にした。
アシュマが居なくなった後でアーチェルは呟く
「……わたくしは……無力だわ……」
アーチェルの眼から涙が零れ落ちた。

「ガルマインという男は余程、評判のよくない男なのだな」
アシュマは案内の文官にむかって言う。
「だから、よくない噂が付きまとうと、そう言ったじゃないですか」
「……そうだったな」
アシュマが受ける。
その時、向こう側から先ほど別れたもう一人の文官が駆け寄ってくる。
「はぁはぁはぁ……ア、アシュマ様……」
「お、おい……もう少し落ち着いてから話せよ」
同僚の文官が背中をさすりながら言う。
暫くして文官がしゃべり始める。
「ア、アシュマ様……ハグム・マグマイヤー様が是非お目に掛かりたいと」
「……『マグマイヤー』？」
「今日の決勝戦の相手がオルバニアン・マグマイヤー様で、そのお父上がハグム・マグマイヤー様でございます」
「……そうか、そうだったな。で、そのハグムとは何者だ？」
「この国のもう一人の武芸指南役でございます」
「……そうか、武芸指南役か……で、どんな奴だ？」
アシュマは手を顎にあてながら言う。
「はい。よく言えば質実剛健、悪く言えば……少々頑固な方かと……」
「……頑固か……人柄は悪くはないのだな？」
「はい。あの方の悪い噂はとんと聞きませぬ……多少頑固な事を除けば……」
「……そうか。……いいだろう、連れて行ってくれ」
「は……ですが、今日はもう遅いかと……明日になさっては」
「……そうか、そうだな。……じゃあ俺は戻る」
「も、戻るって一体どちらに！？」

「……城下町の宿屋だ」
「ちょ、ちょっと待ってください。アルスティーン様にアシュマ様の部屋を城内にとれとの仰せですので、是非そちらにおいでになって下さい」
文官は驚き、慌てて言う。
「……そうか、なら頼む」
アシュマは文官と共に別の塔へと歩んで行った。
アシュマ達の着いた塔にも、屈強そうな兵士たちが入り口を護っていた。
文官たちが歩み寄って行って、二言三言言葉を交わす。
アーチェルが半ば幽閉されている塔と違い、ここの警護をしている兵士達は好意的なようだ。
「さあ、アシュマさん行きましょう」
「……」
アシュマ達は塔の中へ入って行く。
アシュマにあてがわれた部屋はこざっぱりしていて、清潔感のある部屋だった。
アシュマは困ったと思った。
と言うのも、アシュマはこんな綺麗な宿などめったに泊まった事がなく、いつもは城下町の裏にあるような場末のぐれ宿に泊まるのが常であったから。
つまり、この様な綺麗な宿など泊まり慣れていないのである。
「……仕方ないか」
アシュマはそう呟き、シャワーを使って、遅めの床についた。

その『影』達は闇夜にまぎれてやってきた。
アシュマの眠る塔の入り口、そこで警備している兵士たちは、その影の存在に気づいていない。
影達は一言も発せず、いきなり闇から躍り出る。

兵士達は驚き、抵抗も出来ずに、無言の内に葬り去られた。
続いて影達は、塔の入り口から静かに侵入し始めた。
影達は塔の要所要所で、そこを護っている兵たちに、その猛威を振るう。
階段の踊り場、廊下、そしてアシュマの眠る部屋の前の入り口……。
影達は音もなく警護の兵たちを倒していく。
どうやら、影達の目標はアシュマのようだ。
影達は静かに扉に手をかけ、中へと侵入して行く。
しかし影達は、アシュマを探しあちらこちらと部屋を見回すが、何処にもアシュマの姿は見当たらない。
影達が全員部屋の中へと入った頃合、突然扉が音を立てて閉まった。
影達が驚いて扉の方へと視線を向けると、そこには探しても探しても見つかる事のなかったアシュマがそこにいた。
果たしてアシュマは部屋の外にいたのか、それとも巧みに部屋の中に隠れていたのか、兎にも角にもアシュマがそこにいたのは事実である。
「……気配の消し方がなっていない」
アシュマは影達に言い放つ。
「……そんな中途半端な気配の消し方では殺せるものも殺せまい」
影達は膨れ上がる殺気を抑えきれずにアシュマの方へ踊りかかる『気配』をみせた。
それに相反してアシュマの姿はゆらゆらと揺れて漆黒の闇に溶け込んでいった。
影達は見失ったアシュマの姿を探しながら警戒する。
(気配を消すというのはこういう事だ)
アシュマの声が部屋中に響き渡って、影達は辺りを見回す。
(お前たちの目には『見えて』いるかもしれないが…)
ズシュッ！

鈍い音がして一人目の影が『犠牲』となった。
（お前たちには俺を『認知』する事が出来ないだろう）
ドシュッ！
二人目の犠牲者だ。
（秘剣『朧霞』……！！）
最早影達は恐慌状態に追い込まれていた。
アシュマにとっては、うってつけの獲物に過ぎない。
そしてこの部屋では一方的な虐殺が始まった。

「これを？　君一人が？」
アルスティーンはアシュマに訊く。
「……ああ」
これが、アシュマとアルスティーンの初体面の挨拶となった。
アルスティーンは、部下の報告で、まさか自分が用意した寝所でこの様な惨劇が繰り広げられようとは思わなかった。
さすがに責任を感じたアルスティーンは自らアシュマの元へ詫びに来たのだが……この狭い空間で二十数名の斬殺死体を見たときには心配を通り越して呆れた。
辺りでは軍警察隊が現場検証をしている。
「さすがに武道大会の優勝者だね……」
「……」
アシュマはアシュマで、こんな人数の斬殺死体を見ているにもかかわらず、軽口をたたいていられるアルスティーンの神経に呆れ返っていた。
「すぐに他の部屋を用意させよ。あと見張りの者の御遺族の方々に私の名でお悔やみを。その後御遺族の方々に見舞金を」
「はっ。畏まりました」
「さて、アシュマ殿？　お召しのものを取り替えましょうか？」
「？　……！　ああ」

アシュマは自分が返り血にまみれているのに気がつく。
そして、つくづく神経が図太い人だなと呆れた。
「さて、じゃあすぐに用意させるから。少し待ってて下さいね。しかし、あれだね。ガルマインの手のものだね。これは」
「……そうか」
「君も動じない人だね」
「……慣れてるので……」
「因果な人だね、君も。……多分、これはガルマインの手の者の中でも『影の者』と呼ばれる特殊部隊の実働隊だろうね」
「……ガルマインか。やはり手を出してきたか」
「お？　心当たりでもあるみたいだね？」
「……多少は」
文官が軍警察の現場検証を巧みに避けつつアルスティーンの所にやって来て、
「アシュマ様のお召し物と、お部屋の準備が出来ました」
そう告げた。
「そう？　アシュマ君、用意が出来たそうだよ？　どうする？」
「……お言葉に甘える」
アシュマは文官に案内されて、新しくあてがわれた部屋へと向かっていった。
そんなアシュマの後姿を眺めながら、
「……ふーん……なかなか狸じゃないの……本音を見せないのは剣者としての宿命なのかね？」
と、一人呟く。
アシュマは文官に案内されて階段を上っている。
「……なかなか食えない男だな」
「は？　なにか？」
「……いや、なんでもない」
アシュマは文官に返事を返す。
（誰が敵で、誰が味方なんだ？）

アシュマはそんな事を考えていた。

同時刻。
ハグム・マグマイヤーの屋敷。
館の中へ『影』が十数人侵入した。
影共は気配を殺し、館の中を屋根裏伝いに侵入し、目標に向けて移動して行く。
影共の目標は、『錬武館』館長、ハグム・マグマイヤーの寝室であった。
天井板をゆっくりと外し、気配もなく、降りて行く。
ハグムの枕元、床の間に掲げられている掛け軸を捲ろうと……。
「そんな所を見ても何も見つからぬよ」
布団に入ったまま、ハグム・マグマイヤーが言う。
影共はギョッとして、ハグムを見る。
ハグムは、布団を払いのけざま刀を振るう。
どうやら、刀を抱いて床についていたのだろう。
腕を飛ばされた者、膝の下から切り飛ばされた者、　股を切り割られた者……あっという間に三人が戦闘不能に陥る。
「出会え！　出会え、出会えー！！　者共、曲者じゃあ！！」
ばたばたと、館のあちこちから、足音が響いて来る。
そして館の至るところで剣戟の音が聞こえてきた。
そんな中、オルバニアンも戦っていた。
オルバニアンは刀を正眼に構え、剣を細かく回す。
「こんな、めんどっちい、戦い方、俺の柄じゃねぇや！」
そうは言いながら、一体、二体、三体と相手を切り伏せる。
「上段で斬ればこんな奴らもっと……！！」
などと、言ってはいるが上段なんか構えると、切っ先が鴨居などに引っかかって、おそらくオルバニアンは死んでいた事だろう。
「くそっ！！」

後から後から湧いてくる『影』共に悪態をつく。
再びハグムの部屋。
ここでも戦いはまだ続いていた。
突然部屋の一角が沈み込む。
床下では建物の柱を受ける、要石が取り外され、その下には隠されるように甕(かめ)が埋められていた。
「しまった！！」
ハグムは床下で何が行われているか想像がついた。
『影』は甕の中を探ってみる。
するとそこには螺鈿細工の漆器の箱が出てきた。
『影』は目を細めて喜びを表していた。
「ひゅっ！」と、口笛が吹かれると、『影』共が傷ついた仲間を抱えて雨戸を蹴破り、次々と逃げていく。
ハグムと師範代が庭まで降りる。
「師匠、やられましたな」
「ああ、半分だけな。要のもう半分はこちらが握っておる」
「軍警察に届けますか？」
「こちらの被害は？」
「軽傷者が七、八人」
「ならば良かろう。話がややこしくなるだけじゃ。呼ぶには及ぶまい」
ハグムと師範代は廊下に上り廊下を右に曲がって東に進んでいた。
「師匠、明日のアシュマ・アトー殿の御来訪、お取り止めを願い出た方が宜しくありませぬか？」
「いや、当初の予定通り行おう。寝起きいたすのは当分館の北側にて行え」
「そうですね。それに幸い死亡者は無し。重傷者無し、軽傷者七、八名。明日の総稽古に支障はないかと」
「そうじゃな、そういたそう」
「はっ」

夜半、ガルマインの屋敷……その一室、ガルマインが胡坐をかいて、瞑想していた。
丁度類はほとんど無く、ガルマインの前には炉が切ってあり、上から自在鉤、その鉤には鉄びんが掛かっており、湯を沸かしている。
その一室は窓が無く、光りが入ってこない。
そこは囲炉裏の炭の明かりしかなく、部屋を狭く重々しい雰囲気にさせている。
床の間があり、その壁には掛け軸が掲げている。
この部屋もいざともなれば、各調度品が入れ替わりモニター類等、発令所としての機能を併せ持っていた。
そこに音もなく、闇にまぎれて『男』が現れた。
「ガデウィンか……」
「は……」
「アシュマの方はどうか？」
ガルマインは息子に視線を向ける。
「は……それが」
「失敗したか」
「……は」
「我が『影の者』の中でも精鋭を選りすぐった者たちだぞ？　それでも失敗したか？」
ガデウィンを見るガルマインの眼光が鋭くなる。
「は……完膚なきまでに……全て死亡し、アシュマなる者は無傷だったようです」
「そうか……俄かには信用は出来んがな」
「真にもって申し訳なきことにて……」
「もうよい。これでアシュマなる者が『例の者達』の尖兵である可能性が高くなったといえよう。それにしても、『完膚なきまで』にとはすさまじき腕かな。わしとて、あの者達を前にしてそこまで出

来るとは言えんのに」
「お戯れを」
ガデウィンは今の言葉を『戯れ』で、片付けたが、ガルマインの言葉は半ば本音を言っていた。
あの狭い部屋で二十数名の攻撃をかわして、しかも無傷に敵を斬殺する事が出来るだろうか？
「ハグムの方はどうか？」
ガルマインは話を転じた。
「は、こちらの方は御満足いただける内容かと……これを」
ガデウィンはガルマインに手に入れた螺鈿細工（らでんざいく）の箱を手渡す。
それを、ガデウィンは手に取て見る。
「ほう、これは中々逸品」
ガルマインは中を開いてみる。
中には護り刀一振りと書付があった。
ガルマインは先ずは半分の紙を見る。
続いて、短刀を抜いてみる。
「父上、如何なされたので……まさか偽物？」
ガルマインは短刀を鞘に収めながら……
「半分はな」
そう言い放つ。
「父上！　では……」
「だが、元老院の爺（じじい）どもを騙すにはこれで十分」
「は」
「まぁ、よい。今日はもう休め」
「は」
ガデウィンの気配が消えた。
「アシュマ・アトーか……我が障害になるや否や？」
ガルマインは独りごちて、再び瞑想に入った。

第四節　それぞれの思惑

アシュマは昨日の文官二人に連れられて、ハグム・マグマイヤーの道場へ向かっていた。
途中アシュマは、
「ズシン、ズシン」
何か巨大なものが、歩み寄ってくるような音が響いてくるのを聞く。
アシュマは振り向き、音の発生源を探す。
すると、機械仕掛けの巨人が、こちらに歩み寄ってくるのに出くわし、驚いた。
見るに、身長は六メートル～六メートル半といったところか。
機械仕掛けの巨人はアシュマの直ぐ横を通り、そして去って行く。
「……こ、これは？」
アシュマは思わず呟いていた。
「ああ、あれは『魔導機兵』ですね。今はこの城の警護に当たっていますね。……魔導機兵を見たことが無いんですか？」
「ああ……田舎者だからな、俺は……。こんなに近くでは見たことがない。遠くからなら見たことがあるが……。あれが噂に聞く魔導機兵か……」
「でしたら、説明いたしましょうか？」
「ああ、頼む」
「では。アシュマ様は剣士でいらっしゃるから、『念者』でらっしゃいますよね。
「ああ、そのつもりだが……」
「それでしたら魔導石はお持ちですよね」
「ああ、持っている」
アシュマは首から下げている魔導石を襟元から取り出して見せた。
「これはアシュマ様も知っていることと思いますが、魔導石は『念』

を加えると『念の力場』が出来上がって、銃弾等から身を護ってくれると聞きます。また、力場同士が重なると、その重なった部分が相互に打ち消しあう事も知っていますよね？」
「ああ、だから念者同士は刀剣で戦う」
「とまぁ、魔導石は『念』を加えると『念』を増幅して『力場』を作ります。魔導機兵はその力場を利用してエネルギーを取り出して動力にし、動きます」
文官は得意げに説明を続ける。
「……」
アシュマは感心して声も出ない。
「魔導機兵の場合、一人で操縦しますから、おのずと力場を発生させる量も決まってきます。これはせいぜい魔導機兵の動力を得るのに精一杯でしょうから、自分を護るだけの力場を得るのは難しいでしょう」
「そうなのか……」
アシュマは徐々に遠のいていく魔導機兵を眺めている。
「中には突出した念者がいて、機体そのものを力場で包めるほど強い念を発揮しますが、今度は魔導石の大きさが足りなくて、結局念で周りを包むことが出来ない場合も聞きますね。素人考えでは、魔導石の数を増やせばいいのにと、思うんですけど……何でもバランスが取れないそうなんですよ」
「……バランス？」
「多分、全部動力につぎ込んでしまうか、念を全部『念導境界面』を形成するのに、使ってしまうんでしょう。まぁ、エンジニアではないので詳しい事は分かりませんが」
「……」
もはやアシュマは黙って聞いていた。
「これは家庭の電力から、車、列車、飛行機、船、果ては空中戦艦にまで及んでいます。空中戦艦などに至っては高さ二メートル直径一メートルの巨大な魔導石、百個に六百人の魔導士がついて浮力と

動力を発生させている程です」
「……車か……」
アシュマは車という言葉に反応した。
「まさか、アシュマさん、車を見たことが無いなんて言うんじゃないでしょうね？」
「田舎者だからな……、俺は。旅の道すがら、さすがに車や列車、飛行機なんかは見てきたが、車には乗った事がない。魔導機兵に至っては今、初めて見た。いや、勿論バスや列車と言う物には乗った事があるがな」
「アシュマさん……」
「……俺の故郷では車は蓄電池で動いていたよ。動力の源は風車だ。それこそ供給量が限られていて、俺の村では皆が譲り合いながら使っていたよ。それが当たり前だと思っていた。列車なんか以ての外で、駅に行くまで、まる七日間かかったよ」
「どんな所ですか？　そこは？」
「どうせ言っても分からんさ」
アシュマ達はハグムの道場へといそいだ。

ハグムの道場が見えてきた。
ハグムの道場は、『住居兼道場』の造りになっていた。
その点はガルマインの館と、同じである。
アシュマは昨夜、アシュマのところと同じで、ハグムの所も襲われたと聞いた。
昨夜ここでも血の惨劇が行われたことだろう。
それを思うと、アシュマは遠慮した方が良いのではないのだろうか、と思う。
「聞けばハグム殿の所にも『影』のものが現れ、多少なりとも被害が出たとか。ここは日を改めた方が良いのではないか？」
「我らもそう勧めたのですが、大丈夫、今日是非にとの向こう側よ

りのたっての願い。我らも、それを無下にする事もできず……」
「先方がそうならば致し方なかろう」
玄関には既に門弟が控えていて、文官達が門弟と二言三言話し合うと門弟が、
「どうぞ」
奥へと誘う。
廊下を伝って、道場へ出る。
道場は外から見たよりも広く感じた。
武者窓から漏れる光がまぶしい。
既に左右に門弟たちが控えていて、奥の見所にはどっしりと貫禄の座った、白髪交じりの壮年の男性が座ってこちらを見ている。
アシュマは、おそらくこの男性がハグム・マグマイヤーだろうと見極めを付けた。
ハグムの近くには、師範と思しき男性と、昨日戦ったオルバニアン・マグマイヤーが控えている。
当のオルバニアンは、ばつが悪そうに目を伏せていた。
その時ハグムと思しき壮年の男性がアシュマに声をかけてきた。
「おお、アシュマ・アトー殿にございますな？　私が練武館館長ハグム・マグマイヤーにございまする。今日はよくぞおいでくださった」
アシュマはその場に端座し、
「アシュマ・アトーです。昨夜大難があったのにも関わらず、お声をかけていただき、恐悦至極に存じます」
そう応えた。
「あの程度の賊、何のことがあろうや。先ずはこちらに」
アシュマは見所へと誘われた。
「御免……」
アシュマはハグムの隣に座る。
「用意！」
師範代各の男が声を張り上げる。

左右に別れていた門弟たちが一斉に立ち上がり、各々竹刀を構える。
「はじめ！！」
の、声で一斉に組み稽古が行われた。
その人数もさることながら、質も高いもので、アシュマは、
「これは……」
感嘆の声を漏らした。
おそらくハグムの人柄であろう。
皆、きびきびとした動きで、隙のない組稽古である。
途中、ハグムが声をかけてきた。
「アシュマ殿は、かの有名な『閃光のアシュマ』殿かな？」
「高名かどうかは知りませぬが、私をそう呼ぶものも居る事は確かです」
アシュマは照れもしなければ、威張った風でもなく、ただ無機質的にそう答える。
「実は昨日の武道大会をですな、わしも見させて頂いた」
「は」
「全部見事な一本勝ちでござったな。あれは如何なる技を繰り出したのでございますかな？」
「！？」
アシュマは既に自分が試されているのを悟った。
いわば真剣勝負を挑まれているようなものだ。
下手な返答は、こちらに一撃必殺の返し技が来るとも限らない。
これが今回の意図であったかと思い知らされた。
「さて、如何に？　アシュマ殿」
アシュマは答えに窮する。
「さて、如何に？」
ハグムは答えを要求する。
アシュマは、
「邪なる剣にあれば、技と呼べるものではございませぬ」

そう答えた。
「はて、邪剣であると？　観覧席から見たところでは、邪剣など、と呼ぶには及ばない見事な試合であったと記憶しておるが？」
「……買い被りでございましょう」
その時、師範代の
「止め！」
の、一声で、潮が引くように、門弟たちが左右に分かれる。
おそらく、普段のときより稽古の時間が短いのだろう。
息の上がった門弟など一人そしていない。
アシュマは助かったと思った。
しかしそれは甘かったと思い知らされた。
「さて、アシュマ殿」
ハグムがアシュマに声をかけた。
「その剣、わが身で試させて頂こうかの？」
アシュマは、来たかと思った。
「父上！！」
オルバニアンは悲鳴に近い声を発する。
「騒ぐでない！」
二人のやり取りを見て、ハグムが本気であるのを見て取り、仕方あるまい、とアシュマは思った。
望まぬ試合であったが、こうなれば試合わねばなるまい。
「……お手柔らかに」
館内中が、ぴーんとした緊張感に包まれる。
なにせ一国の武芸師範が一介の武芸者と立ち会うのだ。
しかも、ハグム側から誘っておいてだ。
いやが上にも緊張が高まろう。
アシュマは道場の竹刀を借り受ける。
丈寸より少し長い竹刀だ。
ハグムは自分の竹刀を使うようだ。
二人は道場の中央に歩み寄り、所定の位置に着いて一礼をなす。

「いざ！」
ハグムが気合を発したのに対して、アシュマは無言で相手に対した。
ハグムは始め正眼に構えをつける。
対してアシュマは構えを下段につける。
……いや、無造作に竹刀をだらんと下げていた。
ハグムは正眼から静かに、ゆっくりと竹刀を上段につける。
アシュマは『秘剣・朧霞』を使った。
アシュマの姿は道場に射してくる光に同化する様に溶け込んで行く。
ハグムはそれでも上段の構えを崩さなかった。
ハグムは周りの気配を探るように静かに瞼を閉じる。
道場内には濃密で緊張感のある時間が流れ、オルバニアンをはじめ、門下生全員が動けないでいた。
何時までも永遠に続くかと思われた、張り詰めた空気は一気に崩れ落ちた。
「ええいぃっ！！」
ハグムが虚空に竹刀を振り下ろしたとき、かっ、と音がして、ハグムの竹刀を受け止めたアシュマの姿が現れた。
アシュマはそのままハグムの竹刀をはじき返し、素早く上段に転じ、ハグムの脳天めがけて竹刀を振り下ろす。
「甘いわっ！！」
ハグムは竹刀を右の脇構えから鋭い一撃をアシュマの胴へ送り込む。
誰もが、ハグムの一撃が胴に決まったと思った瞬間、その一撃はアシュマの像をかき切り、虚空に流れた。
「なっ！？」
次の瞬間、アシュマの姿はハグムの真後ろに現れ、軽く脳天をたたいていた。
トン……と、ハグムを叩いた乾いた音が、館内に静かに響き渡る。

「お、親父……」
オルバニアンの声はしんとした道場内に響き渡った。
「……秘剣、空蝉……」
アシュマは誰にも聞こえないような小さな声でそう呟いて、一礼し元の場所に端座して控える。
ハグムは一瞬何がおきたかが解らずにいたが、はっ、として気を取り直しやはりアシュマと同じように、元の場所に端座した。
門下生一同のあちらこちらから、落胆のため息が聞こえて来る。
ハグムはアシュマに
「いい勉強になり申した。こちらにおいでなされ」
見所の元の場所へ、アシュマを誘う。
「用意！！」
再び師範代の声が道場内に響き渡る。
「はじめ！！」
門下生たちは再び組み稽古を始めた。
ハグムはアシュマに声を掛ける。
「よい試合でござった。いまだ自分の未熟さを思い知ったでござる」
「……いえ、自分の剣は邪剣であれば……」
アシュマはそう言うに留める。
「よろしければ、一緒に昼餉などいかがかな？」
アシュマはハグムの意図が何処にあるのか判じかねていた。
アシュマはあえて火中の栗を拾う事にした。
「は。ハグム様さえよろしければ」
「忝（かたじけな）い。オルバニアン、お前も一緒に来るのじゃ」
「……はい、父上」

……そして、そのまま午前の稽古を終え、稽古場から廊下を伝い母屋にて、アシュマは、ハグムと一緒に卓を囲んで昼餉を食していた。

昼餉はハグム、師範代、オルバニアン、文官二人、そしてアシュマを交え、会話などを交わしながら和やかに行われていく。
「アシュマ殿、お国はどちらになられるのじゃな？」
「……辺ぴな所にございますれば……」
「剣はどちらで習われたのかな？」
「……我流にて、邪剣にございますれば……こちらにて披露すべきものでは、ありませんでした。恥じ入るばかりです」
アシュマは後悔の念にとらわれていた。
「元来、剣とは相手を如何に倒すか、これが眼目であれば正邪の境など曖昧模糊としたものであって、要はこれらをいかに活用するか、それによって剣の活殺が決まると、そう身共（みども）は考えており申す」
「恐れ入ります」
「して、その剣じゃが、いかな事に使う為にこの国に参ったのじゃな？」
ハグムが尋ねる。
アシュマはだんだん自分が尋問されているような気がしてきた。
「……は、と申しますと？」
「無礼を承知でお尋ね申そう。細かい駆け引きは無しじゃ。端的に申そう。そなたの力、ガルマインの野望の為には、使っては欲しくは無いのじゃ。そなたの力、あまりに強力すぎて、ガルマインの野望の道具に成り下がって欲しくないのじゃ」
アシュマはハグムが自分を呼んだ目的はここにあったのかと……そしてアシュマは何故ハグムが自分を試すような事をしたのかを得心した。
「……それは有りませぬ。事実、夕べ殺されかけました」
アシュマが告白する。
「なんと！　それは真か？」
「……はい」
「よろしければ、聞かせてくれぬか？」
「……は」

アシュマは昨夜の『影』の襲撃と撃退の経緯(いきさつ)を掻い摘んで話す。
「なんと……そんな事が……」
ハグムは驚いた様子を隠せないでいた。
「では、最後に、この国に来た目的は？」
アシュマはこの質問の意味を図りかねた。
そして正直に自分が『ある物を探す為』に、この国に来たことを話そうかどうか迷う。
「……」
「どうされた？　アシュマ殿？」
アシュマは決心した。
「『エヴァイブ・エブル』殿に会って、『鬼虎(おにとら)』を貰い受ける為です」
「なんと！」
アシュマを除く、その場にいる全員が凍りついたように固まった。
「エヴァイブ・エブルといえば、武神とも、生きた伝説とも、語られるほどの武人ではござりませぬか」
師範代が驚きの言葉を発する。
「鬼虎と言えば、そのエヴァイブ殿の佩刀(はいとう)。鬼虎を手にする者、万の味方を手に入れるとも、万の敵を打ち滅ぼすとも言われた刀……。そのエヴァイブ殿の佩刀、またの名を『万人殺しの妖刀、鬼虎』と……」
師範代はそこで言葉を飲み込んだ。
「鬼虎をのう……そう簡単に貰い受けること叶おうか？」
ハグムも顔を曇らせ嘆息する。
「ハグム様。エヴァイブ・エブル殿がこの国にいる事は分かっております。詳しい、居所を知りませぬか？」
ハグムは更に顔を曇らせながら応えた。
「わしらも、エヴァイブ・エブル殿がこの国に来ている事までは分かっておるのじゃ。しかし、詳しい居場所までとなると、ちと分からぬ。……ううむ。あるいはガルマインが手の者を使って調べ上げ

ているやも知れぬが……これればかりはなんともならぬ」
ハグムはため息をついて、この話に蓋をする。
「……そうですか」
昼餉はそのまま重苦しい雰囲気のまま終えた。
アシュマが帰る時、ハグムがわざわざ玄関まで見送りに出てきた。
「有難うございました」
アシュマが言い、
「いやいやこちらこそ有難うござった」
ハグムが受ける。
「では、これにて……」
「アシュマ殿、エヴァイブ・エブル殿の件、考え直してみる気はござらんか？」
「……養父の遺言なれば」
「そうであるか。残念にござる」
「では……」
アシュマは二人の文官と共に、ハグムの道場を辞去した。

ハグムの道場を後にして、アシュマと文官たちの三人は、芝生の広がる、城内の広場に来た。
「アシュマ様はこれからどうなさるので？」
文官の一人がアシュマに聞いてみる。
「……ガルマインに会ってみたいと思う」
「！　アシュマ様おやめなされ」
「そうですぞ、アシュマ様おやめなされ」
もう一人の文官がアシュマを諌める。
「……やめる訳にはいかない」
「しかし……」
「アルスティーン殿に取り計らってくれんか？」
「そんな事出来ませぬ！」

「我らの首が飛びまする！」
二人の文官は飛び上がるほどに驚いた。
「ならば、このままこの足で、ガルマインのところに行くまで」
二人の文官はパニックになるほど驚き慌てふためく。
「な・な・な、なりませぬ！！」
「我ら、腹切らねばならなくなりまする！！」
「ならば、直接アルスティーン殿のところへ」
「ひっ、ひぃいいいっ！！」
「ひょえええええぇっ！！」

「……で、僕の所へ来たわけだ」
「はい」
「はい……」
二人の文官は応える。
アルスティーンの住む塔の中、文官二人とアシュマがアルスティーンの応接間にいた。
「ふわぁぁぁっ」
アルスティーンは寝巻き姿で、大きな欠伸を一つかいた。
「アルスティーン様、眠そうですね」
「アルスティーン様、こんな時間まで、いい御身分ですね」
「何言ってるんだよ、昨日の後始末やら何やらで床についたのがつい先程だというのに。まったく……ぶつぶつ……」
アシュマは一人ですたすたと歩いていき、ソファに座ってしまう。
「あ、そこ、何勝手に座ってんの！？」
「では、何処に座れと？」
「あ～～～、う～～～～……いいや、もうそこで！　で、何の用！？」
「ガルマイン殿に会うことを取り成して欲しい」
「え～～～、さっきハグムの所に行ってきたんでしょ？　それで充分じゃん」

「是非、あわせて頂きたい」
「え～～～、どうしても～～～～！？」
「是非に」
「しょうがないなぁ。ちょっとそこで待ってて。今お手紙書くから」
「忝い」
「私は一国の王子なのに、こき使って……眠いのに……ぶつぶつ……大体タメ口なのが……ぶつぶつ……」
アルスティーンはなにやらぶつぶつ言いながら隣の部屋へ消えていく。
アルスティーンがいなくなった後、部屋をぐるりと見回してみる。
意外と質素なつくりで好感が持てた。
調度品の趣味もいい。
「やりましたね、アシュマ様」
「あそこまで王子が面倒見のいい方とは知りませんでしたよ」
文官二人はわが事の様に喜んだ。

「はい、お待たせ……」
アルスティーンはまだ寝巻き姿で現れた。
「すまない、では」
アシュマは立ち上がりかけた…。
「おっとまったぁ～。まだ行けないよ～」
「？？」
「先にお使い。はい、そこのお二人さん！」
「「はっ、はい！！」」
「お使い、頼むね～～～」
「「はっ！」」
二人の文官に命じて、予め行くと言う旨を、伝えるつもりなのだろう。
アシュマは再びソファに腰掛ける。

文官たちは親書をもってアルスティーンの部屋から出て行った。
「さて、ちょっと聞くけどいいよね？」
アルスティーンが問いを発する。
「……何なりと」
アシュマがそれを受ける。
「もう駆け引きは無しだよ。自分の命を狙っているかもしれない、ガルマインの所へ行く理由はなんだい？」
「この国にいるというエヴァイブ・エブルの所在を聞くために」
「！　……いきなり重い話にもっていくねぇ。知っているかい？この国における彼の位置関係って奴を」
「いや、全然」
「今、この国は微妙なバランスの上に成り立っているのさ。それがどういうことかって言うとね……お茶飲むかい？」
「いや、お気遣い無く」
「いや、僕が飲みたいのさ、待っててておくれ」
アルスティーンが呼び鈴を鳴らすと、何処にいたのか品のよいメイドが、数人やってきた。
「お茶を持ってきておくれ。彼と僕の二人分。頼むよ」
メイドたちは頭を下げ部屋から出て行く。
「何処まで話したっけ……。ああ、この国のバランスについてだったね」
「……」
「今この国は良くも悪くも、大きな変化の波にさらされているのさ。と、言うのも父上……平たく言うとこの国の国王がね、病気を患っていて、病状が芳しくないのさ。……誰かに毒を盛られたんじゃないかっていう話も出てるぐらいさ」
「……」
「すると、次期国王は、この僕になるんだけど、どうもガルマインの動きが、きな臭いんだよね。どうやら、何か『隠し玉』を持ってるっぽいんだよ。やたら、軍部の人間ともつながりを持ちたがって

いるし、僕なんかは、彼がクーデターでもやらかそうってんじゃないかと、疑っているぐらいさ」
「随分と物騒な話だな」
「物騒といえば、父上に毒を盛っているのが、僕なんじゃないかって話も出てるね。元老院のお爺さん方は、何か意図があって、そういう話を持ち込んでくるのか、本当にそんな話を信じているのか、分からないけどね。困ったもんだよ、まったく」
「敵が多いというわけか」
「痛いところを突いてくるねぇ。正直言うとそうなんだよね。平たく言うとこの国の元老院、　……まぁ議員みたいなもんだけど、『ボク』派と『ガルマイン』派、そして少数だけど『ハグム』派。おっと、というより『ハグム』派は中立の立場を取っているって感じだね……。この国は王制を採っているけど実質は貴族の元老院による共和制の色合いが強いんだ。だから、何処の派閥が多数を得るかで、情勢はがらりと変わるんだよ。誰が敵で誰が見方か分かりにくい。困った物さ。……あ、お茶が来たね」
先ほどのメイドがティーセットをワゴンに乗せてやって来た。
メイドは手早くカップをテーブルの上に置き、お茶を淹(い)れる。
「さあどうぞ」
「……」
「大丈夫。毒なんか入ってないよ」
「なら、遠慮なく」
二人はしばしお茶を飲んで一服した。
「さて、問題のエヴァイブ・エブルのこの国における位置関係という奴だけどね、彼はあのとおり、武神だの何だのって言われているじゃない？　そして、嘘か本当か知らないけれど、彼は『万人殺しの妖刀、鬼虎』を持っている。これが一体どれくらいの戦力になるのか。味方にすれば心強いし、敵にすればこれほど恐ろしい存在はいない。たとえブラフだとしてもね」
「……」

「だけど、三者三様に牽制しあって、誰もエヴァイブ・エブルという貴重な戦力に手が出せないでいるのさ」
アルスティーンは一息ついて、残りのお茶を啜った。
「そこでアシュマ君、君と言う存在だけど、当然、彼……エヴァイブ・エブルの所に行くって事は狙いは『鬼虎』なんだよね。何で？」
「……養父の遺言によって」
「ふーん、遺言ねぇ。……まぁいいや。君がエヴァイブに負ければ、これまで通り三者三様のにらみ合いのままだけど、下手に勝ったりなんかした日には、三派が『鬼虎』を手に入れた君を取り込もうとする事は、火を見るより明らかだ。下手をすれば、派閥間のバランスや、派閥の間で暗闘を繰り広げる事にもなりかねない。昨夜のようにね」
「あんたもそうなのか？」
アシュマは鋭く切り返す。
「……派閥の領袖だ何だと言って、担がれているけど、動いたり動かなかったり、自由に出来ないんだよ。王子だの、次期王位継承者だのって言うごたごたはもう、こりごりなんだ。実際、自由になれるものなら自由になりたいよ」
アルスティーンは窓の外へ目をやり、ため息を吐く。
アシュマはそんなアルスティーンに声を掛けられず、ただ黙って見ている事しか出来なかった。

アシュマは二人の文官に案内されて、ガルマインの館の前に来た。
最初は拒まれるかと思っていたのだが、アルスティーンの親書が効いているのか、罠なのか、すんなり中へと入れてくれた。
やはり、アシュマは最初に道場に通される。
ガルマインの道場には、武者窓が無く、羽目板には黒い染みがこびり付いていて、どこか、どす黒く、陰惨な印象を与えた。
そして、道場などとはただの言い逃れ、実際はガルマインの暗殺

部隊『影』を養成する場所に他ならない。
見所には、ガルマインとガデウィンの親子が控えている。
「お役人殿、お勤め大儀である。後はこちらでアシュマ殿をもてなす故、帰られよ」
ガデウィンが見所から文官に言い放つ。
「え？　……し、しかし……」
「最早、ここにいるに及ばず。帰られよ！」
再びガデウィンは文官に言い放った。
「ア……アシュマ殿……」
「……お役目ご苦労様でした。大丈夫です。帰って下さい」
なんと、アシュマまでもが帰れと言う。
文官二人は戸惑った。
「……しかし……」
「危ない事はもう有りますまい。大丈夫。帰って下さい」
「はい……」
しかし文官の一人が、
（危なくなったら逃げるのですよ。体面など二の次です）
ひそひそと話して来た。
「わかってる」
文官達二人は、アシュマにも勧められ、帰らざるを得なくなった。
文官達が帰ったところで、ガルマインが言葉を発した。
「アシュマ・アトーとか、言ったな。我が屋敷に来た目的は何か？」
アシュマはその場に端座し、言う。
「ガルマイン殿、我が目的は、エヴァイブ・エブル殿の詳しい居所を教えてもらう事。他意はありませぬ」
ガルマインは顎をなでながら言った。
「エヴァイブ・エブルか……目的は彼か、それとも『鬼虎』か？」
「……鬼虎にありまする」
「何ゆえ鬼虎に固執するか？」
「養父の遺言なれば」

「養父とは誰か？」
「……」
「重ねて問う。養父とはだれか！？」
「……リクシル・ウォレウォリンにございます」
「リクシル・ウォレウォリンか。確か元『七賢人』の内の一人であったな」
「……！？」
アシュマは何のことを言っているのか解らない。
ガルマインはアシュマの沈黙を、肯定の意として受け取る。
「……」
「確か、リクシル自体の表の顔は『アヘイビア連邦共和国』の科学省の長官だった男だな。確か故あって、その長官の職を辞したと聞く」
「……」
アシュマは密かにあたりを警戒しながらガルマインの言葉を黙って聴いていた。
「余りに突然のリクシルの辞職に疑問を持った者たちは多い。我もリクシルの身辺を洗って、初めて七賢人なる組織が存在する事を知った。ただ、その後のリクシルの行方だけは探し出す事、叶わなかったがな」
「……」
「そこで問う！　アシュマよ、そこもとは七賢人の尖兵や否や！？」
「そこまで言うなら答えましょうぞ。我は、そも七賢人など知る由もなし」
「証拠は！？」
「証拠はない！　信じてもらう他は無し！」
「重ねて問う！　鬼虎を手に入れようとする理由は何か！？
「養父の遺言なれば！」
「その遺言とは何か？」
「我こそが鬼虎の正統な持ち主であると！」

「なんと、『万人殺しの鬼虎』の正統な持ち主であると申すか」
「いかにも」
その後二人は押し黙りじりじりとした時間だけが流れて行く。
沈黙を破ったのはガルマインの方だった。
「エヴァイブ・エブルも七賢人の内の一人であったか……？」
「何……？」
「よかろう。教えてつかわす」
「親父殿！」
ガデウィンがつい、大声を出す。
「騒ぐでない！」
ガルマインが息子を窘(たしな)める。
「エヴァイブ・エブルはガド山脈の内、ゴドニアン山の麓に、アルトという村がある。その村に庵(いおり)を建ててそこで隠遁しているという」
「父上、何故この様な者に、そこまで！！」
「騒ぐなと言うておろうに！」
「……は……」
「話はこれで終わりじゃ」
「忝(かたじけな)い……では、これにて」
アシュマはゆっくり立ち上がり、あたりを警戒しながらその場を辞去した。

出口の外には、文官二人が待っていた。
「アシュマ様、大丈夫でしたか？」
「変な事されませんでしたか？」
「へ……変な事って……」
アシュマは苦笑する。
「大丈夫だ」
「よかった。帰りましょうか」
「ああ……」

三人は館から出てきて、石畳の道沿いにアシュマの部屋がとってある塔に向かって、歩いている。
「ゴドニアン山の麓のアルト村ってどんな所だ？」
文官二人にいきなり聞く。
「ああ、アルト村ですか。相当な田舎ですよ。そこに何かあるんですか？」
「すこしな。……地図か何かあるか？」
「ええ、すぐにでも用意できますが」
「……ならば、お願いする。明日にでも発とう」
「え？　もう？　王宮から、出てしまわれるんですか？　少し寂しいですね」
もう一人の文官が残念そうに言う。
「……ああ、当初の目的を果たす為に」
「え？　目的って武道大会出場じゃなかったんですか？」
「それは、単なる手段に過ぎない。……本当の目的は……いや、いい」
アシュマは自分を制するように首を横に振った。
「？」
「ところで、アルスティーン殿に取り計らって欲しいことがあるのだが……」
「ま、またですか！？　勘弁してくださいよぉ。アシュマ様……」
文官二人はまた厄介ごとを頼まれるのかと辟易して、思わずそれが口に出てしまった。
「いや、ただアルスティーン殿とアーチェル様に、辞去のお知らせを、直接会ってしたいだけさ」
「それなら、明日アルスティーン様を訪ねるとよろしいでしょう」
文官の一人が言う。
濃い夕闇が辺りを覆い始めた王宮内を、三人は足早にアシュマの割り当てられた塔へと向かった。

再びガルマインの屋敷……。
囲炉裏が切られた屋敷の一室で、ガルマインは端座し、煙草をキセルに詰めていた。
ガデウィンが側に控えておりガルマインに意見を呈していた。
「親父殿、なぜあんな青二才に『鬼虎』のありかなんかを教えてしまったのですか！　あ奴が鬼虎を手にしてしまったら……！」
「よいではないか……」
「親父殿！」
ガデウィンがガルマインに噛み付く。
「『よいではないか』、というのは『都合がよい』ということじゃ」
「？」
ガルマインは煙草に火をつけて、ふぅーっ、と煙を吐く。
「考えてもみよ。今まで、あのエヴァイブ・エブルという存在のために、我らは行動を半ば制限されてきたのじゃ。そのエヴァイブ・エブルにあの、アシュマ・アトーなる者が、鬼虎をかけて挑むという。よしんば、エヴァイブ・エブルに勝てなくとも、相打ちにでもなってくれれば……」
「父上、それはあ奴を買い被りすぎではございませぬか？」
「そう思うか？　先ほどの奴の挙動に何か感じなかったか？」
ガルマインは、かつん、とキセルで煙草盆をたたき灰を落す。
「は？」
「あ奴、かなり剣を遣うぞ。下手をしたらワシと同等、もしくはそれ以上」
「まさか……、あんな奴が、親父殿より上だとは、とても思えませぬ」
「ワシはあの時、話の内容次第では、あ奴を斬って捨てるつもりでいたのだ。だが、あ奴には一分の隙も無かったわ」
再びガルマインはキセルに煙草を詰めて火をつけた。
「親父殿……」

「たとえ、エヴァイブ・エブルに敗れたとしても今まで通り。こちらとしては失うものは何も無い」
「親父殿……」
ガデウィンは自分の父親がここまで先を読んでいるのかと空恐ろしくなった。
だが、ガデウィンはガルマインが一つの結論を考慮に入れていないことに気がついた。
「親父殿、アシュマが勝った場合如何致しますか？　そうなると奴は『万人殺しの鬼虎』を手に入れてしまいまする」
「ワシは鬼虎の『万人殺し』を信用しておらぬ。万の敵を打ち滅ぼせる力のあるものは、『あの遺跡』だけだとワシは思っておる」
ガルマインは「ふぅーっ」と煙を吐いた。
「仮に鬼虎に『万人殺し』の力があるとしても『遺跡』の力で粉砕してしまえばよいだけの事。鬼虎にそれ以上の力があるとは、とても思えぬ」
ガデウィンは手に汗を握りながら聞いていた。
「では……父上……、アシュマの命は……」
「『遺跡』の力で押しつぶしてしまえばよい。いくら強いといっても一剣士。『遺跡』の前では像に踏み潰される蟻と変わらぬ。たとえエヴァイブ・エブルとても同じ事……」
ガデウィンは額の汗を手のひらで拭いながら聞いていた。
拭った手のひらはべっとりと汗でぬれていた。
「王の命もあとわずか……それまでに『遺跡』を発掘せねばならん。『遺跡』さえ発掘してしまえば、我らは無限の力を手にすることが出来る……！！」
ガルマインは三度キセルに煙草を詰めながら話していた。
「その為に『あの娘』の能力が必要なのだ。『遺跡』さえ動けば、あの娘……アーチェルの命など、どうなってもかまわぬ」
ガデウィンは心底ガルマインの事が恐ろしくなった。
ここまで、人に対して冷酷になれるものなのか？　と。

「よしんば、『遺跡』の発掘が間に合わなくとも、切り札はそれだけではない」
「は。『あのお方』の事ですな？」
「そうだ『あのお方』にお出まし頂ければ、今の政権など吹っ飛ぶわ。その様に仕込んだからな。アルスティーン派の奴らの悔しがる顔が目に浮かぶわ……。くくくく……」
ガルマインは三服目の煙草を吸い終えながら話を続ける。
「ただ『七賢人』達の妨害だけには気をつけねばならぬ。あやつらも今頃やっと『遺跡』の存在気がついた頃だろうよ。遅すぎるがな。くくく」
ガルマインは声もなく笑う。
「かといって、このままここに居るのも策に欠ける。そこでだ……ガデウィンよ」
「はっ！　……アシュマと『七賢人』の動向を探るのですな？」
「そういう事だ。頼むぞ、ガデウィン」
「はっ！」
「ついでにネズミの始末も頼むぞ」
ガデウィンは
「は？」
少し間の抜けた表情でガルマインを見る。
「屋根裏に潜んでおる」
ガデウィンはやっと得心がいった表情で、
「お任せを。わが『影』共が始末いたしましょう」
矢庭に言うと、
「ひゅっ！」
と、指笛を吹いた。
屋根裏に潜んでいた忍装束の男は
（しまった！）
心の中で自分の失敗を罵った。
すると、天井裏のあちらこちらから、眼を赤く光らせて迫り来る

『影』どもが現れて包囲網をじりじりと狭めて来る。
忍装束の男は懐に手を入れ『それ』使う機を伺っていた。
そしてそのままゆっくりと、出口に向かって這って行く。
いよいよ包囲の目が狭まり『影』達が忍装束の男に襲い掛からんとした時、懐手に潜ませていた、『それ』を高く掲げ、天井板に叩き付けた。
すると、『それ』は、激しい閃光を発し、『影』たちの目を眩ませた。
その隙に、忍装束の男はその場を逃げようとする。
しかし、『影』の者の一人が手の爪を振り回した。
「ぐっ！！」
忍装束の男は腹部に激痛を覚えた。
忍装束の男は腹部を手で押さえながら、屋敷から脱出しその場を何とか逃げ切った。
忍装束の男は血を滴(したた)らせながら、とある塔を目指していた。
そこはアルスティーンが寝起きし、公務をこなし、生活をする『居城』である。
忍装束の男はアルスティーンの放った、例の『草』だった。
『草』はよろめきながら、塔の中へ吸い込まれるように入っていった。

夜更け、アルスティーンは寝所にて、一人で寝るには大きいセミ・ダブルのベッドの上で深い眠りについていた。
無地の遮光カーテンは締め切られ、月の光りも入らない。
質素で趣味の良い、丁度類も今は闇の中。
その部屋全体が眠っているようだった。
その時、カーテンがゆらりと揺れた。
角の闇の中から
（若……若……）

自分の名前を呼ぶ声にアルスティーンは目を覚ました。
（若……）
「爺か？」
「……は」
アルスティーンは枕元にあるスタンドのスイッチを押す。
明りに照らされたそこには、腹部が血に塗れた『草』の者がいた。
「怪我をしているではないか……！！　誰か！？　誰かある！？」
アルスティーンは慌ててベッドから飛び降り『草』の方へ駆け寄る。
「わ、若、皮一枚でとどまっておりまする。お…お騒ぎめさるな」
『草』は、ひざを折ると、そのままがくりと身体をその場で崩した
「何を言う？　ひどい出血ではないか！？」
アルスティーンは『草』を抱き起こした。
「若……お聞きくだされ……」
「しゃべるでない！　爺！　今医者を呼ぶ！」
「お聞きくだされ！」
「爺……」
「遺跡……。遺跡にお気をつけ下され……」
「遺跡？　……ガルマインが発掘しているあれか？」
「ガルマインは鬼虎など、が……眼中にござらん。遺跡こそ、『万人殺し』と信じて疑っておりませぬ」
「なに？」
「む、娘子に……アーチェル様に危難が迫っております」
「なに？　アーチェル様に！？」
「様々な勢力が、……『遺跡』を狙っております。は、早く手を打たないと……」
「爺、もうよい喋るな」
「『あのお方』に……『あのお方』に御注意あれ……」
そこまで言って『草』の者はがっくりと気を失った
「様々な勢力とは何じゃ、爺！　爺！！　誰か！！　誰かおらぬか

!?　医師を、医師を呼べ!!」

アルスティーンの悲痛な叫びは城内に響き渡った。

第五節　遺跡

次の日、アシュマはアルスティーンを訪ねたが、アルスティーンが公務繁多（はんた）によって辞去の意を伝えるにとどまった。
ただ、アルスティーンはアーチェルへの訪問は許し、許し状を渡した。
アシュマはアーチェルのいる北の大塔へ訪ねた。
ただ、アーチェルが滞在している北の大塔の門番にアーチェルは『遺跡』を見学に行ったと言われ、会うことが出来なかった。
アシュマは、アーチェルは『遺跡』を見学したとあらば公務性は低いと見て、門番に遺跡の場所を聞くことにした。
「アーチェル様にお会いしたい。その『遺跡』とは何処にある？」
「これ以上、お教えする事、ガルマイン様に止められており申す。お引取りを」
「この通り、アルスティーン殿に用意してもらった書状もここにあるのだが……」
「お引取りを」
門番は重ねて拒否の態度を取る。
「……」
アシュマは黙ってその場を後にした。
アシュマは再びアルスティーンの元へ訪れる。
丁度、アルスティーンは公務の区切りだったのか、渋々アシュマと合うことにした。
「なんだい、また来たのかい！？　今日ぼくは忙しいんだ！！」
気のせいか、アルスティーンは苛立っているように見えた。
「……『遺跡』の場所さえ教えていただければ、すぐに退散しよう」
アシュマはそう言った。
「遺跡？」
「アーチェル殿に辞去の意を伝えたかったんだが、遺跡に見学に行

っていると言う。だがガルマインの手の者がアーチェル殿の居場所を教えてくれなんだ」
「！！」
アルスティーンは一拍置いてから、
「ふふふふ……あはははは……！」
いきなり笑い出した。
アルスティーンはその手があったかと思い至った。
どうすれば、怪しまれずに『遺跡』に行けるか、アルスティーンはずっと考えていたのだ。
アルスティーンはアシュマをダシに遺跡へいこうと考えたのだ。
「？」
「いや、済まない。こちらの事だ。善は急げだ。さぁ、行こう！」
「今すぐに？　一緒に？」
「そうだけど、何か問題はあるかい？」
「公務は？」
「ああ、そうだった」
アルスティーンは机にあった呼び鈴を鳴らす。
すると、いつもの文官二人が現れた。
「御呼びでしょうか？　アルスティーン様」
どうやら、この二人はアルスティーンの側近だったようだ。
「うん、今日この後の公務を全てキャンセルにしておくれ」
「はい、わかり……え？　何ですと！？」
「だめに決まってるじゃないですか、殿下！」
「何よりも大切な事態が起きた。頼むよ」
「駄目ですよ、殿下！」
「さ、行こう、アシュマ君！！」
「行くのは良いが、一体何をそんなに慌てているんだ」
「それは、道すがら話す事にするよ」
「分かった」
「「殿下ー！！」」

アシュマとアルスティーンは塔を下っていき、駐車場に着いた。
そこでアルスティーンはバギーに乗り込んだ。
それがアルスティーン個人のものなのか、公用車なのかは判別がつかなかった。
「車か……」
アシュマは、これから自分は車に乗るのだという、ある種の感慨に浸っていた。
「アシュマ君、乗って、乗って！！」
アシュマは慌てて車の助手席に乗った。
アルスティーンが運転席について車を動かそうとしていた。
「シートベルト！　シートベルト！」
アルスティーンはシートベルトを付けろと催促しているのだ。
「え？　ああ……」
アシュマはシートベルトを引き伸ばして……、
「これをどうするんだ？」
アルスティーンに尋ねる。
「もう、しょうがないなぁ」
アシュマのシートベルトをつけてやった。
すぐさまアルスティーンはエンジンのキーを回し、エンジン音が響く。
「おお……」
アシュマは感嘆の声を上げる。
「君は、車に乗った事がないのかい？」
「いま、初めて乗った」
「呆れた。君は今まで、どんな所に住んでいたのかね？」
「言っても分からんさ。きっと」
アルスティーンはハンドルを握りながら聞きなおした
「言ってごらんよ。笑いやしないから」
そう言いながらすでにアルスティーンは笑っていた。
「東の小国、イーハンという所だ」

「イーハンか。僕の故郷だ」
「本当なのか？」
「小さな頃まではね。それからはノリトレア暮らしさ。はっきり言ってすまないが思いでもなければ愛着もない」
「愛着がないのは俺と一緒だ」
「イーハンか……確かに小国だがそんなに小国だとは思ってないよ？」
「……その、イーハンに小さな諸島があるのを知ってるか？」
「いや、聞いたことがないな……」
「その諸島の一番小さな島が俺の故郷だ」
「……そう。そりゃ、地理学者でもなけりゃ、知りもしないわな」
　バギーは荒地を走り続けていた。
「それで、何をそんなに慌てて？」
「アーチェル様が危ないのさ」
「アーチェル様が？　それは一体……？」
「僕の『草』が必死で持ち帰ってきた話さ。ガルマインが、今ある遺跡の発掘責任者だって事は知っているかい？」
「いや、全然」
「まぁ、それは君が知らないのも無理もないとして……。ガルマインが発掘しようとしている『遺跡』は『兵器』である可能性が高い」
「兵器……？」
「そぅ。それも、ちょっとやそっとの兵器じゃない。鬼虎と同じ『万人殺し』の異名を冠するという」
「鬼虎と同じ……！」
「僕に言わせれば、そちらの方がリアリティがあるね。もし、その遺跡が、過去、人類を滅ぼしかけた『黙示録大戦』の遺物だったら……」
　二人を乗せたバギーは何時しか砂漠を走っていた。
「黙示録大戦の遺物……では、王子はタイン教の聖書にある、破壊

の権化『バヴェル』であると！？」
この『破壊の権化』と『バヴェル』の、名前の由来は良くは分かっていない。
いまは神話の領域に入っている黙示録大戦期より三千年とも四千年とも古いとされる超古代期の遺物『バベルの塔』に形が酷似しているからだとも言われている。
他にも諸説あるようだがこればかりは見て見ないと分からないだろう。
「そのバヴェルだと僕は思っている」
「それと、アーチェル様との関係は？」
「はっきりとしない。ただ、アーチェル様の何らかの力が必要らしい」
「成る程。……ところで何故、軍警察を動かさない？」
「だめだ。軍は今ガルマインが、ガッチリ押さえている。当てにはならない」
「そうか……。ならば急ごう！」
アシュマがそう言う。
アルスティーンはアクセルを踏みバギーの速度が上がった。
アシュマはアルスティーンが車を動かせるという事は、念者なのだなと思った。
「それに急いでいるのはそれだけじゃあないんだよ」
「と、いうのは？」
「ここから先は政治的なことでアシュマ君には、あまり関わって来ない事なんだけどね、例の『隠し玉』が、『あのお方』なる謎の人物だって事を、ボクは断定しつつあるんだ」
「それが、アルスティーンと一体何の関係が？」
「まだよくは分からない。が、よく分からないから、そのカードが切られる前に、決着を付けたいと思っているんだ」
「そうか」
と、だけアシュマは言い、この話はとりあえず終わった。

その後をガデウィンの乗るバギーがぴったりと後をつけているのをアシュマもアルスティーンも気づいていなかった。

二人はバギーを遺跡の入り口に止めた。
外から見てみると入り口を除いて遺跡の周りには高さ十数メートルの鉄板の壁でぐるりと囲まれていた。
直径はざっと見て二～三キロメートルに及んでおり、器用に青い布で蓋をしていた。
つまり、外からは全く見えないようになっていた。
二人はバギーを降り、入り口に向かおうとしていた。
「そうだ、アシュマ君、これを」
「これは？」
「携帯端末さ。使い方は分かるかい？」
「そうか、これが携帯端末というやつか」
「見た事ないの？」
「あぁ。全然」
「え？　もう、じゃあ、使い方教えるから……なんで僕が……ぶつぶつ」
……
アルスティーンは九十センチメートル程の棒をトランクから出して、戻ってくる。
「？」
アシュマの不思議そうな表情を読み取ってか、アルスティーンは、
「なんでもないですよ。何でも……」
そう誤魔化して、アルスティーンは歩み出した。
アシュマはすぐ後ろについて、アルスティーンに気取られないよう、辺りを警戒しながら、後をついて行った。
アシュマはバギーを降りる頃から自分たちを着いて回る者の気配を感じていた。

すぐに数名の兵士がやって来て、アシュマたちの周りを取り囲む。
「貴様たちは何者だ！」
「ここで何をしている？」
「怪しいやつめ」
数名の兵士はアシュマ達をじりじりと包囲し始めた。
アシュマは刀の鯉口を切る。
すると、アルスティーンが手で制し、
「アルスティーン・ノリトレアである！　ここの責任者は誰か！？」
大音声で訪ねた。
兵士達は雲上人に慌てふためき、一人がどこかへ行き、残りがその場で平伏した。
「アシュマ・アトー殿のたっての願いにより、遺跡見学の儀、さし許してつかわす！！　我は後見人としてアシュマ殿と行動を共にいたす！！」
（成る程、口実なんだな俺は）
どこかへ消えた残りの一人は上司あたりにでも報告をしにでもいったのだろう。
「罷り通る！」
アルスティーンとアシュマは、堂々とそこを通って行く。

アシュマとアルスティーンがこれから『見学』する『遺跡』は古ぼけていて、所々崩れそうな所があるが、全体としては堅固な構造のようだ。
そして、不完全ながら、その周囲を掘り起こされていて、規模がおおよそはっきりした。
推定直径四キロメートル、推定高さ八キロメートル。
この遺跡の下部はおそらく。地殻の奥深くにまで届いている事だろう。
この構造物が如何に巨大な事か、どの国の建造物でも、この構造

物より大きい物は無いと思われた。
その昔ではこの遺跡『バヴェル』が何十機も宙を浮き、人類に漆黒の門、裁きの扉を開き、この世の全ての悪という悪をその門内に封じ込めたと言う。
人類を含めて……。
ここでは、その破壊の権化『バヴェル』を復活させようと言うのである。
そして全容を見るためには『バヴェル』を起動させねばならない。
更に言えば、そのキーとなっているのが『アーチェル』という名の鍵だ。
そのアーチェルは今何処に居るのだろう？

「なに？　アルスティーンが来た？」
ガルマインは、不機嫌そうに、その話を、遺跡と地面とを結ぶ『橋』の上で聞いた。
「は。何でも遺跡見学との名目にて……」
今、『バヴェル』の存在を知られるわけには行かないのだ。
ガルマインの眼前には兵士が二人平伏していた。
おそらくその内の一人は、アルスティーンの眼前から消えていった兵士だろう。
「それともう一人、牢人と思(おぼ)しき怪しいものが」
「貴様たちは兵士二十名を引きつれ、その者達がここに来るのを防ぐのだ！　行け！！」
「ははっ！」
兵士二人は三輪バギーに乗って兵士詰め所に戻って行く。
ガルマインは視線を転じ、青い布が垂れて形作っている、天幕を見た。
その天幕が奥にある物を隠していた。
天幕を開いてガルマインは中に入った。

そこには、物々しい機械群の真ん中で、死んでいるのではないかと思えるほど、静かに眠る少女がいた。
少女の姿は眠り姫にも似て可憐に佇む一輪の花のようだった。
その少女はアーチェルだ。
その胸が静かに、律動的に上下するのを見て、かろうじて死者と生者との違いが見て取れた。
その周りには数十人の科学者が機械群を前にして、奮闘している。
「どうか？」
ガルマインは尋ねる。
「芳しくありません。なにせ今日が始めての調整ですので……もう少しお時間を」
科学者は計器類を見ながら言う。
「どのくらいか？」
「同調率一，三パーセント前後を行ったり来たりしています」
とある計器を指差す。
「よくは解らんが、どんな感じなのだ？」
「浮上するのもおぼつかないかと」
「この埋もれた状態で浮上は出来るのか？」
「いえ、無理ですね。この状態から浮上するには、最低二十パーセント程の同調率が必要かと推測しています」
「いかんな」
そう呟いた。
「済みません」
科学者は申し訳なさそうに、面を伏せる。
その時天幕の入り口から男が一人入って来た。
「親父殿、こちらにおられたか」
「ガデウィンか。何用だ？」
「アルスティーンが来ました」
「それならば、もう聞いておる」
相変わらずガルマインは不機嫌だった。

「アシュマ・アトーも一緒にござりまする」
「なに！？」
ガルマインは下唇を噛みながら言った。
「アシュマ相手に二十名の兵では全然足りぬ。ガデウィン！」
「は！」
「出来る限りの兵をかき集めアシュマたちにあたれ！　ワシはここの撤収を指揮する」
「しかし、ここを撤収すれば、あ奴らにここに何があるかばれまする」
「構わぬ！　『遺跡』がここにある限り、『あのお方』とアーチェルさえこの手に有りさえすればそれでよい！　さすれば、いずれ大手を振ってこの『遺跡』の発掘などいくらでも出来る！　行け！」
「はっ！！」

アシュマとアルスティーンは二十数名の兵士たちに取り囲まれていた。
そしてなにやら問答をしているようだ。
「アルスティーンである！　道を開けられよ！」
「なりませぬ。ガルマイン様が許しませぬ」
「では　ガルマイン殿にとりなして貰おう！　アルスティーンがアシュマ・アトー殿の遺跡見学の便宜をはかりに参ったとな！」
「ガルマイン様はいまお休みになられております」
「起こしてまいれ！　アルスティーンが来たとな！」
「それだけは、なりませぬ」
「ええい！　お前では話にならん道を開けよ」
「なりませぬ！」
アシュマはこれでは堂々巡りだなと思った。
アシュマは鯉口を切って佩刀をスラリと抜くと、すばやく峰に返して、道を塞いでいた二人ほどの兵士の肩口を、ばしばし、と叩き、

道を強引に開けた。
肩口を叩かれた兵士は気を失ってしまった
「ア、アシュマ……」
アルスティーンは呆然となってアシュマを見る。
「アルスティーン、この方が早い」
アシュマはしれっとして言う。
「こ、こやつ、狼藉を働くぞ！！」
「出会え！　出会えぇ！」
「かまわん、アルスティーンごと、こ奴らをひっ捕らえい！　手に余るようなら殺してもかまわん！」
遺跡への入り口は俄かに騒然となった。
「ええい、こうなったらままよ！！」
アルスティーンは持ってきた棒を左右に振った。
すると、棒の左右から更に棒が延びて六尺程の一つの長い棒になった
そして棒を頭の上でぶんぶんと振り回して最後に脇に構え、
「さぁ、来い！」
決めて見せた。
兵士達はアルスティーンにも襲い掛かって来たが、アルスティーンが棒を左右に振り回すたびに、ばたりばたりと次々に兵士たちが倒れて行く。
アシュマは横目に
（どうして中々やる……）
と、思った。
アシュマもまた、刀を振るっては、兵士たちを、どさりどさり、と倒して行く。
ただ、普通とは違っていて、振るう刀の軌跡が見えないのだ。
今もまた刀を振るうと軌跡が光となって兵士たちを倒していった。
アルスティーンもまたそれを見て
（これが『閃光のアシュマ』たる所以か……）

やはり思った。
気がつくと、辺りの兵士たちを全て倒してしまっていた。
「こんなに倒してしまって大丈夫か？」
アシュマはアルスティーンに尋ねていた。
「そんな、口火を切ったのはアシュマ君、君でしょ？　それにやってしまっておいて、もう遅いですよ。さて、アシュマ君、行きましょか」
「うむ、行こう」
「そ、そ。さ、いきましょ……げ！」
アルスティーンの視線の先には、ざっと見て二百名ほどの兵士が剣を抜いてこちらに向かってくるのが見えた。
「あ・あ・あれ……」
「……分かってる。行くしかないようだな」
アシュマは刀を肩に担いで、やる気満々のようだ。
「行く……って」
「くるぞ！」
アシュマは刀をあらためて肩に担ぎ直して、敵中に飛び込んで行く。
「あの人数で、敵中に行くかね普通？」
アルスティーンはアシュマの行動に呆れた。
当のアシュマは既に兵士を十数人倒していた。
「仕方ないねこりゃ……さすが閃光のアシュマ」
アルスティーンも戦闘に参加した。
「お帰り。殿下」
アシュマはおどけて見せた。
対するアルスティーンも
「随分と余裕だね、閃光殿」
軽口を叩いていた。
地面が砂地であるにもかかわらず、アシュマの動きは俊敏なものである。

アシュマは次々と兵士たちを倒し続け、既に五十人ほどの敵を戦闘不能にしていた。。
敵の兵士達はと言うと、アシュマたちを囲んでいるにもかかわらず、同士討ちを恐れて攻撃が出来ないでいた。
また、アシュマの鬼神とも思える働きが、兵士たちの士気に影響し、皆、恐怖により逃げ腰になりつつあった。
「ば、化け物だ……」
兵士達は恐慌状態寸前である。
「馬鹿者！！　そのような事でどうする！？」
兵士達の向こう側から、兵士達を叱咤する声が聞こえてきた。
声の出所を探してみると、向こう側から兵士たちより頭一つ分背の高い男が、兵士たちを掻き分けアシュマ達の前に立ちはだかった。
その男はガデウィン・デッドだった。
「ガデウィンか……」
呟いたのは、アルスティーンだった。
「アシュマよ。この俺と勝負してみろ……！」
「……よかろう」
アシュマは勝負の申し出を受ける。
「お前たち、手を出すなよ」
ガデウィンはそう言って、刀をスラリと抜いて見せる。
「いざ！！」
ガデウィンは気合を込めて刀を八双に構える。
一方アシュマは、地面が砂地である事から、秘剣朧霞も、空蝉も使えない事に気がついた。
アシュマは三本目の秘剣を使うかどうか迷った。
その迷った心の隙にガデウィンは付け込んで来た。
打ち付けるようなガデウィンの斬り込みがアシュマを襲った。
アシュマは、峰に返した刀を元に戻す暇も与えられず、「はっ」とし、辛うじてガデウィンの刀を受け止めた。
ガデウィンはアシュマより身長が二十センチ程も大きい身体をい

い事に、上から圧倒的な力で押しつぶそうとした。
が、なんとアシュマは押しつぶされるどころか徐々にガデウィンの刀を押し戻す。
「お、おのれぇぇっ！」
ガデウィンは更に力を加えアシュマを押しつぶそうとする。
その時アシュマは「ふっ」と力を抜き、ガデウィンを右横へ流した。
ガデウィンは前のめりにたたらを踏んだ。
ガデウィンと体を入れ替えたアシュマは無銘の豪刀をガデウィンの後頭部と背中の二箇所をばしり、ばしりと、したたかに打ち据えた。
「うっ！」
うめき声を出し、白目をむいてガデウィンは気絶した。
兵士達は最後の拠り所であったガデウィンを失った事により、とうとう恐慌状態に陥った。
「さぁ！！　次は誰だ！？」
兵士達はもうアシュマに恐れおののき、我先にと逃げ出した。
「これで風通しがよくなった」
アシュマは気持ちよさそうに言う。
「風通しって、君ねぇ……」
アルスティーンは心底アシュマの事を呆れた。
「行くぞ！」
「ああ、うん」
アルスティーンは呆気にとられていたせいで返事が曖昧になる。
既にアシュマは兵士の逃げていった方向に向かって走っていた。
「しょうがないなぁ……もう」
アルスティーンは呟きながら、アシュマの後を追って行く。

「ガデウィンが敗れただと？」

ガルマインは天幕の外側、橋の上でその報告を聞いた。
報告に来た伝令に来た兵士は戦々恐々としながらその場にいた。
「ははっ……」
「あの、たわけめ！！」
「ひっ」
ガルマインは大声で怒りを顕（あらわ）にする。
「それでお前たちは逃げてきたと申すかっ！！」
「は……はい……」
ガルマインは、今度は怒りの矛先をその兵士に向けていた。
「戻れ！　戻って死んで来い！！　アシュマを倒すまで、ここに帰る事許さぬ！！」
ガルマインは手を刀に手をかけ兵士を脅す。
「え……？　そ、それは……」
兵士は、怯えきって何も言えずにいた。
「行けぬと言うかっ！？」
「い、いえ…いきます」
「では、いけっ！」
「はっ！」
兵士は急いでその場を後にする。
そして、逃げてきた兵士達の溜まり場に戻って行く。
暫くして、怒号と悲鳴が入り混じって聞こえてきた。
ガルマインは天幕の中に入ってきて科学者に声をかけた。
「プロフェッサー、ここを撤収しなければならぬ事態がおきた。そちらの状況はどうか？」
科学者は計器類を見ながら答える。
「一応アーチェル様の脳波パターンと多少血液を採取しました。後は何も……」
「そうか。わかった。では撤収の準備を始めてくれ。必要最低限でな……」
「分かりました」

科学者はそう言うと、仲間や部下に撤収の準備を行うよう、命令を下す。

アシュマは『遺跡』をも覆い隠す天幕の下、影に覆われた砂漠の上を走っていた。
砂漠の向こう、『橋』の上では人でごった返していた。
科学者、医者、兵士、皆が橋の上で行き来し、混乱している。
橋の上ではガルマインが兵たちを含め移動の指揮をしている。
「ガルマインはあそこにいる。……アーチェルは、アーチェルはどこだ！？」
アシュマはアーチェルを見つけるために立ち止まり、辺りを見回した。
「いた！」
橋の丁度真ん中あたり、大人が十数人で抱えた棺桶状の機械の中に、アーチェルは眠るように入っていた。
「アシュマ君……。きみ、ちょっと速すぎるよ」
やっと追いついたアルスティーンが文句を言った。
「……いくぞ！」
アシュマはそこの一点に向かって、再び走り出した。
砂地の上にもかかわらず、普段地面で走っているのと遜色のない走りである。
「君、元気すぎるよ……」
アルスティーンは、アシュマの無尽蔵とも思える体力に呆れ返って、その場にへたり込む。
そして、何気なく辺りを見回す。
するとアルスティーンは何かを見つけて、
「いいものあるじゃない！　僕はこれで行かせてもらうよ」
『いいもの』の方へ向かって走っていった。
アシュマは走り続けていた。

すると向こう側から兵士が再びこちらに向けて走って来る。
今度はざっと見繕って百人強……。
アシュマは刀を抜き、峰に返して、更に足に力を込めて走った。
兵士達はアシュマの速力に驚いた。
アシュマはその隙を見逃さず、先制攻撃をする。
先程とは状況が違うなと、思いつつアシュマは、秘剣朧霞を使う事にした。この秘剣は相手との乱戦で使うのが最も効果的だからだ。
「秘剣・朧霞！」
兵士達は、目の前で消えていくアシュマの姿に驚き、恐怖した。
「あうっ！」
とたんにアシュマの姿が見えないまま一人目の犠牲者が出た。
「くそっ、どこだっ！？」
兵士の一人が剣を振り回し、味方の数人に重軽症者を連鎖的に生み出した。
「ぐっ！！」
二人目の犠牲者が出た。
「ひっ！ひいいい！」
するとまた、剣を振り回す者がでた。
「あぐっ！」
三人目の犠牲者がでた。
こう恐慌状態に陥ると、連鎖的に兵士たちが同士討ちを始めるようになった。
あとは、ほおって置いても勝手に自滅してくれる。
アシュマは、既に遠く離れた所から、下で同士討ちをしている兵たちを見やりながら、にやり、と、皮肉っぽい笑みを浮かべていた。
そして、アシュマはまた、走り始めた

橋の上ではアーチェルの周りに科学者、その周りに屈強そうな兵士たち、そして先頭はガルマインがいた。

ガルマイン達は橋の端について、撤収用の車両が置いてある場所へ移動しようとしていた。
「待て、ガルマイン！！」
その前にアシュマが立ちはだかった。
「やはり我が野望を阻むものは、アルスティーンでも、ハグムでもなく、お主であったか！　アシュマ・アトー！！」
ガルマインが怒りを顕にして言う。
「貴様の野望もここまでだ！！　ガルマイン・デッド！！」
とうとう、二人は対峙した。
果たして、ここで二人の決着が着くのだろうか？
しかし次の瞬間、アシュマの前で爆音とともに砂柱が立ち上がる。
「！？」
アシュマは何が起きたか理解できずにいた。
この隙にガルマインは身を翻して逃げていた。
「ま、待てっ！」
アシュマはガルマインたちを追おうとする。
すると再び「ひゅーっ」と、音がして、アシュマの目の前で、爆音とともに砂柱が起こる。
「くっ！？」
アシュマはぐるりと辺りを見回した。
すると、砂漠の向こう側から、三機の魔導機兵がこちらに来ている。
そのうち一体の魔導機兵が巨大なライフルをアシュマに向けて狙いをつけていた。
アシュマはライフル弾に気を付けつつ、ガルマインたちを追いかける。
魔導機兵は、ライフルの引き金を引いた。
ライフル弾がアシュマめがけて高速で飛来してきた。
信じられない事に、アシュマは、ライフル弾が着弾する直前、横へ飛んで弾をよける。

「何！？」
魔導機兵のパイロットたちは、その光景を見て、我が目を疑った。
そして、
「おのれ！」
再度照準をアシュマに合わせ引き金に手をかけた瞬間、その魔導機兵のコクピットが何かに貫かれパイロットが死亡した。
そのコクピットを貫かれた魔導機兵は後ろに倒れこみながら爆発した。
「何？　何がおきた？」
魔導機兵のパイロットは思わずあたりを見回した。
「なんだ！？」
アシュマは後ろを振り向く。
するとアシュマの遥か後方、砂丘の陰から別の魔導機兵が、超長距離用ライフルをひざ立ちにして、ガルマイン側の魔導機兵を狙っていた。
「駄目じゃない、アシュマ君。そんなおいたしちゃ！」
「アルスティーンか！？　有り難い！」
アシュマは再び走り出した。
ガルマイン側の魔導機兵はライフルや小銃を構えアシュマに照準を合わせたその時、どっ、とガルマイン側の魔導機兵の前に巨大な砂柱が立った。
「へへへ。舐めてもらっちゃ困るね。こっち側からねらっている事を忘れてもらっちゃ」
ガルマイン側の魔導機兵は警戒し砂丘に身体を隠す。
アシュマはそのまま走り続けて砂丘の向こう側へ走り去ってしまった。
「しまった」
ガルマイン側のパイロットは舌打ちをする。
「さて、と。どう料理しましょうかね？」
アルスティーンは砂丘の頂上よりやや下に照準を合わし、引き金

を引く。
弾丸は見事砂丘の頂上よりやや下を打ち抜き、派手に砂が舞い上がった。
「うわっ！」
砂が舞い上がり、驚いた魔導機兵は思わず立ち上がる。
「ばか！立ち上がるな」
もう一体の魔導機兵のパイロットが叫ぶ。
「ビンゴ！」
アルスティーンは引き金を引いた。
キュドン！
金属的な破壊音と共に、魔導機兵の腰の部分は、異様な形にひしゃげ、そして爆発をする。
動力部にある魔導石を直撃したのだろう、爆発はもう一体の魔導機兵をも巻き込み誘爆を引き起こしていた。
「よっしゃ！　僕ってば天才！！」
アルスティーンはコクピット内でガッツポーズをしていた。

アシュマは、アーチェルを追って撤収隊に追いつきつつあった。
撤収隊の周りには、選りすぐられた兵士が二十数名警護をしていた。
この警護部隊は、昼は特殊部隊のなりをし、夜は『影』と呼ばれる、ガルマインの実働部隊になった。
「いけ！！」
ガルマインの命にて特殊部隊のなりをした兵士達は、各々短めの刀を、両手にして、アシュマの前に立ちはだかる。
その後ろにはガルマインが控えていた。
アシュマは一目でこいつらが『影』である事を看破した。
アシュマはこの男たちを斬って捨てるつもりでいた。
「……秘剣、朧霞！！」

アシュマの身体は砂の中に埋もれる様に消え去る。
ズシュッ！！
「う…！」
異様な音を響かせて一人目の犠牲者が出た。
『影』達の目は一瞬、そこへ集中した。
それこそが、アシュマの狙いであった。
ズシュッ！
ズグッ！
ブシュッ！
「うっ！」
「ぐっ！！」
「がぁっ！」
たて続けにまた三人が斃れる。
「これがアシュマの正体か……」
ガルマインは我知らず呟いていた。
「これはいかん！」
慌ててガルマインはその場を後にした。
そういう間に更にアシュマは五人を立て続けに切り捨てていた。
『逃げるか！！　ガルマイン！！』
アシュマの声は大天幕のあちらこちらから響いてきた。
あたりから聞こえてくる声に『影』達は恐れおののいた。
アシュマはいったん、『影』達を相手にするのを止めて、ガルマインを追った。
取り残された『影』達は円形陣を敷き、仲間の死体をほおって置きながら、アシュマの攻撃に警戒していた。
アシュマは砂丘の向こう側に着いた。
すると、今まで来た方角から、砲声など大掛かりな戦闘音が聞こえてくる。
（アルスティーンか？　すまん）
アシュマは心の中でアルスティーンに詫びた。

撤退部隊はもう目の前だ。
だが、アーチェルはトラックに機材ごと載せられようとしている。
「アーチェル！」
だが、アーチェルは眠ったままだ。
「アーチェル！！」
アシュマは砂丘を駆け下りながら叫んでいた。
「アーチェル！！」
アーチェルが僅かに反応する。
「よし、いける！」
その時すっと、脇からガルマインがアシュマの目の前に現れ、最後にアシュマへ立ちはだかった。
「どけ！」
アシュマはガルマインに恫喝をする。
「いけ！」
ガルマインは背後のトラックに号令を掛ける。
アシュマは一瞬絶望感に、駆られたが、
（まだだ！！）
アシュマはその場から跳躍をした。
アシュマの跳躍は身長が二メートルのガルマインの頭上を跳び越え、遥かかなたへ跳び降りた。
「なんという跳躍力か！」
ガルマインは驚愕する。
もし、ここが平地なれば、どれほどの跳躍を見せるのか。
「なんという運動性だ……」
ガルマインは呆然としていた。
トラックが走り始める。
アシュマは着地するとトラック目掛けて再び跳躍する。
がつっ！
アシュマはトラックの荷台の端の手をかけながら引きずられていた。

何とか両方の足の内、右足をバンパーに掛け、やっと両手をかけ、荷台に上がった。
荷台にはアーチェルを入れてある、『棺桶』状の装置と科学者が二人いるだけだ。
遠く後ろを見るとガルマイン達の車だろうか？
車の巻き上げる砂煙が遥か遠くに見える。
だが、あれだけ離れているのだ。
もう追いつくことなど出来まいと思った。
「この車の行き先は？」
アシュマが科学者に聞いてみる。
「あわっ！　あわっ！　ゆ・許してくれ！た、頼む！」
もう一方に目を転じてみても……。
「た、頼む！　ゆ・許してくれ！」
（駄目だ。どっちもびびってやがる……運転手は……）
ゴンゴン、とアシュマは運転手側の窓ガラスを叩いてみた。
「あぁ？」
運転手が窓ガラスを開けてこっちを見た。
アシュマは尋ねた。
「この車は何処に行くんだ？」
「あぁ？　何処に行くって、宮廷に決まってんだろ！」
アシュマはこの反応から、この運転手はガルマインの手の者ではなく、雇いの者だと推測した。
後で口塞ぎのため殺すつもりでいたのだろう。
「？宮廷とは逆方向だが？」
「あぁ！？　そんな事しらねぇよ　大回りにまわって宮廷に行けッつったんは、そっちじゃねぇかよ！」
「ああ、成る程」
アシュマは思った。
「じゃあこうしてくれ。大回りにまわって遺跡の入り口に行ってくれ」

「あんだって？　入り口つったら今出てきた所か？」
「それは出口」
「反対側のほうの入り口か？　北側の？」
「そういうことになるかな？　宜しく頼むよ。給金はずむから」
アシュマは運転手を乗せてみた。
「何だそんなことなら早く言ってくんな」
運転手は、おお張り切りでスピードを上げる。
「さて、眠り王女にお目覚め願うかな？」
アシュマは科学者の所に行って、命令してみる。
「さて、アーチェルを目覚めさせてもらおうか？」
「あ、あひっ！　ひっ！　ひっ！　ひっ！」
科学者は脅えてばかりで何もしない。
とりあえず脅しとこうかと思った。
「アーチェルを目覚めさせないと殺すぞ」
「ひぃぃぃぃぃっ！！」
科学者たちは大慌てでアーチェルの眠る『棺桶』から、アーチェルを目覚めさせようとしていた。
科学者たちは、『棺桶』の横にあるコントロールパネルやらなんやらをいじっている。
棺桶を覆っていたガラスの蓋が開いていき、生身のアーチェルが姿を表した。
その姿は、あくまで可憐で、風にたなびく美しい栗色の髪、僅かに揺れるまつ毛、ガラス細工のように艶やかな唇、眠る様はまさに美しい人形そのものである。
ただ、格好がアーチェル王女にとっては、行動的過ぎるくらいな格好だった。
短めの詰襟のジャケットに丸首のシャツ、腿で一度膨らんで、膝のすぐ下まで来ているブーツの中に納まっているズボン……。
「この格好じゃ、王女様とは誰も思わないだろうな」
アシュマは独りごちた。

そのうち……
「う……」
と、声をあげ瞳をゆっくりと開いていった。
「……」
アーチェルは、まだ視点が定まらず宙に視線を流していたが、意識が戻ってくると、見る見るうちに、恐怖に氷ついた表情に変わって行った。
「あぁっ！！　いやっ！！　いやぁっ！！　ここには……ここには、入りたくないの！！　ここには！！」
周りを見てみればこのソファはアーチェルを恐怖のどん底に突き落とした、暗黒へと誘うソファではないか。
アーチェルはこの『棺桶』に、入れられる直前の状況を引きずっているのか、錯乱状態になっていた。
「アーチェル！」
「いやあっ！　いやぁーーーーーっ！！」
「アーチェル！！」
アシュマはアーチェルをぐっと抱きしめ、
「大丈夫だ！　もう大丈夫だ！！」
アーチェルを抱きしめる力を少し強めた。
それでもアーチェルは歯をがちがちと鳴らして恐怖に耐えている。
「大丈夫だ……」
「あ……」
五分ほど抱きしめていると、アーチェルは落ち着きを取り戻してきた。
「あ……わたしは……」
「もう大丈夫だ。アーチェル。君を傷つけるものはもう居ない。大丈夫だアーチェル。大丈夫なんだ」
と、言って手を握ってやると、アーチェルも「きゅっ」と握り返して来る。
その手が微かに震えている。

「ぁ……、アシュマさま！」
アーチェルは恐怖心から来る行動なのか、アシュマに逢えた嬉しさからなのか、再びアシュマに抱きついてきた。
そんなに怖かったのかと思うと、アシュマはこの娘が哀れに思えてきた。
アシュマはアーチェルを軽く抱き寄せ、暫く好きにさせていた。
アーチェルは徐々に体の震えがなくなり、そっとアシュマから離れた。
「ありがとう。アシュマさま」
アーチェルはふと顔を上げアシュマの顔に血が固まって、こびり付いているのを見つけた。
「……あ、アシュマさま、血が……」
「……あ、これか。返り血だ。大事は無い」
「では、やはりあの後ガルマインがアシュマ様に危害を加えたのですね？」
（時間の感覚が戻っていないな）
アシュマは思った。
「また、わたくしのために血が流されたのですね？」
「……アーチェル……仕方がなかった。許せ」
「アシュマさま。アシュマ様を責めるなんてとんでもない事。アーチェルはこのアーチェル自身を責めておりまする」
そう言ってアーチェルは瞼から涙を一すじ二すじ頬につたわせ、そして零す。
「……アーチェル、それは君のせいじゃ無い」
「？　では、一体誰の……」
「……アーチェルの力を使って、利権を我が物にせんとする俗物共」
「俗物……？」
「……そう、その際たる者がガルマインとその一党」
「ガルマイン……！」
アーチェルは自分を納得させるように目を瞑り、再び目を開いた

時には
「有難う……アシュマさま……」
そう告げた。
「……構わん」
「最初はアシュマさまを護るつもりでいたのに、結局、護られたのはわたくしの方でした……」
「……気にするな」
「あ、ありがとう……御座います……」
「……」
「……」
アシュマとアーチェルは二人して押し黙ってしまった。
（話題、話題、話題、話題、……）
アーチェルは顔を真っ赤にしながらアシュマとの共通の話題を探していた。
アシュマは小型の機械をカチャカチャといじっていた。
「？？　どうしたんですの？」
アーチェルはアシュマに訪ねてみた。
「さっきから、ずーッと震えているんだが、とめ方が全然分からない」
「ちょっと見せていただけます？」
するとアーチェルは中ごろで折れ曲がっている携帯端末を開いて「通話」ボタンを押した。
「あのぉ……もしもし……？」
『あぁ、これはなんと美しい乙女の声。無粋を承知で言うのだがこの携帯端末の持ち主に代わっては頂けないだろうか？　あぁ、これが、君の携帯端末ならばどれほど良かったろうに。できれば次の機会に貴方を花の都にお誘いしたいのだが』
「おかしいアルスティーン様」
『え？　ア、アーチェル様？　いや、これは……。この携帯端末の無粋な持ち主に変わっていただけませんか？』

「はい、少々お待ちください」
アーチェルはくすくす笑いながら
「はい、無粋な持ち主さん」
端末をアシュマに渡した。
「無粋？」
アシュマは疑問を呈しながら
「はい……」
アーチェルから端末を手渡された。
『ほんとに君という奴は呆れ返ったね。あれ程使い方を教えたというのに。おかげで僕の方が無粋な奴になってしまったじゃないか』
「やぁ、殿下。元気そうで何より」
『なにが『元気そうで何より』だよ。こんな時だけ、殿下っていうなぁっ。あれからどれだけの思いをして脱出したか君は分かるかい？』
「という事は、今は脱出して無事というわけだ」
『あ、ああ、今はね』
「今後どうします？」
『それの事なんだが、君は、エヴァイブ・エブルの所へ行くんだろ？』
「あぁ、そうだが？」
『僕は王宮へ戻るよ』
「それが良いかと」
『アーチェル様は君に任せようと思う』
「どういうことだ？」
『今、アーチェル様が王宮に戻るのは非常に危険だ』
「危険？」
『そこでだ、アシュマ君、アーチェル様を君にお願いしようと思う』
「王宮が危なければ、ハグム様の御館があるだろうに。俺の元にいるより、ずっと安全なはずだ」
『今、王宮に連絡した所、どうも、ガルマインと軍部の動きがおか

しい。要所要所、要人の所でも、監視する動きがある』
「そんな所へ戻ろうというのか？　危険だ！　逃げろ！」
『大丈夫だ。軍部も一枚岩と言うわけではないらしい。監視も、そういう動きがあるという程度だ』
二人の会話に何か異常なものを感じたアーチェルは二人の会話に割って入った。
「どうしましたの？　アルスティーン様」
『何でもありませんよ。アーチェル様。アシュマ君の側にいれば。さぁ、アシュマ君に代わっておくれ』
「アルスティーン様？　無茶をしないで下さいね」
『分かってますよ。アーチェル様。アシュマ君の言う事をよく聞いて。必ず、エヴァイブ様の所へ行って、『万人殺しの鬼虎』を貰い受けてください。あんまり好きな方法じゃありませんが、どうやら頼みの綱は『鬼虎』しかないようです。そこの所、アシュマ君によろしく。アシュマ君に代わってくれないかな？』
「……はい、アシュマさま」
通信機を渡されたアシュマは
「聞こえてるよ、全部な」
そうアルスティーンに応えていた。
『アシュマ君、アーチェル様を頼んだよ』
「そっちこそ無茶をするなよ」
そう言って通信を切る。
その時、運転席から声が掛かった。
「お楽しみ中のところ悪いんだがよ」
「……なんだ？」
アシュマが対応する。
「そろそろ『入り口』につくぞ」
「それが、済まぬ。行き先が変更になった」
「なにを馬鹿な事を」
「給金はずむから」

「またそんなこと言ってぇ」
「これでどうかね？」
アシュマは懐に手を入れ小さな小袋を手に取ると、ひょいと運転席にほおり込んだ
「なんだよ……こりゃ……こりゃあ！！」
男が小袋を開いてみると……。
「砂金だ！！」
「足りないか？」
運転手がぶんぶんぶんぶんと横に振ると、
「十分だ　何処へなりともいくよ」
運転手は応える。
「じゃあ、ゴドニアン山の麓に、アルトという村が在るという。そこまでたのむ」
「アルト村ねぇ随分遠い村だなぁ」
アシュマは視線を転じ、科学者十人に視点を定めた。
アーチェルはアシュマに倣い科学者二人を見回した。
「さて、どうするか……？」
アシュマが対応に苦慮する。
「どうするかって、何を？」
アーチェルが聞く。
「ひいぃぃぃ……」
怯えきった科学者二人はこのトラックに積んであった水十リットルと予備の通信機、それに『棺桶』とともに降ろされた。

第六節　アシュマとエヴァイブ・エブルと鬼虎と

アシュマ達はアルト村にたどり着いた。
そこは牧歌的な田園風景を持ち、人里からある種隔離された感があった。
村の入り口で、トラックの運転手にここで待つよう指示をして、アシュマたちは村に入って行く。
「アシュマさま。ここにエヴァイブ・エブル様がいらっしゃるの？」
「……の、はずだ」
「どこにいるのかしら？」
周りを見ても人などいない。
村ならもう少し人がいてもいいはずである。
その、いていい筈の人間が辺りにいない。
そんな戸惑うアシュマ達を見ている勢力が二つあった。
一つは、ガルマインの『影』達である。
彼らは密かにアシュマの後を付けて来ていたが、余りの人の気配の少なさに、自由に動けないでいた。
仮に動けばすぐに気配を察知されるだろう。
彼らは自分たちが有利に動ける場所を探していたが、結局見付からず夜を待つしかないとの結論を付けた。
しかもここは田園地帯で自分達はここでは目立ちすぎる。
今回彼らの目的はエヴァイブ・エブルとアシュマ・アトーとの戦いの行方を見極めた所で生き残った方に止めを刺し、鬼虎とアーチェルを奪う事にあった。
幸いうまく身を隠せる夜は、そこまで来ている。
そしてもう一つの勢力とは……みな『仮面』を付け、上半身は裸、黒袴を付けていた。　この出で立ちは、そう、ノリトレアの空中戦艦「ハーティアー」で凄惨な事件を起した仮面の男と同じ出で立ちである。

彼らの目的も、アーチェルと鬼虎であったが、目的はそれだけではないようだ……。
「ナンバー１１。我らの目的はアーチェルなる女と鬼虎、そして、出来ればイレギュラーナンバーのどちらかの身体だ。これについては、生死を問わない」
「あの黒装束共は、目的達成の為には邪魔なだけだ。なぜ、生かしておく？」
「ナンバー３４、今動くのは得策ではない。奴らを倒せは、イレギュラーナンバー『達』とコアユニットに我らの存在が知られる事になる」
「ナンバー１１。何処に不都合がある？　いずれは奴らの前に姿を現すのだ。ならば早いうちに芽を摘んでおいたほうが良いと思うが？」
「ナンバー５３、効率の問題だ。彼らが戦力を削り合いをしてくれれば、後々、我々の仕事がやりやすくなる」
「……うむ。了解だ、ナンバー１１。ならば、我らは暫く控えよう」
「うむ」
そう言って『ナンバー』と呼ばれる者達はもうすぐやって来る闇に姿を掻き消した。
アシュマ達はやっと村人を見つけた。
見つけたのは老人で、どうやら野良仕事の帰りらしい。
服は野良着で、肩に鍬（くわ）や鋤（すき）を掲げ、背に籠を背負い、手には鎌を握っていた。
「おい、爺さん。エヴァイブ・エブルの居所を教えてくれ」
「何だな、あんた。エヴァイブの爺様の事聞くなんて、怪しい奴だなや」
どうやら、エヴァイブ・エブルのことは知っているらしい。
しかし、最初の聞き方が悪かったのか、警戒されかけてる。
（あ、これはいけないわ）
アーチェルは思った。

「なぁ、爺さ……」
そこまで言いかけたとき、アシュマの袖口をアーチェルが引っ張った。
「な、なんだ、アーチェル？」
（わたくしに任せてくださいません？）
アーチェルが小声で囁（ささや）く。
（大丈夫なのか？）
アシュマも小声で応える。
（任せてください！）
アーチェルは太鼓判を押した。
「もう帰っていいだか？」
「あ、お爺様、もう少しお時間いただけますか？」
アーチェルが満面の笑みで、老人に聞いていた。
「おお、めんこい娘っ子だなや。時間ならはいて捨てるほどあるでよぉ」
老人も助平心が働いたのか機嫌よく応える。
「いえ、お時間はそれほど取らせませんわ。わたくしどもはエヴァイブ・エブル様の庵（いおり）を、探しておりますの。その庵は何処にあるかご存知ありませんか？」
老人は少し考える風にして、
「う～ん……。ありゃあ、庵っちゅうより、横穴だなや。洞窟じゃあ。あのお人は、あんな歳して、朝、山野を駆け巡り、後は日がな一日棒振りしてのう。後は洞窟近くの滝に打たれているだよ。若い者でもかなわねぇって」
「まぁ、そんなお爺さんなのに？　まぁ」
などとアーチェルは驚いてみせ、その後、
「エヴァイブ・エブル様のその『横穴』ですか？　場所をお教えいただけませんか？」
そう尋ねる。
それによると近くに流れる川に沿って、上流に向かって上ってい

き、大きな横穴が見えたら、そこがエヴァイブ・エブルの『庵』だという。
「さて、行くか、アーチェル」
「はい」
「馬鹿こくでねぇ！　もうすぐ夜がくるだ。夜になればこの辺は、真っ暗になるだぁ。そんな中、エヴァイブさまの所に行くなんて、危ねぇだ。それにこれから行けたとしても、真夜中だぁ。悪い事はいわねぇ。今晩、おらん家でゆっくり休むだぁ。うん、うん。その方がええ」
　アシュマと、アーチェルは短く話し合い、老人の家に厄介になる事にした。
「では、爺さん　世話になる」
「この若ぇ者は、何か物言いが引っかかるだなぁ。それに控えてこっちの娘っ子はめんこいだなぁ。まるでお人形さんみたいだなぁ」
　老人は、アーチェルの事をほめつつ、やっと老人の家に着いた。
　ここいら辺りの農家はみな似た様な造りで、上背のある茅葺(かやぶき)造りと大掛かりなものだった。
　迎えに出たのは、この家の老婆だった。
「お帰りなさりませ、爺様」
「疲れただよ。婆様。今日は客人を連れて来ただ。さ、入んねぇ」
　老人に誘われ、玄関の敷居をまたぐ。
「世話になる、婆殿」
「お世話になります。お婆さん」
　二人が挨拶すると、
「あんれまぁ、ええ男だぁ　さ、はいんね、はいんね。あんれ、こっちはまた、お人形さんみたいに、めんこい女子(おなご)じゃなぁ。さぁ、はいんね、はいんね」
　そう受けて家の中へと誘われた。
　囲炉裏のある間へ通されて、二人は、自在鉤でつるされた鍋のものを振舞われる。

そして、アシュマは地酒を勧められ、その間アーチェルは湯を頂戴していた。
アーチェルが湯から上がると、老人が酔いつぶれていて、アシュマは相変わらず地酒を手酌で飲んでいた。
「アシュマさま、こんなに飲んで、いい加減になさりませ」
「そうか？　まだ酔うてはおらんが」
「うっ、お酒臭うございます、一体どのくらい飲んだのでございますか？」
「さ、三升ほど……」
床には一升瓶が三つ転がっている。
「明日はエヴァイブ様にお会いすると言うに、アシュマさまは……。もう、しりませぬ」
「わかった。湯を借りて、酒の気を抜いてくる……それにしても、その『さま』付けは何とかならんか？　アーチェル。なんか、こう……くすぐったいと言うか……むずむずするというか……なんと言うか……」
「だめです……。アシュマ『さま』はアシュマ『さま』……くすっ……」
「婿殿は嫁ごに尻にしかれておるな」
「い、いや、そんな、嫁ごだなんて、アシュマさまとそんな……」
「はぁ……」
アシュマはため息を吐く。
「それに婿殿も、ほんにええ男だしのぉ。ワシが後六十も若ければ、爺さんなんぞほっといて……」
「……おばば殿。湯を借りうける」
「おお。そんな『くうる』な所も女心が惹かれるのう。のう、嫁ご殿」
「はい、そんな嫁ごだなんて……」
アーチェルは頬を薄紅色にそめて、ついその気になってはしゃいでいた。

ざあっ！
アシュマは湯船に浸かり酒の気を抜いていた。
が、実際は酒の気を抜かねばならないほど酔ってはいない。
明日はあの武神、エヴァイブ・エブルと対峙する事になる。下手をすれば命のやり取りをしなければならない事態も在り得る。
ざぁっ！
アシュマは湯船を出て、
「ざあっ！　ざあっ！」
何度も、何度も頭から湯をかぶっていた。
もし、エヴァイブと戦う羽目になって、自分が負けてしまったら、アーチェルはどうなる？
やはり、あの『バヴェル』の一部となって破壊の権化に成ってしまうのか？
それとも……。
アシュマは考えるのを止めた。
アシュマは湯から上がって、おや、と思った。
アーチェルがいないのだ。
戸を開けて老婆が囲炉裏の間に入ってくる。
「おや、婿殿、嫁ごをお探しかね……」
「はぁ、まぁ……」
アシュマは
（別にあんた方の婿になった訳じゃない）
そう思いながら、辺りをきょろきょろしていた。
「もう寝間で休んでいるだよ」
「そうか」
「こっちじゃ」
アシュマは寝間まで案内される。
そこにはアーチェルが布団をかけ、寝息を立てて気持ちよさそうに寝ていた。
「本当に眠り姫だな」

「婿殿、なんか言ったかえ？」
「いや、なにも」
「んだら、嫁っ子の隣に寝なせえ。明日は早いんだべ？」
老婆は目を転じて、アーチェルの隣の布団を指差す。
「済まぬ。厄介になる」
アシュマはアーチェルの隣の布団に潜り込んだ。
「んだば、ゆっくり休むがええ……」
「では、失礼」
アシュマもゆっくり眠りへ誘われていった。
……
どれ程時間が立ったろう、アシュマは、ふと邪なる気を察知し、目を覚ました。
枕元に置いてある無名の豪刀を手元に引き寄せた。
「アーチェル、目を覚ませ」
アーチェルは未だ夢の中だ。
「アーチェル！！　目を覚ませ！！」
アシュマが叫ぶのと同時に茅葺の屋根を掻き破り『影』共が降りてきた。
『影』はエヴァイブ・エブルとの戦いを待たずとも、アシュマを倒せると踏んだのだろう。
『影』はアシュマ目掛けて襲ってきた。
アシュマはすばやく抜刀し、無銘の豪刀を上に下にと振るうと股を割られた『影』や両足を吹き飛ばされた『影』が言葉を飲み込みその場に転がった。
「う、ううん……」
アーチェルはまだ目を覚まさない。
アシュマは再び声を上げる。
「起きろぉ！！　アーチェル！！」
「ん……」
目を覚ましかけたアーチェルが見たものは無造作に切り取られた

手や脚だった。
「きゃ、きゃあああぁっ！！」
「アーチェル目が覚めたか？」
「今まで生きてて最低の起し方にございまする」
「済まんな、奴らに気が付くのが、ちと遅かったようだ」
アシュマはそう言いながら刀を振るっている。
剣戟の音はほとんどない。
それだけ一刀の元に斬り伏せている、アシュマの腕が卓越している証だったが、誰もその事に気付く者はいなかった。
「アーチェル！　離れるな！」
「はいっ！」
「頭を低くしてな！」
「はいっ！！」
既に十二～三人斬ったはずだったが、後から後から湧いてくる。
「キリがないな」
アシュマ一人であれば『秘剣朧霞』や『秘剣空蝉』も有効だったろう。
だが、アーチェルがいる今、両秘剣は使えない。
アシュマ得意の高速攻撃もアーチェルが側にいる今それもできない。
敵の包囲網はじりじりと狭まっていく。
「お爺さまとお婆様は！？」
アーチェルが叫んだ。
隣の部屋が、老夫婦の寝所だったはずだ。
「悔しいが見に行く余裕がない」
「わたくしが見に行きます」
アーチェルがアシュマの元から離れようとする。
「離れるな！！」
「は！　はい！！」
アーチェルは驚いた。

これまでの人生のうち、自分が叱咤されると言う事など、ほとんど無かったからだ。
一方、アシュマは自分の周りに近づく敵を一人一人倒していくか、それとも一挙に倒していくか……？
アシュマは何故か血振りをくれて、刀を納刀する。
アシュマ達を包囲する輪が狭まっていく。
「アーチェル」
「な、なんでしょうか」
「俺を掴んでいる手を離せ」
「え……？」
「俺を信じろ」
「はい！」
「次に、俺の合図で思いっきりかがめ。いいな？」
「はい！」
『影』共が、一斉にアシュマに向かって、手袋にはめ込んである鉤爪を伸ばして来た。「今だ！！」
「はい」
アーチェルはその場にうずくまった。
ガチッ！
と、音かして、鉤爪が円の中心で絡まった。
アシュマはその場から垂直に飛び上がり、そして鉤爪の中心にふわりと飛び降りる。
そして、立膝になり、アシュマはすかさず納刀した刀を、居合いの、すえもの斬りよろしく『影』達の首を切り離した。
残りの半円も身体をくるっと捻り、左の脇構えに構え思いっきり撫で斬った。
アシュマは鉤爪の輪からふわっと飛び降りる。
「アーチェル、怪我はないか」
鉤爪を丁寧に解きながら聞いた。
アーチェルは頭を上げつつ「はい」と言おうとしたが、頭を上げ

てみて見ると……
「！！　……ぁ……」
声にならない声を上げて気を失ってしまった。
アシュマは、
「あ、……まぁ、これだけ生首のない死体を見たんだ。気を失っても仕方ないか」
アシュマは鉤爪を取り払うと、アーチェルを背負い老夫婦の部屋を見た。
案の定、老夫婦は事切れていた。
どうやら、アシュマ達を取り囲んだのが、最後の『影』共だったようだ。
アシュマは二人の家の隣に穴を掘り、死体を丁寧に寝かせてやって、上に土を盛って、墓を二つ作ってやった。
最後に頭ぐらいの大きさの石を乗せてやり、冥福を祈ってやった。
その時アーチェルが目を覚ました。
「アシュマさま……何してるの」
「……」
「アシュマさま、何してるのよ……」
「……」
「アシュマ、それってお墓？」
「……」
「お墓なんでしょ？　それ！」
「……」
「あの、お爺さんとお婆さんの！！」
「アーチェル……」
「いやあああああ！！！　もう、いやあああああ！！」
「アーチェル」
「わたくしのために、わたくしなんかのために、もう人が死んでいく所なんて見たくない！！」
「アーチェル！！」

「わたくしなんて死んでもいい！！　もういや！！　もうぅいや！！」
「アーチェル！！」
アシュマは、ぱちん、と音を立ててアーチェルの頬を張った。
アーチェルは何をするのかと言う表情でアシュマを見た。
アシュマはアーチェルの目線にあわせて腰をすえる。
「前にも言ったろう？　アーチェルの責任じゃないって」
「アシュマ……さま……」
「アーチェルを利用して利権を得ようとする俗物ども……そいつらが何の罪もない人を殺していく。真に責任を問われて当然なのはそいつ等だ」
「ガルマイン……」
「そうだ」
アーチェルは立ち直りつつあった。
「ねぇ、アシュマさま、わたくしもお祈りして良いわよね？」
「ああ」
「……」
アーチェルは小声で色々呟きながら
胸の前で何かの印をしるし、目を開けた。
「……終わったわ、アシュマさま」
「そうか」
空は朝焼けの気配がすぐそこまでやって来ていた。
「もうすぐ夜明けだけど、このまま出発するの？　アシュマさま」
「いや、あと一日この家にいよう。服がお互い返り血でべっとりだ。落ち切らないかも知れないが、なるべくだったら清い身体でエヴァイブ殿に挑みたいものだ」
アーチェルが、神妙な顔をしているアシュマを見ている。
アシュマはふと気配を感じてアーチェルを見た。
見つめてしまった。
「ふぅん」

「な、何だ？」
「やっぱりアシュマさまって剣者なんだなって……」
「当たり前だ」
少し突き放したようにアシュマは言ってみた。
「うふふふ……うふふふふっ」
しかし、何故かアーチェルは楽しそうに笑っていた。

その光景を遠くから見ている勢力があった。
「ナンバー１１。黒装束の者たちは全滅してしまったぞ。これで共倒れにする当初の予定が狂ってしまったな」
「そのようだ、ナンバー３４」
「鬼虎とコアユニットは持ち帰るとして、イレギュラーナンバーたちはどうするのだ？　ナンバー１１」
「それこそ、共倒れを狙ったほうがいいだろう。ナンバー５３」
「そうだな、ナンバー１１。ならば我らも姿を消そう」
「うむ」

アシュマとアーチェルは丸一日その家で、ゆっくりと休養をとり、世話をしてくれた、老夫婦の墓に手を合わせ、冥福を祈った後、家を焼き、夜明け前にエヴァイブ・エブルの元へと向かった。
先日言われた川はすぐに見つかった。
そして、その川を上流へ行く道に沿ってひたすら歩く。
はじめは、なだらかだった川沿いの道は、上へ行くに従って、傾斜がきつくなっていった。
二人は川を上流沿いの道をひたすら登る。
しかし、上れども上れども、一向に庵代わりの洞窟など見えてくる気配がない。
「ア、アシュマさ…ま……ま、まって……」
「？？」

「ア…シュマさま……ま……って」
「どうした？」
「す、少し休みません？」
「そうか、疲れたか」
「ええ……ごめんなさい……本当にこの川の上流で、あっているのかしら？」
川を上流に上り始めて既に六時間が経っていた。
その間、休憩を四回ほど入れていた。
いずれも、アーチェルからの申し入れであったが。
「はぁはぁはぁ。そ、それにしても、化け物並みの体力ですね？」
アーチェルはアルスティーンお得意の形容を拝借して言ってみた。
「そうか？　そうでもないぞ」
アシュマには軽くあしらわれてしまったようだが。
「はぁ、はぁ、はぁ……だって、これだけ上っても、息一つ乱れてないじゃない？　はぁ、はぁ、はぁ」
「普通だろ？　休みながら登ってるし」
「はぁ……それは、わたくしがお休みのお願い入れてるからじゃない？　わたくしなしで行けば、もっと先まで余裕で登ってるでしょう？　わたくしのペースに合わせてくれているんでしょうけど……」
アーチェルはちょっとしたいたずら心で聞いてみた。
「ねぇ、アシュマさま、もしわたくし無しでここまで登るとしたら、どの位の時間でここまで登って来れるのですか？」
「う～ん。……三十分」
「え？　三十分？」
「ああ、三十分。だが、もうあと少しだと思うが」
「え？　ほんとうですか？」
「本当だ」
「絶対？」
「絶対だ」
……その後一行がエヴァイブ・エブルの庵に着いたのは四時間後

となった。
「はぁ、はぁ、はぁ……アシュマさまの……嘘つき」
「そうか？　すぐだったろ？」
「もう……」
「さて……」
そこは庵と呼ばれるものすらない所であった。
人が住めそうな大きな横穴があるだけである。
洞窟の中をのぞいて見ると布団や、文机、簡単な調理器具などが置いてあった。
アシュマが気になったのは枕元近くにあったまだ新しい血痕だった。
洞窟の前には少し開けた場所がある。
ここで剣術の稽古などしたのだろうか？
そこの目の前には滝がある。
よくエヴァイブ・エブルがここで滝に打たれるという。
だが今の時間エヴァイブ・エブルはいないようだ。
周りの竹やぶにも人はいそうにない。
「どうしましょう？　アシュマさま」
「暫くここで休もう。中で火もおこせそうだし。滝つぼ辺りには魚もいそうだし。アーチェルは少し休むといい」
「休む休まないは、後で決めるとしまして、おなかが空きました。食べ物を何とかしなきゃ」
「そうか」とアシュマは硬そうな枝を拾ってきては、小刀で両先端を鋭くしたものを、何本も作っていた
「アシュマさま　何作ってるの？」
「……これは銛（もり）」
「魚を取るあの？」
「……そのつもりだが？」
暫くして『銛』を十数本もって、滝つぼの近くにいき、足首の上まで水に浸かった

「ねぇ、アシュマさま、そんなので、ホントに捕まえられるの？」
アーチェルは、その目を、くりくりっ……と、して訊いている。
「まぁ、見ていろ」
まだ水面を見切らないうちに『銛』を、ひゅっ、と水中へ投げ入れてしまった。
「あ。そんな雑になさっては……え？」
そこには目を貫かれた魚が一尾跳ねるように泳いでいた。
その後、一見無造作に投げているように見えたが、狙いは正確無比で全て魚の目を貫いていた。
「これ以上は獲りすぎだな」
獲物は全て大物で六～七尾はあった。
「さすがアシュマさま……って、言いたいけれど、それじゃあ獲りすぎ……」
「……大丈夫、『エヴァイブ』様がいる」
「え？　……いるんですか？」
アーチェルは辺りをキョロキョロと、見回した。
「そう簡単には見つからん。俺も微かな気配を察知しているに過ぎないからな」
「そうなの……」
「……ああ」
その様子を物陰から見ている『眼』があった。
アシュマが魚を獲る姿を見て、
「なかなかの手練れやも知れん」
そう漏らした。
ナンバーと呼ばれる物たちとも違うその者は、気配を消し姿を隠した。
二人は魚を焼いて食し、泉の水で口をすすいだ。
そして、アーチェルを寝かしつけ、アシュマも洞窟の入り口で、つい、うつら、うつらとした所、音もなくアシュマの目の前に『そいつ』は現れた。

日は落ちかけ夕闇が迫っていた。
『そいつ』は鯉口をきり、柄に手をかけ、刀を抜く。
柄頭には『鬼』の髑髏の彫り物の飾りがついており、鍔には『虎』の象嵌が施されていた。
『そいつ』は刀を大上段に構えアシュマの脳天目掛けて刀が振り下ろされた。
「アシュマぁ！」
焚き火の光に照らされて、たまたま起きて来たアーチェルはその光景に驚いて、叫んでいた。
『そいつ』の刀がアシュマの頭上近くに達した時、ガキッ、と音がして『そいつ』の刀を、柄で受け止めていた。
「やはり、狸寝入りであったか。迂闊であったわ！」
「いや、そうでもなかった。エヴァイブ・エブル殿」
「そう言うそこもとは、何者か？」
アシュマは、抜刀する。
二人は会話の内にお互い構えを直していた。
二人とも下段の構えだった。
「アシュマ・アトー……」
アシュマとエヴァイブ・エブルが邂逅した今、その光景を、やや遠くから見ている眼があった。
自らをナンバーで呼ぶ彼ら。
彼らこそ『七賢人』の尖兵たちである。
規模はどの位で、本拠はどこに在って、どの様な能力があって……など、不明な部分が多々ある謎の集団であった。
「ナンバー１１、　イレギュラーナンバー達が戦うぞ」
「ナンバー３４、分かっている。勝負の成り行きをここで見るぞ」
「ナンバー１１、近すぎやしないか？」
「ナンバー５３、大丈夫だ。このくらいの距離であれば、我らの気配を消すのはたやすい事。案ずるな」
「了解だ。ナンバー１１」

一方、アシュマとエヴァイブのにらみ合いは続いていた。
今の所、二人とも、互いを牽制するに、とどまっていた。
「ほう、閃光のアシュマか。そこもとが何故この庵に来たな？」
「『鬼虎』を貰い受けに」
「残念なり、アシュマ・アトー。そこもとも他の武芸者と同じであったか」
二人とも互いに有利な場所を求めて、足元を確かめながら、ゆっくりと移動する。
「残念かどうかは俺の知る所ではないが、俺は養父の遺言にて鬼虎を貰い受けに来ただけだ」
「養父？　名は？」
「リクシル・ウォレウォリン」
「リクシルか……ならば、お主にはこの『鬼虎』を手にするだけの権利はあるな」
「ならば、鬼虎を譲ってくれるのか！？　エヴァイブ・エブル」
「甘いわっ！！」
エヴァイブ・エブルは下段から遠心力を加えての一撃を見舞ってきた。
「くっ！」
アシュマは下段に構えた刀を引き付けエヴァイブ・エブルの一撃を辛うじてかわした。
「それは、持ち主になる権利を得ている、と言うだけの事であって、持ち主になる、と言う事とは違うわっ！」
エヴァイブの鋭い撃ち降ろしの二撃目も何とか凌いだ。
そしてアシュマはと後ろに跳んで、間合いを外した。
そして、今度はアシュマの反撃とばかりに、刀を肩に担いで、思い切り跳んでエヴァイブとの間合いを詰める。
生死の間仕切りは、いとも簡単に切られた。
アシュマは肩に担いだ刀を、思い切り振り下ろした。
エヴァイブの所へと飛んだ勢いも合い余って、強力な一撃である。

「ぬおっ！！」
こんどはエヴァイブがアシュマの一撃を何とか凌いだ。
エヴァイブは受けた刀を斜めに傾げ、アシュマにたたらを踏ませた。
「！！」
アシュマは咄嗟に前のめりに、ごろりと転がる。
頭上に刃風を感じた。
そして、アシュマは体を捻り、膝の高さで刀を横に回す。
しかし、既にエヴァイブの姿はそこになく、間合いを外し刀を構えていた。
アシュマはゆっくりと立ち上がった。
アーチェルには素早過ぎる二人の動きを追いきれないでいた。
アシュマは、『秘剣・朧霞』を使おうと思った。
「秘剣・朧霞……」
アシュマは呟くように言った。
すると、アシュマは周りの風景に溶け込む様に消えて行く。
「む？」
エヴァイブ・エブルは戸惑った。
最初の内は。
次にエヴァイブ・エブル何かをぶつぶつ言い始め、最後に、
「喝！！」
大音声に言った。
すると次第に何かが変わってきた、と、アーチェルは思った。
空気が重たくなったと言うか、濃密になったと言うか……武道に疎いアーチェルにはどう表現していいか分からなかったが、アシュマにとっては悪い事が起こる予感がしてならなかった。
「アシュマさまぁぁ！」
不安に駆られたアーチェルは、思わず叫んでいた。
その時、きぃん、と鋭い金属音がした。
アーチェルが音のした方向をを見ると、アシュマとエヴァイブが、

鍔迫り合いをしていた。
アシュマは続いて『秘剣・空蝉』を使うことにした。
アシュマはつばぜり合いから逃れる為にエヴァイブの刀を押し戻し、後に飛び退いた。
その時エヴァイブは小手うちを見舞ってきたが、それは外れてアシュマの前に流れた。
「む？」
エヴァイブは一瞬の間に、今、見えるアシュマは像であり実体のない物と看破した。
そして、エヴァイブは虚像のアシュマには目もくれなかった。
ただ、アシュマの虚空からの攻撃を……アシュマの八双からの打ち込みを、エヴァイブは身体を捻りつつ受け止めた。
途端に、実体を表したアシュマは、再び鍔迫り合いとなる。
アシュマは鍔迫り合いのまま、再び『秘剣・空蝉』を使った。
鍔迫り合いをしていたエヴァイブは、再び虚像となったアシュマをつき抜け、たたらを踏んだ。
が、エヴァイブは刀を横にして頭上に掲げる。
そしてアシュマの切り落としを凌ぐ。
再び実像をそのままに、アシュマは三度『空蝉』を使った。
アシュマの虚像がそこに残った。
しかしエヴァイブは「喝ッ」と、大喝すると、アシュマの虚像が消え、実体が形となって現れ始める。
どうやら、エヴァイブ・エブルは『秘剣・空蝉』を虚像が織り成す幻惑の術と看破したようだった。
「流石は閃光のアシュマ殿。我と切り結んでここまで生き延びたのはお主が初めてじゃ。しかし、最後の二つ、あれはいかん。何故術が破られたか、お主には分かったかの？」
「濃密な気の流れが、蝙蝠の如く発信と反射を繰り返し、俺の位置を常に把握していたからだ」
「ほう、上出来じゃ。だが、お主の命はここで終わる。最後はお主

の最高の技で来い。せめてもの手向けじゃ」
「……」
「アシュマ……」
アーチェルが出てくる気配を見せる。
「くるなっ！！」
「あっ……」
アーチェルはその場で硬直してしまった。
アシュマはゆっくり納刀する。
「秘剣・閃光一刀」
「え？」
アーチェルはアシュマがなにを言ったのか聞き逃してしまった。
かといって、聞きなおせる雰囲気でもない。
「ほう、居合いで来るか。ならばワシも」
エヴァイブ・エブルも鬼虎を鞘に収める。
二人は互いを見たまま微動だにしなかった。
じりじりとした時間だけが流れる。
はらはらと葉が落ちてきた。
おそらくこの葉が落ちきった時、勝負が決まる。
皆がそう思っていた。
かさり。
葉が地面に落ちた。
二人の剣士がお互い前に出た。
鯉口が切られ二条の閃光が走った。
その時、それは起きた。
アシュマの無銘の豪刀が砕け散ったのである！
「！！」
「アシュマさま！！」
既にエヴァイブ・エブルは大上段に振りかぶっている。
「くっ！！」
アシュマは死を覚悟した。

「アシュマっ！！」
アーチェルが走り寄り、アシュマを庇った。
「……」
「……」
アシュマは止(とど)めを待っていた。
しかし、待っても来ない止めに、おそるおそる眼を開けてみた。
すると、喀血し立ち膝をして鬼虎を杖代わりにしているエヴァイブ・エブルの姿がそこにあった。
「と、止めを刺すが良い。おぬしの勝ちだ」
アシュマは立ち上がりアーチェルを側に抱く。
「俺はあなたに勝てなかった。その俺が『勝った』とは、とても納得いかない」
「だが、最後に立っているではないか。それが勝者と言うものじゃ。ゴホッ、ゲホッ、ゲホッ！！」
「大丈夫ですか？」
アーチェルが肩を貸そうと側に寄る。
が、エヴァイブ・エブルがゆっくりそれを拒否し、その場で仰向(あおむ)けに倒れてしまった。
「やはり、本来の持ち主でないと、力を消耗するだけであったわ」
「本来の持ち主……」
「そう。お主だ。アシュマ・アトー」
「やはり、養父の言う事は本当であったと」
「うむ、その通りじゃ」
「エヴァイブ・エブルさま……」
アーチェルは涙を落としながら、エヴァイブの頭を膝に乗せた。
「よい、よい。娘御(むすめご)よ。泣くでない……それよりアシュマ殿、願いがある」
「なんなりと」
「ワシが死んだら、骸はこのままに捨て置いて欲しい」
「そんな、捨て置くだなんて、出来ません」

「いいんだ、アーチェル」
「なんで、アシュマさままで、そんなひどい事を言うの？」
「それが剣者の宿命じゃ、頼む捨て置いてくれ」
「……」
アーチェルは話すべき言葉を失った。
「では……な……」
「はい……」
エヴァイブ・エブルが最期の言葉を発する。
アシュマが受けた。
最期に、ごぼっ、と、血を吐いてエヴァイブは事切れた。
アシュマは鬼虎と、その鞘を引き抜いて、納刀し腰に収めた。
「アシュマさま……」
「……」
アーチェルも立ち上がったが、アシュマにどう言葉を掛けていいか分からない。
「いい加減、出てきたらどうなんだ？」
「え？」
アーチェルは一瞬、アシュマが何を言っているのか分からなかった。
「そんな所にこそこそ隠れて見ていないで、こっちに来たらどうなんだ！」
すると、あちらこちらの雑木林や竹林等からアシュマ達の周りに三体の人影が出現した。
「あ、あれは……」
出現した男達を見てアーチェルは驚きの声を発する。
「アシュマさま、あれが以前お話した仮面の者です」
アシュマは無言のままだ。
「たいした勘だ。我らが居る事を察知するとは」
仮面の男が話す。
「では鬼虎を頂こうか」

今度は別の仮面の男が言葉を発した。
「命は大切にするものぞ」
アーチェルは複雑な気分だった。
仮面の男がいなければ、アシュマに出会う事もなかったろう。
それが今や仮面の男たちはアシュマの敵になりつつある。
「言いたい事はそれだけか？」
アシュマは話しながら腰を落とし、鯉口に手をやり、いつでも抜刀できる様にした。
今のアシュマは何故か、機嫌が悪かった。
「お前は今の戦いで、精神的にも肉体的にも疲労しているはずだ。そんな身体で我らと戦うつもりか？」
仮面の男の一人が言った。
「抜け」
アシュマが静かに言い放った。
「愚かな」
仮面の男達が前、右、左と包囲を狭めてくる。
アーチェルは邪魔にならない様、徐々にアシュマから離れる。
更に仮面の男たちは包囲を狭め、あと一歩で一足一刀の間合いにまでになった。
仮面の男たちは一斉に抜刀した。
「秘剣・閃光一刀……！！」
その言葉を合図に男たちはアシュマに斬りかかった。
アシュマは電光石火の抜刀で、最初に正面の男の腹を撫で斬る。
そしてそのまま右脇構えの車に構え返す刀で左の男の胸を斬り断つ。
最後に反転し右の男を真っ向唐竹割りに男の頭蓋を断ち割った。
全て、一瞬の出来事だった。
「あっ……」
アーチェルは小さく驚きの声を上げた。
見ると頭蓋を割られた男は仮面を弾き飛ばされていた。

仮面の下にはアシュマと似た顔……いや、同じ顔をしていた。
「うっ……」
アーチェルは吐き気を抑えて目をそらす。
アシュマも驚き、他の男たちの仮面を剥ぎ取る。
すると、やはり男達はそれぞれアシュマと同じ顔が現れた。
「話には聞いていたがこうも同じ顔だと驚かざるを得んな」
「アシュマ……」
アーチェルは泣きそうになりながら、アシュマの側までやってきた。
アシュマはそっとアーチェルの肩を抱いてやる。
すると、アーチェルの嗚咽が聞こえてきた。
（あの男たちは一体何者なんだ？　何故俺と同じ顔を持つ？　何故アーチェルと鬼虎を狙う？）
雨がぽつりぽつりと降ってきて次第に本降りとなった。
雨は二人の若者を容赦なく打ちつけ、辺りの血を洗い流していた。

第七節　ノリトレアのクーデター

昨夜はエヴァイブ・エブルの庵で、休息をとった。
その後どうするか、アシュマとアーチェルは相談した。
相談の結果、アルスティーンのいる王宮市に戻る事にした。
アーチェルのこの国からの確実な脱出方法を手にするためだ。
アシュマ達は山から麓へ降りてきて村の入り口についたころには、とっぷり暮れて、夜になっていた。
あの、運転手と車はまだそこにいた。
アシュマはあり難いと思った。
運転手は寝ているようだ。
アシュマはゴンゴンと窓ガラスを叩き運転手を起こす。
「んあ？　ああ、旦那じゃねぇか。待ちくたびれたよ」
「ああ、すまない。王宮まで戻ってもらいたい」
「ああ、わかった。どうせ荷台にのるんだろう？　これを使うといい」
渡されたのは二組の毛布だった。
「これはあり難い」
「今度も、宜しくお願いしますね」
アーチェルが運転手を労(ねぎら)う。
「か、かまわねぇよ。きにすることはねぇ」
運転手はアーチェルの微笑みに照れたようだ。
二人は荷台に乗り込み、車は発車した。
「冷えるといけない。これを」
そう言ってアーチェルに毛布を全部掛けてやった。
「有難う、アシュマさま。……アシュマさまのは？」
「ああ、俺は大丈夫だ」
「だめよ。アシュマさまも、ちゃんとくるまって」
「本当に大丈夫なんだ」

「嘘つき」
「嘘じゃない。本当だ」
「ほんとに？」
「本当だ」
「じゃあ、ごめんね、アシュマさま。わたくしばっかり」
「大丈夫。気にするな。それより少し休むといい」
「じゃあ……」
アーチェルはアシュマに擦り寄ってきた。
アシュマはアーチェルの肩を抱いてやる。
二人は荷台の上ですぐに眠りについた。
暫くしてアーチェルはふと目覚める。
アーチェルは、アシュマは寒がっていないだろうかと、様子を見てみる。
アーチェルは自分の毛布を半分わけてアシュマにかけてやる。
するとアシュマは眠りながら毛布を手繰り寄せてしまった。
「ふふふ。嘘つきなんだから」
アーチェルは愛しい眼差しでアシュマを見つめた。
アーチェルは、安心し、すぐさま眠りについた。

アーチェルが夢心地のさなか、肩をゆするものがあった。
何事だろうと目を覚ますと、アシュマの顔がそこにあった。
アーチェルはとたんに照れて毛布で顔を隠した。
「どうしたのでございますか？」
「王宮に着いた」
「はい。すぐに参ります」
「済まない」
「王宮に戻るのはわたくしの意志。あれ程、エヴァイブ様の庵で話し合ったではございませぬか」
「いや、それもそうだが、髪の毛が乱れている。普通、婦女子と言

うものは、そう言った所に気を使うものなのだろう？」
「あっ、そういえば……」
と、言ってアーチェルは、手を頭にやったが……
「取るに足らないことです。別にいいのです」
と、微笑んで応えた。
そして車を降りると、そこは正確には王宮ではなく、王宮の城下町……王宮市と呼ばれている所の城壁の外であった。
王宮市は周りを城壁に囲まれ、そして中心部にある王宮の周りにも城壁がある二重の構造をしていた。
そしてそこには絶えず物資の移動が行われ、それに付随して酒場、食堂、武器防具屋、服屋、そして歓楽街など、無い物は無いと言われる程、物の流通が絶えない事から一種、不夜城の様相を呈していた。
しかし、その王宮市も今はひっそりとして、何処にも明かりを点している所は、無い。
街の角々に兵士が見張りに立ち、移動するものと言えば軍関係者以外にいない。
アシュマは金の小袋を二つ取り出し、運転手に手渡した。
「だんな、あいすまねぇこって」
「気を付けて行け。どうも様子がおかしい」
「わかってるさね」
アシュマ達は車を見送ると、身を隠すようにして城壁の方へ近づいて行く。
城壁沿いにどこかに侵入口はないかと移動していた。
その時、小声でアーチェルが、少しふざけたように言う。
「アシュマさまってお金持ちでいらっしゃいますのね」
「お金持ち？」
アシュマはきょとん、としてアーチェルを見返していた。
「お金持ち……」
「ええ、金の小袋をあんなにも」

「ああ、あれは、あれだけやれば、喜んで仕事を引き受けると思ってな」
「ええ、喜ぶと思いますわ。あれだけあげれば」
「あれは、やりすぎか？」
「まぁ、少々……」
その言葉の裏には多少非難の意味が隠されていた。
「俺は、金の価値など、良く分からんからなぁ」
アシュマはそんな非難など気づかずに、応えていた。
「あれでは、将来の奥様になる人が、ご苦労すると思いますわ」
「そうか。苦労するか」
「ええ。そうなったら、どうしましょ」
、アーチェルは意味ありげに言う。
「え？」
アシュマに聞き返されて、
「い、いえ、なんでもありません」
アーチェルは慌てて誤魔化した。
「それにしても、よく金の価値が分かるなぁ。普通は王女様と言うのはたくさんの侍女に傅(かしず)かれて、贅沢な生活をしているものだと、思っていたが」
アシュマは感心した。
「わたくしの住んでいる国は小さく貧しい国でした。毎年民たちと、種を植え、苗を植えて、穂を育て、そして民たちと一緒に穂を刈り取る生活をしていました。ですから……」
「そうか……済まない」
アシュマが申し訳なさげにした。
「あ、違うんです、アシュマさまを責めているんじゃなくて……その……そうだ、アシュマさま、アシュマさまの生まれた所ってどの様なところですの？」
「俺の生まれた所は分からない」
「え？」

「養父は、リクシル・ウォレウォリンと言って、どうやら俺を拾ってから隠遁生活を始めたらしい」
「……済みません、そうでしたね。わたくし、気が利かなくて」
今度はアーチェルが、アシュマの父が養父だった事を思い出して、自分の迂闊さを恥じた。
「いや、別にそんなことは気にしなくていい」
アシュマはその様子を察してアーチェルを気遣う。
「……リクシル・ウォレウォリン様の名をエヴァイブ・エブル様も知っておりましたね」
「もしかして、知己だったのかも知れんな。今となっては知る術も無いな」
「そうですね……」
「アーチェルは『七賢人』という言葉を聞いたことはないか？」
アシュマは話題を転じた。
「『しちけんじん』？　……いいえ？」
「……そうか」
「なんですの？　それは？」
「俺にもよく分からない」
アシュマは城壁内への入り口が近づいてきたので、アーチェルの歩みを手で制した。
そして、アーチェルを見返し、指を一本立て口に当てる。
アーチェルは頷いて理解の意を表す。
アシュマはすたすたと入り口の方へと歩んで行く。
入り口には兵士が二人いる。
アーチェルは、アシュマが余りにも大胆に歩んで行くので、はらはらとした。
その時アーチェルは、驚いた事に、アシュマの体がゆらゆらと夜の闇に消えていくのを認知した。
そして、
（ああ、これが『朧霞』なのね。そういえばエヴァイブ様との戦い

でも使っていたわね）
改めてアシュマに感心してた。
見ていると、兵士がどさりどさりと倒れた。
そしてアシュマが、ふっと現れ手招きした。
アシュマの所まで駆け寄っていくと、狭い路地裏に連れ込まれた。
アシュマの誘いで、路地裏を進んでいくと、テレビかラジオかの音声が、漏れ聞こえてきた。
『本日十一時二十五分、リーマス・ノリトレア国王が心不全の為、崩御なされました。アルスティーン・ノリトレア王子による毒殺説も流れ、当局はアルスティーン王子を現在捜索、行方を追っております。また、王宮市には本日戒厳令が布かれガルマイン・デッド王国付武芸指南役が臨時国防委員長に昇格されました。氏はアルスティーン王子宅より、長年死去されたと報じられ、幽閉されていたルーラン王子を発見、救出に成功し、保護をいたしました。近く王子に御即位願うものとみられる模様です。またこれらを受けて当面の間、夜間十八時から翌八時までの外出が禁止となり……』
「くそっ！　アルスティーンの言っていた、ガルマインの『あのお方』とはルーランと言う奴の事かっ！　こう触れ回ってしまっては、迂闊に手を出せないぞ！」
アシュマは悪態をつく。
「アシュマさま、アルスティーン様を助けに行きましょう！」
「どこへ？」
「どこへって……」
「いま下手に動くのはまずい。聞いてみるといい」
物音に注意するよう促す。
そして聞こえてきたのが……、
『……また当局は、我が国をご訪問中の、レキソタニア王国のアーチェル・アップルトン王女の誘拐犯と目されるアシュマ・アトーの潜伏先を捜索中で……』
……と、アーチェルには俄かに信じられない事を言った。

「酷い！！　言いがかりだわ！！　だってアシュマさまは……！！」
「アーチェル、声が高い」
すると……
「うるさいねぇ、全く、何処の誰だい！？」
「うるせぇぞ！　何時だと思ってやがる！！」
やはり近所が騒ぎ始めた。
「逃げるぞ、アーチェル」
「は、はいっ！」
アシュマとアーチェルはその場を逃げ出す。
それと入れ替わりで兵士がやってきて、
「なんだ、なんだ？」
「何を騒いでいる？」
兵士は辺りを捜索し始めた。
間一髪だった。
アシュマとアーチェルは路地裏を逃げていた。
ある程度まで行って、少し休んだ。
「ね、ねぇ、アシュマさま……はぁ、はぁ、その、携帯端末って、使え、ないのかしら？　はぁ、はぁ……」
「……こういう物って、盗聴とかされたりしないのか？」
「そ、そうですわね……そうかもしれない」
「それに、俺は手放しでアルスティーン殿を助けようとは思っていない」
アーチェルは我が耳を疑った。
「えっ？　何故ですの？　アルスティーン様にはあれだけ恩を受けておいて……！！」
「俺たちは何故、危険を冒してまでこの王宮市に戻ってきたんだ？
それは、アーチェル、君を確実に、レキソタニアに送り届ける方法を見つけるために、ここへ戻ってきたのではなかったのか？　それが今やこの国はクーデター騒ぎで混迷を極めている。ここにいるだけでも危険なのに、アルスティーン殿を助けるのは危険な事この

上ない」
　アシュマはアーチェルを説得し始めた。
「わ……わたくし、アシュマさまが、こんなに恩知らずな方とは存じませんでした！！　アシュマさまの力があれば、どれだけアルスティーン様が助かるか……！！　こうなったら、わたくしだけでも、アルスティーン様に助成いたしますわっ！！　アシュマさま、御機嫌よう、さようならっ！！」
　アーチェルは憤って大声を張り上げる。
　アシュマは焦ってアーチェルをなだめようとした。
「アーチェル！　声が高い！」
「ついてこないで下さいます！？　先を急ぎますので！！」
「わかった！　助ける！　アルスティーンに助成する！　だから一人で先走るな……」
「本当に！？　わたくしはアシュマさまを信じておりました」
　アーチェルはころりと態度を改めた。
　アシュマはやれやれと、思いつい、
「ふぅ……。疲れるお姫様だ」
　思わず洩らしてしまった。
　すかさず、アーチェルが
「聞こえてますわよ、アシュマさま」
　アーチェルにアシュマは止めを刺された。
「う……」
　その時、足音が聞こえてきて、明らかにアシュマ達を探すような声が聞こえてきた。
「おい、確かこっちからだぞ」
「ここの路地からだぞ」
　アシュマはまずいと思った。
　明らかに偵察の兵士だ。
「アーチェル、奥の方へ進めるか？」
「だめ、行き止まりになっております」

「仕方が無い」
アシュマは路地から出て偵察の兵士を叩こうと思った。
アーチェルはそれを敏感に察知して、
「殺してはだめ」
そう言った。
「分かってる。アーチェルはここにいてくれ」
「はい」
アシュマは急いで路地に出る。
丁度偵察隊と出くわす。
敵は五人だ。
アシュマにしてみればたいした数ではなかった。
偵察隊は小銃を手にしたが、アシュマの腰の刀を見て、小銃の代わりに隊に支給されている諸刃の剣を抜き、皆諸手に構えた。
アシュマも『鬼虎』を抜いて峰に返し、『秘剣・朧霞』を使う。
「ああっ！　消える……消えていく！！」
「どこだっ！　どこにいる？」
「うわぁっ！！」
「ぎゃっ！！」
悲鳴に近い声とは裏腹にアシュマは無慈悲に鬼虎を振るっていた。
五人の偵察隊が皆、気絶した後、アーチェルの元へ戻る。
「大丈夫か？」
「ええ。あの、敵の兵士達は……」
「気絶している。今のうちだ」
アシュマとアーチェルは急いで別の路地に走っていった。
「これでは埒が無い……とりあえずハグム殿のところへ行ってみるか」
「ハグム殿？　確かもう一人の武芸師範役でしたわね」
「……そうだ。以前アルスティーン殿に聞いたことがある。ハグム殿は中立の立場を取っておられると。味方はしてはくれなくても、敵にはなるまい。それに下手をするとアルスティーン殿はどこかに

捕まっているかもしれない。情報を得る為にもハグム殿に会う事は有効かもしれない」
「分かりました。行きましょう」
「ただし一度王宮へ続く門を潜らないと」
「そうでしたわね……。アシュマさま一人だと何とかなったのに……」
「とりあえず、行って見てから、考える事にしよう」
「ええ……」
二人はハグム・マグマイヤーの館に行く事にした。

その頃、とある貴族の地下室にて、貴族たちが話し合っていた。
吊り下げられたランプのまわりには蛾が飛び交っていた。
コンクリートむき出しの狭く暗く湿ったそこは、貴族たちのいわばアジトであった。
「近衛師団が抑えられているのは痛いな」
貴族の一人が腕組みをして話した。
「しかしそのうちの第一〇四大隊と第一〇六大隊はこちら側につくつもりだぞ」
別の貴族が身を乗り出して話した。
「その話は本当なのか？　ガルマイン側の情報操作ということも……」
貴族の一人が不安に駆られながら話した。
「いや、おそらく大丈夫だろう。あそこの大隊長たちを知っているが、信用できる者達だ」
「ならば、戦闘を開始してもいいはずだ。だが、砲声も爆音も聞こえてこない。どういうことなのか」
話し合いはだんだん熱を帯びてきた。
「どちらにしても、第一〇四大隊と第一〇六大隊だけでは戦力不足は否めないぞ」

「しかし負けるわけにはいかん。貴殿らの戦力を集結して第一〇四大隊、第一〇六大隊と合流すれば……」
「だが、第一〇四大隊と一〇六大隊の大隊長が捕まっている可能性も考慮に入れねば……」
「いや、向こうの大隊長もこちらとの合流を待っているとは考えられないか？」
話し合いは混迷を極めて来る。
そこにいる貴族たちは一人の男にこの事態の解決を求めた。
「アルスティーン様。アルスティーン様のお考えは如何に？」
なんとここは『アルスティーン派』のアジトだったのだ。
「このままでいよう」
アルスティーンが苦渋の面を作ってそう言う。
「は？」
「静観だ。こういう状況になった時点で既に我々の負けだ」
「何を言い出すんですか？　今、立たずして、いつ立つんですか？」
「貴公たちは大事な事を忘れている」
「何でございましょう？　アルスティーン様」
「民草のことだ。ここで、戦乱を起こせば民草たちは、命を失い、家を失い、職を失う。また、ここで、戦うと言う事は、同胞たちと戦う事になる。それでも貴公達は戦を望むのか？」
「今、戦う事は民の為でもあります。ここで、戦わずして、ガルマインの天下となれば、待っているのはガルマインによる、恐怖政治だけですぞ。そうなると血の粛清が待っているのは必定。その後は政治的にもガルマインを追い詰める事、不可能。やはり、今、戦うしか無いと存じます」
「そうか」
アルスティーンはしばし沈黙をした。
そのまま、数分が流れた。
そして、眼を見開き、こう言った。
「よし戦おう！」

その場にいるものが、「おおおっ」と感嘆の声を発した。
「して、いかがなさいますか？」
「まず、ここにいる貴公等の私兵をここに集結し戦闘準備をする。第一〇四・第一〇六大隊の戦力は無いものと考える。集結終了後、全ての戦力をガルマインに集中しこれを撃破する『錐の戦法』で行く！」
皆がその場で頷く。
「しかし、アルスティーン様。何とか第一〇四大隊と第一〇六大隊に連絡がつかないものでございましょうか？　上手くすれば囮になってくれようものを」
「暫し待て。……爺！」
すると、部屋の隅の暗がりから声が聞こえてきた。
「はい、若」
「今、話していた通りだ。そちの手のものを使い、ガルマインの居場所を突き止め、第一〇四、第一〇六各大隊の動向も大至急探ってまいれ！　但し、爺、おぬしは動くなよ。傷も癒えて無い故な」
「御意！！」
闇の中の気配が消えた。
「では、皆、手勢を連れて、マルル広場に集結。それまでは極力戦闘を避け戦力を温存、集結後決起する！」
「アルスティーン様はどうなさるので？」
「王宮に戻れば親衛隊がいるだろう。その親衛隊が使えれば良いのだが、ガルマインの私兵と化していたら、それこそ捕まりに行くようなものだな」
「では、行くのをおやめなされ、危険すぎますぞ」
「そういう訳にも行かないでな」
そう言ってアルスティーンはアジトの階段を登っていった。
アシュマとアーチェルは王宮へ続く跳ね橋と門の前、兵たちに見

つからない、ぎりぎりの距離までたどり着いた。
橋には照明が取り付けられ、そこだけ闇に浮かび上がっている。
門の前には全高が二十メートルを超える魔導機兵が一体、全高が六メートル前後のノーマルな魔導機兵が三体、軍用車両二両、二十人前後の兵士達がいた。
「……結構警戒が厳重だな」
「そうですね」
「強引に通る事は出来なくは無いが……」
「出来なくは無いが？」
「敵の魔導機兵が邪魔だな」
「邪魔と言うと？」
「多分『朧霞』も『空蝉』も使えないだろう」
「なぜ？」
「あれは、人の眼は誤魔化せても、機械の眼は誤魔化せないだろう」
「そうなんですの？」
「ああ……」
「ではあそこからは入れませんの？」
「無理をすれば、入れるだろう」
「じゃあ、別の所から……」
「俺もそう思ったんたが、如何せん俺もアーチェルもこの国の地理に疎い」
「じゃあ、やっぱりあの門から入るのでございますのね？」
「ああ、ちょっと荒事になる。許せ」
「無理な事を承知で言います。なるべくなら人を殺さぬよう……」
「分かった。じゃあ行って来る。アーチェルはこの場所で待っててくれ」
「はい。ご武運を」
アシュマは少し驚いた。
アーチェルが「ご武運を」などと言うわけ無いと思ったからである。

「行って来る」
アシュマは千万の味方を得た気分になって敵の只中に歩み寄って行った。。
アシュマは大胆にも橋の袂まで歩いて来た。
兵士が三人やって来る。
「おい、お前何処から来た？」
「夜間は外出禁止だぞ」
「……こいつ、刀を持っているぞ！！」
「武装した奴がいるぞ！！」
アシュマは鬼虎を抜いた。
そして……
「……秘剣・朧霞……！」
一人呟き、朧霞で、倒せるだけ倒そうと考えていた。
「き、消えていくぞ……がぁっ！」
アシュマは峰に返した鬼虎で、ばしりばしりと兵たちを倒して行く。
「何をやっているんだ下の連中は？」
モニタで、兵士たちとアシュマの戦いを見ているパイロットは、まるでいいようにやられている味方の兵を歯がゆい思いで見ていた。
かといって、魔導機兵の持っている武装は強力すぎて、アシュマだけを狙うなどとできる訳にも行かない。
アシュマは兵士たちを大方倒した後、魔導機兵の足元に潜り込む。
次にアシュマは鬼虎で魔導機兵の足首を『斬った』。
その時アシュマは手ごたえが軽いと思った。
「これが鬼虎の切れ味なのか」
思わず呟く。
アシュマ自身も半信半疑で行った行為だが、これ程までの切れ味だとは思っていなかったのだ。
刃こぼれも無く、折れたり、曲がったりせず、これ程までに切れ味の良い刀がこの世に存在しているとは……。

アシュマはそれだけで、この鬼虎に価値を見出していた。
「う、うわっ」
最初の魔導機兵はバランスを崩し倒れこんだ。
アシュマは次の魔導機兵の足元に潜り込み、足首を斬った。
魔導機兵はバランスを崩しアシュマは次の魔導機兵の足首を斬った。
そして、最後の大物の足元へ走り、やはり足首を斬った。
これには少々手を焼いた。
足首を斬るには刀身が短かったのである。
結局二度三度と刀身を振るっていた。
あらかた、魔導機兵を倒した後、アシュマは大音声に言った。
「武装を解いて出て来い！　この刀はコクピットの装甲を貫いてお前達の命を奪う事など容易（たやす）いぞ！それは今の戦闘で分かったはずだ！　他の部隊に連絡など入れるなよ！」
パイロットたちは次々武装を解除して出てきた。
アシュマはパイロット達を縛り上げ、急いでアーチェルの元へ戻る。
「急ぐぞ、アーチェル。次の敵が来る前にあの橋を渡ってしまうんだ」
「そんなにすぐに次の敵が来ますの？」
「来る。だから急ごう」
アシュマはそう言ってアーチェルに背中を向ける。
「？？」
アーチェルはアシュマが背を向けた意味が分からないらしい。
「俺の背に乗るんだ」
「え？　でも……」
「時が惜しい。早く乗ってくれ」
「は、はい」
アーチェルはアシュマの背に乗った。
「お、重くありませんか？」

アーチェルは少し恥じらいを見せた。
「喋るなよ。舌を噛む」
「はい……きゃっ！」
アシュマは軽々とアーチェルを背負うと疾風のごとく走り始めた。
アーチェルはまるで鳥のような軽さで背負っている感覚が無いと思われる程である。
アシュマ達は橋を過ぎ、照明の当たらない闇の中へ走り去った。

アルスティーンはその橋に違和感を覚えた。
警護の兵達、魔導機兵がことごとく倒され、パイロット達が縛り上げられているのである。
アルスティーンにとっては渡りに船だが、敵兵たちには災難であったろう。
一際眼を引いたのが、魔導機兵の足首の切り口だった。
こんなに綺麗な切り口の金属断面を、見たことが無かったからである。
一体何をどうすれば、こんな断面になるのか、アルスティーンには、想像ができなかった。
「アルスティーンだぞ！」
「誰か起きろ！　本体に連絡しろ！」
縛り上げられた兵士が叫び、倒れている兵を起こそうと躍起になっていた。
アルスティーンは連絡などされては困ると思い、足早にその場を立ち去った。
アルスティーンの館である東の大塔には、おそらくガルマインの手の者によって、封鎖されているだろう。
アルスティーンは王宮の親衛隊詰め所に直接向かった。
紆余曲折を経てアルスティーンは詰め所の前まで来た。
「ちっ！」

アルスティーンは舌打ちをする。
詰め所の周りにも、兵士たちが辺りを警備していて、中に入る事が出来ないでいたからだ。
「待てよ……」
アルスティーンは考える。
詰め所の周りを警備して、警戒していると言う事は、親衛隊はガルマイン側ではなく、アルスティーンの側であると『思われている』と言う事に気付いた。
後はどうやって、接触するかであるが、これが難しい。
あまり時間は掛けられない。
アルスティーンは、しばし沈思する……。
周りを見てみるとは近くに大きな木があるのを認めた。
木に登り、詰め所の方を見てみると、詰め所にも大きな木が茂っていた。
アルスティーンは、詰め所の木に向かって左手を向け、手首の力加減を微妙に変えてみる。
左手の手首には黒いリストバンドが巻かれていて、そこからワイヤーが発射された。
それは、アルスティーンの『草』の者の、標準装備である。
ワイヤーは見事向こうの木に打ち込まれ、もう一方の端はアルスティーン側の木に結び付けられ、二本の木は繋がった。
「まさか、爺の真似事をするとは思わなかったよ」
アルスティーンは、自分でも分かる程の苦笑しながらワイヤーを伝って詰め所の敷地内に忍び込んだ。
詰め所の敷地内にも警備の者がいて、辺りを見回っていたが、外ほど警戒はしていない様だ。
アルスティーンは屋根に向かってワイヤーを打ち込んだ。
ワイヤーを伝い屋根に登り、屋根瓦を外し屋根板を引っぺがし、屋敷の中へ侵入した。天井裏を伝い天井板をずらしては中の様子を伺った。

分かった事は親衛隊の面々は皆、部屋の一室に集められ、閉じ込められている事、手足を縛られ体の自由を奪われると言った事は無いようだ。
ただ、武器については奪われているように見える。
見張りもいない。
アルスティーンは意を決して屋根板を外し下に降りた。
「アルスティーン様！！」
皆が皆アルスティーンの登場を喜ぶ。
「しっ！！　声が高い」
アルスティーンがそれを注意する。
「申し訳ございませぬ」
「それより何故決起しなかった？　努めて言うが責めているのではないぞ」
「私より御説明申し上げます」
親衛隊隊長のオフヴがアルスティーンの元へ歩み寄った。
「オフヴか。よい、さし許す。申してみよ」
「はっ。我ら親衛隊はアルスティーン様の警護を任じられし者。しかし、アルスティーン様の行方分からずでは、我ら動く事できず、ガルマインの手の者と戦う事も悪戯に戦力の消耗をさせるに過ぎず、如何せん、我らどう動いていいのやら、分からずと言った次第にて……」
「相分かった。ではそなたらに命じる！　武装し詰め所を脱出、その後マルル広場に集結、その後別命あるまで待機せよ！」
「はっ！」
「オフヴ！　我らの魔導機兵は何機ある？」
「はっ！　十機程この館の地下に隠してありまする」
「余が乗れそうな魔導機兵はあるか？」
「はっ！　ございます」
その時、襖（ふすま）が開いてガルマインの兵が入ってきた。
「貴様ら！　何を騒いでおるか！？」

すると親衛隊の眼が一斉に兵士に向けられた。
元々親衛隊は武術に長けたものが選抜された者達である。
多少武器が無くとも意に介すものではなかった。
すぐさま、最初の兵士は倒された。
「お前達は、移動車両の確保にまわれ。お前たちは、武器の奪還を！　残りの者は余に従い、魔導機兵を確保しに行くぞ」
「はっ」
「では、散れ！」
「はっ！！」
役目を与えられた各々の親衛隊はそれぞれの役目を与えられ散った。
アルスティーンは親衛隊を十名程を連れ、地下の格納庫へと向かう。
途中の敵は皆、親衛隊が方を付け、アルスティーンは親衛隊の輪の中心を堂々と歩いて行く。
「格納庫にございます」
オフヴがアルスティーンをいざなった
「うむ」
改めて、アルスティーンは格納庫を見回す。
「余が乗る機体はどれか？」
アルスティーンが尋ねる。
「正面の機体にございます」
「おお！」
アルスティーンの乗る機体は特別仕様の機体だった。
ライフルとマシンガンがそれぞれ一丁ずつ、格闘専用にロッドが二本、装甲は通常のものより厚くしてあった。
アルスティーンはコクピットに座り、エンジンである魔導石を起動させた。
格納庫の扉が開かれ、外への通路が現れた。
「発進！」

次々と魔導機兵が格納庫の坂を上って外へ駆け上って行く。
外には親衛隊が八両の戦闘車両に乗って待っていた。
やはり、親衛隊詰め所の地下格納庫に隠されていたものだった。
「行くぞ、余に続け！！」
各々の魔導機兵の踵（かかと）には、金属製の輪がはめ込まれており、それを回転させる事によって、高速移動を可能にしていた。
外にいる敵の兵士や魔導機兵達は、突然現れたアルスティーン側の魔導機兵や親衛隊達に驚き、戸惑った。
アルスティーン達は外にいる敵の魔導機兵をマシンガンの一斉射であらかた片付けてしまった。
敵の通信機は脱出する時に壊してきた。
連絡は暫く取れないだろう。
後は、雑魚には目もくれず一斉にマルル広場に向けて移動した。

ガルマインは王宮の南にある塔、南の大東、その頂にある軍司令部の司令席に座っていた。
軍司令部は、この城を構成している幾つかの塔の内、五つの大塔の最上階に位置している。
即ちそれは、南の大塔の他に、西の大塔、北の大塔、東の大塔、そして中央大塔にも軍司令部と同じ施設があり、軍令の麻痺を回避する措置が施されていた。
そして既に元老院は軍によって抑えられ、元老院議員は軍の管理下の元に自由を奪われていた。
司令部には、モニター類がびっしりと並べられ常に新しい情報がもたらされた。
目の前には大きな机があって、これ自体が大きなモニターとなっており、地図が表示され、敵、味方、双方の配置がわかるようになっていた。
「御報告申し上げます。アルスティーンが親衛隊詰め所に現れ、こ

れを捕らえようとした所、魔導機兵を十機程を含み百名程度の武装した親衛隊が、駐留部隊と衝突、包囲網を突破、現在も逃走中です」
「一個中隊をもってこれに当たれ！　アルスティーンの生死は問わない」
「はっ！」
続いて兵士がやって来た。
「御報告申し上げます。拘束を逃れた、元老院の貴族たちが不穏な動きを見せております。中には私兵の魔導機兵数機を起動させ、どこかへ逃走した者もおります」
「行き先はおそらくマルル広場だな。広場の周りに二個中隊を配備、樹木の中に潜ませ、敵が集結し次第、包囲しこれを殲滅させよ。念のため第十二番門に、二個中隊を配備、これを警備させよ」
「はっ！」
ガルマインは一呼吸置いて息子を呼んだ。
「ガデウィンよ」
「は！」
「裏切り者の大隊長共はいかがした？」
「は！　現在地下牢につないでおります。アルスティーンの草共が、接触を謀ったのでアルスティーンの決起とともに、武装蜂起をすると偽の情報を掴ませて置きました」
「そうか。相分かった。別命あるまで、待機せよ」
「は！」
更に続いて兵士がやって来た。
「御報告申し上げます。先程、第六門跳ね橋においてアシュマ・アトーらしき人物と交戦、約三十名を負傷させ、王宮内に侵入。現在も逃走中です」
「まて、王宮内へ続く門には魔導機兵が配備されていたな？　それらはどうなった？」
「足首を斬られ倒されたとの事です」
「足首を斬った？　何かの間違いではないのか？」

「いえ、足首を斬られたとの事です」
「うーむ……」
魔導機兵の鋼鉄製の足首を刀で「斬る」事など、常識的には考えられない事である。
わざわざ魔導機兵に、単身挑む事ですら無謀なのに、足首を斬るとは、一体どういう事か？
「鬼虎か……」
「は？」
「いや、なんでもない。女はいなかったか？」
「は。おったようです」
「女はアーチェル王女と思われる。アーチェル王女には決して危害を加えるな！　引き続きアシュマと思しき奴等の行方を追え！」
「はっ！」
兵士達は去った。
「鬼虎に対する見方を、ちと変えねばならんかも知れんな」
ガルマインはモニターを見ながら、独りごちた。

アシュマとアーチェルはハグム・マグマイヤーの館の前に来た。
ここにも警戒の眼は光っていた。
兵士は辺りを見回し、魔導機兵までが、警戒に当たっていた。
「甘かったか……」
アシュマは自分の考えが間違ったものであると認識した。
「どうしましたの？　アシュマさま」
「考えても見れば、ハグム殿はガルマインと双璧をなす武芸指南役。いうなれば、ガルマインに対する戦力を潜在的に秘めている。ガルマインにとってそんな危険な者をほおって置くはずが無い」
「では、ハグム殿に会う事は叶わないのかしら？」
「どこか、警備が手薄な所は……」
「裏門はどうでしょう？」

「行ってみよう」
アシュマ達は裏門へと向かった。
「ごめんなさい、アシュマさま。アシュマさま一人なら……」
アーチェルは自分の非力を詫びようとしていた。
「足手まといの話なら、聞く気は無いぞ。その事は忘れろ」
「はい」
アーチェルは申し訳ない気持ちでいっぱいだったが、アシュマに言われたとおり忘れようと努めた。
そして、アシュマのさり気無い気遣いに感謝した。
二人は裏門の前まで来た。
「ここもか」
アシュマは言う。
裏門の警備も表門と変わらぬものだった。
兵士が多数いて、魔導機兵までが偵察に回っていた。
「見限るしかないか……」
「アシュマさま、この水音は何でしょう？」
その時アーチェルが尋ねた。
「水音？」
アシュマも耳を澄ました。
確かに水音がする。
「何処だ？」
近くを見てみると排水用のマンホールがあった。
「これか……」
水流の音の大きさから見て多分ここが本溝だろう。
人が立って移動できるに違いない。
「ここに賭けてみるか？」
「ええ」
「王女様にはあまり勧められんがな」
「あら、アシュマさま。わたくしなら大丈夫よ」
「では、行くか」

「はい」
二人はマンホールの中へ降って行く。
アシュマとアーチェルは地下の排水溝へと降り立つ。
地下の排水溝は意外と広く、排水溝の左右には一段上がった縁があり、上下は人間が立って歩ける程であった。
二人は三十メートル程進んだ所で、上へ登る梯子を見つけた。
距離的には丁度ハグムの道場の真下だ。
「少し待っててくれ。上って見てみる」
「お気をつけて」
「うむ」
アシュマは梯子を上って行く。
マンホールのすぐ下まで来て、辺りの気配を伺う。
ゆっくりマンホールの蓋を上げてみると、そこはハグムの道場の塀の角、植え込みと植木に隠れていて、出るには丁度良い場所だった。
いったん、マンホールの蓋を閉じて、アシュマは梯子を降りて行く。
「どうでした？」
「丁度いい場所に出ている」
「じゃあ……」
「ああ、大丈夫そうだ」
二人は梯子を上がって行き、慎重にマンホールの蓋を開ける。
辺りには誰もおらずひっそりとしている。
明かりも塀の周りから外へ向けられたものばかりで、塀の内側には向いておらず薄暗くなっていた。
「これなら行けるかも知れない」
「でも、どうやって、中に入るの？」
「とりあえず入れそうな場所を探そう」
二人は館の周りを回り裏口に来た。
「……とりあえず、扉を引いてみるか」

「ええ」
裏口の扉を引いてみたが、扉は動かなかった。
「……やはり無理だったか」
「次に、行ってみましょ？」
「……ああ、そうしよう」
二人は、窓や引き戸などを見て回ったが、入れそうな所は、やはり鍵で閉じられていた。
最後に二人は、正面入り口に来た。
「……まさかここから入れるとも思わんが……」
正面入り口の引き戸を引いてみた。
すると、がらり、という音を立てて入り口が開いた。
「！」
二人は顔を見合わせた。
「開きましたわ。アシュマさま」
「……罠かも知れん、慎重に入ろう」
「わかりました」
引き戸を閉めた後、アシュマが先頭となって、慎重に中へ入って行く。
廊下を渡って道場の方へ向かって行く。
アーチェルは、全くの闇の中、夜目が利かなくて不安らしく、アシュマの左手を取って、少し震えていた。
アシュマは少しでもアーチェルの不安を取り除いてやろうと手を握り返してやった。
アシュマは、この闇の中全てを、見渡しているかのように、何不自由なく歩いて行く。
「！」
アシュマは闇の中、道場中央に端座している影を認めた。
「ハグム殿か？」
「いかにも。アシュマ殿にござるな？　そしてそちらの方は……アーチェル・アップルトン様に御座いますかな？」

「お察しの通りアーチェルに御座います。お初にお目にかかり嬉しく存じます」
「いえ。こちらこそご尊顔を拝し奉り恐悦至極に存じ奉ります。さて、早速話の本題に入らせていただくが……何ゆえこの夜更けに我が道場に参られた？」
アーチェルはその場に端座した。
ハグムはその佩刀をハグムの左側、裏に置いている事が気になったが、アシュマは鬼虎をアシュマの右側、刀は裏に置いて、戦意の無い事を示し、その場に端座した。
そして、話を始めた。
「まず、お尋ね申す。正面玄関の鍵を開けられたのは、ハグム殿か？」
「いかにも。この我が家の入ろうと色々伺っておるようなのでな、どの様な者が入ってくるかと思い、予め開けて待っており申した。すると入ってきたのは二人。ワシが感知していたのは一人。正直驚いたわい」
「感知されていたのはわたくしで御座いましょうか……？」
「いかにも」
ハグムは応えた。
アシュマは重ねてアルスティーンの行方に関して問うていた。
「我ら、アルスティーン殿に助成する為この王宮市にとどまる事に決め申した。しかし、あまりに情報に乏しく、その為自由に動く事叶わず、ハグム殿に情勢お教え頂こうと思いここに参った次第。何卒我らにここの情勢……特にアルスティーン殿が立ち寄りそうな所など、お教え頂けたら嬉しく存じます」
ハグムは一呼吸置いて、話し始めた。
「答える前に一つ聞きたい。アシュマ殿は佩刀が変わっておられるが、それはもしかして万人殺しの鬼虎にござるか？」
「いかにも」
「そうでござるか……」

ハグムは一呼吸を置いてから話を始めた。
「アシュマ殿はこの国で十八年前何が起こったか御存知であろうか？」
アシュマはハグムが一体何を言い出すのかと分からなかった。
ハグムは話を続けた。
「十八年前も同じようにこうした紛争があった。いわゆるお家騒動という奴じゃな。構図は今も同じ、王位をアルスティーン様に譲るか、ルーランさまに譲るかという事で国論を二分したのじゃ。その時のワシは、王の実子のルーラン様を強く推してな、紛争を余計に煽ってしまったのじゃ」
アシュマは黙って聞いている。
「その時、犠牲になったのは、民草じゃった。王はこの事態に深く心を痛められ、ワシも大いに至らぬことに気付かされた。ワシは王にルーラン様を死んだ事にして、事態の収拾を図ってもらったのじゃ。そしてルーラン様は落ち延びて、今も生きておられる」
辺りに重苦しい空気が流れ始めた。
「そのお方は、今、ワシの息子として生きている」
「それは、もしや！？」
アーチェルが驚く。
「そう、オルバニアン・マグマイヤー……ルーラン・ノリトレア様である」
「！！」
アシュマとアーチェルは無言の内に驚いた。
「その事は、ワシと王しか知らぬ事じゃ。証拠もある。見所の柱の中にそれがある。そこに王に遣わして頂いた護り刀の本身と王の書付の半欠けがそうじゃ」
「何故、本身のみと書付が半欠けに？」
「先日賊が我が館に侵入した事は知っておろう？　あの折、刀の拵えと、書付の半分が盗まれたのじゃ。盗んだ張本人はもちろんガルマイン・デッド、あ奴じゃが…。ワシはこんな事もあろうかと、本

身を抜き取り書付の花押がある残り半分を入れてある」
「なぜ、そのような大事な事をわたくしたちに？」
アーチェルはそう尋ねていた。
「アーチェル、下がれ！　ハグム殿は死ぬつもりだ！」
「え？」
その時、きぃん、という金属音がして二つの刀が火花を散らした。
アシュマは、ハグムの意図をいち早く察知できたおかげで、ハグムの刃を辛うじて受け止めていた。
が、刀をアシュマの右側で裏にしていた所為で、ハグムの刃を峰で受け止め、しかも逆手で刀を持つ結果となってしまっていた。
このままでは著しくアシュマが不利である。
「アーチェル、許せ！！　この相手は、相手を気絶させて切り抜けるほど、甘い相手ではない！　どちらかが確実に死ぬ！！」
「そ、そんな……！」
「何故、俺の命を奪おうとする！？」
「万人殺しの鬼虎を持つが故よ！　その刀が政争の道具に成り下がれば、一体幾人の罪も無い民草の命が犠牲になるか！　または、万人殺しの異名に偽りなくばどれ程の犠牲者が出るか！　アシュマ殿、その刀を捨てる気にはならんか！？」
「無い。この鬼虎なくば、アーチェルを守る事適わぬ！」
この言葉にアーチェルは甚(いた)く傷ついた。
「そんな……わたくしのために幾人もの犠牲者が出るなんて……。お願い、アシュマさま、鬼虎を棄てて！」
「そんな……無理を……言うな！　『バヴェル』はどうなる？　鬼虎なくば対抗するだけの手段を持ちえぬ！」
「ですが……」
アシュマは無理な体勢でのつばぜり合いを今だ強いられていた。
「そうか、『バヴェル』が……。ガルマインが近頃おかしな動きをしていたのはその所為か。そして、アシュマ殿、それが鬼虎を手放せないでいる理由か」

「『バヴェル』に対抗すると言う理由は、この国に来てから後付した理由だがなっ！！」
その時明かりを持って近づいて来る物があった。
「親父、何事だ。騒々しぞ」
「！！　オルバニアン！来るでない！！」
一瞬、ハグムに隙ができた。
アシュマはその隙を逃さず、ハグムを弾き返すと、体勢を立て直した。
ハグムは、オルバニアンが来た事と、アシュマに体勢を立て直されたことからくる焦りで、半ば八双が崩れたような体勢から斬り込んで来た。
「閃光一刀……！」
アシュマは十分に相手を引き付けてから、稲妻のように速い居合いの一刀をハグムの胴へ送り込んだ。
「親父ぃ！！」
「ぐおっ！」
手ごたえは十分にあった。
どぉっ、とハグムはその場に倒れた。
アシュマは鬼虎に血振りをくれて、納刀し、
「ふぅーっ！」
息を吐いた。
「親父ぃ！！」
オルバニアンに抱き起こされたハグムは、何かをオルバニアンに言おうとしたが、痙攣しそのまま息絶えた。
「親父、親父！　親父ぃ！！」
「オルバニアン様ですね？　わたくしはレキソタニアのアーチェルです。あなたのお父様のハグム様は……」
「うるさいッ！！」
オルバニアンは涙を零しながら怒りの眼をこちらに向けていた。
「ぁ……」

アーチェルはその様子に気圧された。
「アシュマ！　何故親父を殺したッ！？」
「剣者には時に、お互い相譲れないものがある。お主の父上は見識、力量ともに立派な剣者であった」
「誤魔化すなッ！　そんな事を聞いているんじゃないッ！！　何故親父を殺したッ！！」
オルバニアンは床に転がっている刀を拾いアシュマに向けて構えた。
「親父の仇だ！！　殺してやるッ！！」
アシュマは無造作にオルバニアンに近づいていった。
「こ、この！！」
オルバニアンの打ち込みを、体を開いてなんなくかわし、オルバニアンの頬を、ぱん、と平手打ちした。
「あぐっ……」
「この馬鹿者！！　お前にはハグム殿の気持ちが分からんのか？　民のために生き、民のために力を尽くせ！　お前にはその責任がある」
「な……なに？」
「見所の柱の中を調べてみよ！」
その時奥の母屋から二十数名の住み込みの弟子たちが、騒ぎを聞きつけやって来た。
「オルバニアン様、如何なさいました。この騒ぎは一体……？」
「アイツが……アシュマ・アトーが親父を殺した！」
同時に外から駐留兵士達が入り口から入ってきた。
「こら！！　貴様ら！！　何を騒いでおるかぁ！！」
「アーチェル！　逃げるぞ！！」
「は、はい！」
アシュマとアーチェルは裏口の方へと逃げていった。
「ま、まて！！」
オルバニアンはアシュマを逃がすまいと叫んだが、外からの兵士

との乱戦に巻き込まれてしまった。
オルバニアンは乱戦中に見所に来た。
そこでアシュマの言葉を思い出し、柱に手を掛けようとする。
（なに、アイツの事を気にしてるんだ俺は）
オルバニアンは切り込んできた兵士を逆に斬っていた。
乱戦のさなか館内に煙が流れ込んできた。
「火事だ！！」
誰かがそう叫んでいた。
（火事か……ええい！　ままよ）
オルバニアンは柱に手を掛けると、柱がコトン、と音を立ててはずれ、中から油紙に包まれた物が出てきた。
オルバニアンはすばやくそれを懐にしまい込んだ。
「オルバニアン様、早くお逃げ下さい。ここは我らで何とかします」
「そうです、早くお逃げ下さい、オルバニアン様」
「そんなことが出来るか！！」
「早くお逃げください！　そして、我らの……ハグム様のご意思をお継ぎ下さい！！」
「分かった！！　皆必ず生き残るんだぞ！！　生き残ったならば、皆マルル広場に集まるんだ！！　いいな！？」
「はい！」
「御無事で！」
「ああ！　分かった！！」
オルバニアンも裏口を目指した。
裏口のところで兵士とばったり出くわしてしまった。
「こ、こいつはオルバニアンだぞ！　皆、出会え！」
「くそっ！」
オルバニアンは刀を抜きざま敵兵の左脇をすりぬけ、薙ぎ斬る。
そのままオルバニアンは例のマンホールへと目指す。
あのマンホールは偶然館内に出る様になっていたのでは無く、いざという時のための抜け穴代わりに、敷地内に引き込んで目立たな

いよう偽装していたのだ。
オルバニアンはマンホールの蓋を開けようとする。
が、誰かに開けられた痕跡があった。
しかし、迷っている暇は無い。
オルバニアンは蓋を開け、地下排水溝へと降りていった。
一方、アシュマとアーチェルは地上からの梯子を下った所から、およそ十メートル程、来た道を戻った所にいた。
アーチェルはアシュマにもたれて泣いていた。
「アシュマさま……えぐっ、えぐっ……ごめんなさい……わ、わたくしのために、ハグム様を……ご、ごめんなさい……ぐすっ……」
「……アーチェルのせいじゃない……」
「でも……わたくしのせいでアシュマさまは鬼虎を手放せなくて……それで、ハグム様と……」
「あれは、方便だ。それでアーチェルを傷つけてしまったのなら、謝る。俺の業だな、鬼虎を手放せない、と言うのは……。この妖刀に魅入られてしまったのやもしれん」
「アシュマさま……ぐすっ」
「その『業』とやらで、俺の親父を殺したのか？」
「！！」
そこにはオルバニアンが立っていた。
「違うの！　オルバニアン様。アシュマさまは『バヴェル』に対抗する手段として、鬼虎を手放す事が出来ないんです！」
すると、オルバニアンが語りだした。
「昔、ある国が強力な兵器を作った。他の国々はそれに脅威を感じて同じ兵器を作った。すると、他の国が新しい兵器を作った。やがて、我々の祖先は、お互いを何万回も殺す事の出来る兵器を作り上げ、お互いにそれをした。我らの祖先は滅亡寸前まで行き、その兵器を封印した。大事なのは対抗する事じゃなくて、封印する事じゃないのかい？」
オルバニアンは言った。

「そ、それは……」
アーチェルは言葉に詰まった。
「確かに、その通りだ」
アシュマが受けた。
「だが、実際にバヴェルは今、この国にある。しかも、今、この国は、ガルマインが手にしつつある。ガルマインがバヴェルを使って他国に侵略を開始するのは火を見るより明らかだ。どうする？」
「う……」
今度はオルバニアンが答えに窮した。
「わたくしを殺して！」
「なっ……」
オルバニアンが驚く。
「何を言い出す？　アーチェル」
アシュマも何を言いだすのかと応ずる。
「ガルマインはわたくしをバヴェルに乗せて、バヴェルを制御しようとしていました。わたくしがいなければバヴェルは動かない……。だからわたくしを殺して下さい！」
オルバニアンは、埃にまみれてはいたが、透き通るような瞳を持つこの少女の美しさに「はっ」
と、していた。
「あなたの様な人を殺せるわけが……」
オルバニアンが言いかける横でアシュマが口を開いた。
「確かにアーチェルを殺せば問題は解決するな」
アシュマは鬼虎の柄に手を掛け抜く気配を見せた。
「アシュマ！　あんた正気か！？　親父の次はアーチェル様か！？」
「いいのです。さぁ」
アーチェルは眼を閉じ、胸の前で手を組んで見せた。
「……」
アシュマは暫しの沈思（ちんし）の後、鬼虎の柄から手を退けた。
「冗談だ。本気にとるな」

アシュマは柄から手を退ける
「出来る訳なかろう？　そんなこと」
（どこまでが本気だったんだ！？　この男は）
オルバニアンはそう思った
「アシュマさま　それで宜しいの？」
「そうなったら、そうなったで、別の手を考えればいい。さぁ、行くぞアーチェル」
その時オルバニアンが口を開いた。
「おい、待てよ！！　アンタは俺の仇だ！　逃げるな！　勝負しろ！」
「一言、言っておく。あの折、先に刃を抜いたのはハグム殿だ」
「それは……何か理由があった筈だ！」
「確かに。それは俺が万人殺しの鬼虎を持つが為だ」
「それ見ろ！　親父は理由無く、刀を抜くような男じゃねぇ！」
アシュマに代わりアーチェルが応えようとしていた。
「では聞きますが、わたくしは許せても、アシュマさまは許せませぬか？」
「うっ……」
「ハグム様にも同じ問いをしてみとう御座いました」
「う……」
「どうですか？」
「ア、アーチェル様は守らねばならないが、アシュマ、アンタは守る必要がない！　むしろ危険な人物だ！！」
「オルバニアン様、それはかなり無茶な理屈で御座いますわよ。あの折のハグム様とアシュマさま、双方にそれぞれの正義があったように思います」
オルバニアンは暫し呆然としていた。
「行くぞ。アーチェル」
「はい、アシュマさま。あ、すこしお待ちいただけます？」
「？」

「オルバニアン様！」
「な、何ですか？　アーチェル様」
「今時分だとアルスティーン様は何処においでになるか分かりませんか？」
「ア、アルスティーン様ですか？　わ、分かりません、ですが、もし自分でしたら、マルル広場に陣を置きます」
「何故だ？」
アーチェルに代わってアシュマが尋ねる。
「……」
オルバニアンはアシュマに対して無言を決める。
「やれやれ。アーチェル、頼む」
「はい。オルバニアン様、なぜマルル広場に陣を置くのですか？」
「もし、ガルマインが王宮の内部に陣を敷いていたとすると十二ある内の第十二門に比較的に近く、すぐに王宮内に侵入できるからなんです。元来はそこに兵を置いて発進する前の調整をする場所でもあるんです」
「そこまで分かっているのならば、敵の兵と衝突しているかもしれない。もしくは、それこそ敵に包囲されて、全滅させられてしまうかも知れないな」
アシュマが思わず洩らしていた。
オルバニアンは、むっとして応える。
「そこまで知るかよ！　俺は思った通りを言っただけだ！」
「俺も思った通りを言っただけだが？」
「ちっ！」
オルバニアンは、思わず舌打ちをする。
アシュマがアーチェルに耳打ちをしていた。
オルバニアンは、何か言ってくるのだろうと分かっていたので面白くなかった。
「オルバニアン様、そのマルル広場に、案内していただけないでしょうか？」

アーチェルがオルバニアンに尋ねた。
「なに！？」
「是非ともお願いいたします」
「何故俺が……断わるッ！」
「そこを曲げて……」
「いやだ！」
「お願いします」
「ううっ……」
オルバニアンは涙で眼が潤んできた。
何故、先程まで、いや現在においても親の仇である男の為に、これを助けなければならないのか。
オルバニアンは情けなくなって、涙が零れ落ちそうになった。
（阿漕（あこぎ）な事をした）
アシュマはそれを見て思った。
「あの？　オルバニアン様？」
「もう、いい。アーチェル、行こう。オルバニアン、済まぬ事をした。許せ」
アシュマ達が、去ろうとする気配を見せて行こうとした時、涙声でオルバニアンが叫んだ。
「ま、待てよ！　このまま逃げられちゃ、た、たまんないからな！　マルル広場まで一緒に付いてってやる！　だけど勘違いするなよ！　アシュマ、お前を逃がさない為だからな！」
「済まない」
「だから、勘違いするなって言ってるだろ！」
「済まない」
「だから……まぁ、どうでもいいや」
「オルバニアン様、マルル広場に行くのに、このまま地下を歩いていってもたどり着けるのですか？」
「大丈夫。ちゃんと着きますよ、アーチェル様」
アーチェルの疑問にオルバニアンが答える。

「そうだ、アーチェル、これを……」
アシュマは、シャツの中から首に下げていた魔導石を取り出し、アーチェルの首に掛けてやった。
「アシュマさま、これは！」
「これから、戦闘が激化する可能性が高い、これを付けておいて欲しい」
「なら、尚更アシュマさまが、つけておいた方が……わたくしにつけても意味がありません！　わたくしに念者の素質なんてありません！　だから……」
「そうかな？　俺はそうは思わん。きっとこの魔導石がアーチェルを守ってくれる」
「いいえ、これはアシュマさまが……！」
「お守りだと思って」
「アシュマさま……」
「おい、何時までいちゃついてるんだよ！！　いくぜ！！」
「ああ、わかった。アーチェル、行くぞ」
「はい」
アーチェルはアシュマの渡してくれた魔導石が、形見分けの様に思えて嫌な予感がしてならなかった。

アルスティーンは敵陣を突破して、マルル広場に到着した。
アルスティーンは自機を降りると
「オフヴここを頼む」
そう言い、貴族たちの集まるアジトの中へと入って行く。
「おお、アルスティーン様、お帰りなさいませ」
「お帰りなさいませ」
声が響いた。
「状況は？」
「この、マルル広場は取り囲まれております。それよりも先ずアル

スティーン様の草の者が帰還しております。御報告を聞かれては？」
「うむ」
アルスティーンは応えながら、テーブルの上に置かれた地図を見つつ草の者の報告を聞く。
「報告をいたせ！」
「は！　先ずガルマインの居所ですが、王宮の南の南塔、軍司令部におります」
「顕示欲の強い奴だ、司令席についている事だろうよ」
「仰せの通りにございます」
「話がそれたな。第一〇四大隊と大一〇六大隊との連絡は着いたか？」
「は。我らの決起とともに武装蜂起するとの事ですが、罠である可能性が高いかと」
「理由は？」
「は。いずれの場合も『副官』なる者が応えており、隊長の安否を問うてもお茶を濁すばかりであったとか」
「アルスティーン様、いかがなさいますか？」
「こちらを罠にはめようとしたに違いない！　当初の予定通り『錐』の戦法で行く。まだ集結していない者は誰か？」
「エビィ公と、カクル公、それにミフシーヨ公に、ございます」
「うむ。ミフシーヨ公がいないのが痛いな。が、仕方あるまい我等だけで……」
その時、外の方が俄かに騒がしくなった。
アルスティーンはもう敵の攻撃が起こったのかと思いぎくりとした。
「はなせっ！　いてっ！！　何をしやが……だから、痛いって！！」
「どうした騒々しい！」
「はっ。アルスティーン様の知り合いだと申す者が数名おりまして……面会をと……」「軍議中である。そちらの方で処理をせよ！」
「いっ、いってぇなっ！」

と言った声の主は警備兵の間をすり抜けてテントの中へ入ってきた。
「アルスティーン様！！」
「オルバニアンか！　……軍議中である！　控えよ！！」
「で、でも……親父が殺されちまったんだよォ！」
「何！？　一体誰に！？」
「アシュマの奴だよ！！」
「何故（なにゆえ）に！？」
「それは仕方ない仕儀でな」
と、言ってアシュマはテントの中へ入ってきた。
「何が仕方ない仕儀だよ！！　親父を殺しておいて！！」
「本当なのか？　アシュマ？　事と次第によっては貴公を逮捕せねばならんぞ」
「斬りつけてきたのは、ハグム様のほうでした。アシュマ様はやむなく、自衛の為、斬ったに過ぎません」
「おお、アーチェル様。アーチェル様、今の話は真なので？」
「ええ、色々複雑な経緯はありますが、大方を話すとなればそのような事かと」
「間違いないかオルバニアン！？」
「俺は、親父がアシュマに切られたところしか見ていねぇ」
「アシュマ殿は如何に？」
「仕方ない仕儀にて……としか言えん」
「何言ってやがる！　鬼虎を持っていたから親父に手放すように言われたんだろ？　それをそうしなかったから、親父に切りつけられたんじゃないか」
「それでは、罪科があるのはハグム殿ではないか？」
「な、何だってぇ！？　親父は鬼虎が危険だといってアシュマに手放すように言ったはずなんだ！　それをアシュマは手放さなかったから！」
「アシュマ殿の持ち物だ。他人がとやかく言えるものではなかろう！　時間が惜しい！　この話はここまでとする！！」

「ち、畜生ッ！！」
オルバニアンは地面にこぶしを叩き付けて悔しがった。
そんなオルバニアンを無視して、アルスティーンはアシュマに聞いた
「ところで、アシュマ殿。この様な所に何用か？」
「アーチェル……様……に乞われて、助勢しに参った」
「なんと！　鬼虎を持っての助勢であるか！　これは心強い！　……しかし、アーチェル様は……」
「足手まといなのは、分かっております。ですが……」
「アーチェル、お前の一番嫌いな、人の血が流れる所を見る事になる。それはお前にとって相当な苦痛のはずだ。それでも付いて来るのか？」
アシュマは、そうアーチェルを諭していた。
「……」
「だろう？　アーチェル、君は血を見ないほうがいい……さて、アルスティーン殿下、俺はどうしたら良いのかな？」
「……いてく」
「？」
アシュマはアーチェルが何を言ったのかよく聞き取れなかった。
「……付いてく」
「え？」
「わたくし、アシュマさまに付いていきます！！　皆が皆、血を流しているのに、自分ひとりだけ安全な所で、のうのうとしているなんて、わたくしには出来ません！」
「アーチェル……」
アシュマはもう、何も言えなくなっていた。
「アーチェル様……相分かり申した。オルバニアン・マグマイヤー！！」
アルスティーンが叫んでいた。
「は……はい」

オルバニアンが気のない返事をしていた
「そなた、軍用車両を以って、アーチェル・アップルトン王女に付き従い、これを警護せよ！　なお同車両を以って、アシュマ・アトー氏の戦闘を助けよ！　反論は許さぬ！よいな？」
「……」
「よいな！？」
「……はい」
オルバニアンは渋々返事をした。
「で、俺は何をすればいい？」
「我らは『錐』の戦法で一点集中の波状攻撃を仕掛ける。アシュマ殿は遊撃隊として……と、言ってもアシュマ殿一人だがな……自由に敵を蹴散らしてくれ」
「わかった。宜しく頼む。オルバニアン。アーチェルを守ってやってくれ」
「ああ、分かったよ」
オルバニアンは憮然として応えていた。
「よし、敵が動く前に行動を開始するぞ！！　発進だ！！」

第八節　戦闘

アジトの中から各諸侯が出てきてそれぞれの部下の所へ散っていく。

すぐさま、パイロットが魔導機兵へ乗り込み魔導機兵を起動させて行く。

エンジンがうなりを上げて、次々魔導機兵たちが起動されて頭部のカメラアイがフラッシュを焚くように光った。

動力が四肢へと伝わって行き踵のホイールがきりきりと音を立てて暖機運転を始める。

それぞれの魔導機兵はそれぞれ主武装のマシンガンや、遠距離支援用のライフルやミサイルランチャー、接近格闘戦用のロッド等で武装されていた。

魔導機兵に乗れないものはそれぞれバギーに乗って戦闘準備に取り掛かる。

その中でも念者は刀や剣で武装し、そうでないものはマシンガンやライフル等で武装していた。

そして、アルスティーンは特別仕様の愛機に乗り込んだ。

魔導石を回転させしエンジンを起動させる。

ゆっくり機体を立ち上げて、踵のホイールの暖機運転を開始する。

武装は、右手にロッド、左手にシールド。

腰のホルダーにはマシンガンとライフル。

左腕のシールドの裏には予備のロッドが備え付けられている。

およそ考えられる武装は一通りそろえて武装されていた。

最後にカメラアイが一瞬光って起動が終了した事を示していた。

今回の作戦は迅速を旨とした物なので、起動が済んだ機体や戦闘要員を乗せたバギーから随時発進していった。

戦闘要員と言っても運転手にオルバニアン、その助手席にアーチェル、後部座席にアシュマが立ったまま乗り込んだ三人は身も軽く、

バギーを発進させて行く。
アルスティーンも踵の鋼鉄製のホイールを接地させ高速で移動を開始した。
丁度アシュマ達のバギーをかばうような形で走っている。
アルスティーン率いる五十機程の機体は、広場の目抜き通りを進み、王宮の方へとむかっていった。
次々と後続機が付いていく。
マルル広場に潜んでいた敵の魔導機兵たちは、アルスティーン側に察知されない為に、エンジンの火を落としていた。
また、機体数がもう少し集まると踏んで、包囲しての攻撃を躊躇したのもアルスティーンを、逃がす結果となった事は否めない。
その為、アルスティーン側の、電光石火の発進に、すばやく対応する事が叶わず、包囲殲滅をする事も出来ずに、後塵を喫する事となった。
それでも、魔導機兵の明らかに遅い機体の起動をさせて、二個中隊を、小隊ごとに発進させていった。
その数およそ五十機。
アルスティーンの部隊とほぼ同じ数である。
だが、アルスティーンの部隊の前方、突破すべき第十二番門には、二個中隊が銃口を門の外に向け、守りに控えていた。
その数もやはり五十機。
下手をすれば、挟み撃ちとなり全滅する事は必至となるだろう。
否、そも『錐』の戦法はだれか一人でも良いから、目標に到達してそれを殲滅すると言う、いわば特攻的な側面を色濃く見せる戦法であった。
アルスティーン達は、全速力で前方に向かって魔導機兵を駆っていた。
第十二番門ではライフルを構えた魔導機兵がこちらに向かって照準を合わせている。
だが先に攻撃を仕掛けたのは、アルスティーンの部隊のミサイル

機兵だった。
この、一番射程が長い兵器は、相手を黙らせるのに十分な威力を持っている。
その、四機の魔導機兵達はミサイル一斉射撃を行った。
ミサイルは、矢となって門を守っているライフル機兵達を射抜くように、見事命中し爆発、合計五機が戦闘不能になった。
広場の目抜き通りは既に抜け、橋へと続く第十二番中央道りを、突き進んで行く。
「よし、今だ全機突入せよ！」
アルスティーンはそう言いながら、先鋒に突出し、ロッドを左腰のホルダーに納め左腕に持っていたシールドをマッチラウントに接合し、左手を自由にし、後腰のホルダーから、ライフルを取り出し入り口に狙いをつけた。
案の定、門の入り口には、新しい機体が現れた。
ミサイル機兵だ。
ミサイルを発射されては困った事になる。
敵のミサイル機兵は、ライフルの射程圏内に十分入っている入っている。
アルスティーン側の魔導機兵たちは、ミサイル機兵を後に配置し、ライフル機兵を前にしたフォーメーションを組んだ。
「撃ち方、始めッ！！」
アルスティーンの一言で、ライフル機兵達は、発砲を開始した。
敵のミサイル機兵が、次々撃たれていき、その内一機が、肩のミサイルに命中、大爆発を起こした。
それでも発砲を止めず打ち続けて行くと、敵のミサイル機兵は蜂の巣状になり、次々と戦闘不能状態に陥った。
「撃ち方、やめ！」
ここでも合計五機が沈黙した
アーチェルの乗ったバギーはほぼ最前線にいる。
アーチェルはこれまでの戦闘で、魔導機兵同士の戦いがこんなに

も目まぐるしい物だとは思っていなかった。
まさに頭の周りで轟音や爆発音、ライフルを撃つ音や爆発の閃光等が起こるたびに、大きいその瞳はくるりくるりと、忙しく辺りを見回していた。
アルスティーンは次にライフルを、接近戦闘用のマシンガンに持ち替えた。
「我に続け！」
アルスティーンは魔導機兵の重心を微妙に移動させ、蛇行をしながら進んで行く。
敵に照準を合わせさせない為である。
もうすぐ、門の前にある跳ね橋である。
敵の魔導機兵がその手にマシンガンを持って、跳ね橋の後で待ち構えていた。
「撃ち方始めッ！」
アルスティーン側が発砲を始める。
続いて敵方も発砲を始める。
敵側は今度は既に大破した味方機や城壁を盾にして、マシンガンを斉射して来た。
こうされるとこちらは圧倒的に不利である。
なにせ、こちらは隠れる場所がないのだから。
こうなるとこちらの最も苦手な消耗戦になる。
『門』はもう、すぐ、目の前である。
しかし、アルスティーン側の目的は一点突破であるから、多少の犠牲に眼を瞑り、誰か一人でも二人でも目標に到達すれば、こちらの当初の予定は、達成される可能性が高くなる。
アルスティーンはシールドを立てながら発砲していた。
アルスティーンは何機かの敵機兵を撃破しながら、敵機の残骸を飛び越え『門』を潜り抜けた。
その際に、左右に控えていた敵機兵のマシンガンから銃弾の雨を、お見舞いされた。

それでも爆発を耐えたのはその機体が『特別仕様』だったからだろう。
味方機も続いたが、損傷のダメージは、アルスティーンの機体よりも、激しいものだった。
中には大破寸前の機体も出て、慌てて機体を棄てて剣を手に取り、そのまま自分の足で走って目標に向かう者もいた。
「これはいかんな」
アシュマが呟く。
「なに！？　何か言ったか！？」
戦場であるから騒音が酷い。
オルバニアンも思わず大声になる。
「俺はここで降りる！！」
対してアシュマも大声で応えていた。
「な、なに！？」
オルバニアンは思わずバギーのブレーキを踏んで叫ぶ。
「自殺でもする気か！？」
「そんなつもりは、全く無い！！　このままだと味方が全滅する！！　お前はアーチェルを連れて、安全な所へ隠れていろ！！　いいな！？」
アシュマはバギーを降りながらオルバニアンに命令していた。
「いやです！！」
アーチェルが叫んでいた。
「わたくしは付いていくと言いました。お願い、最後まで一緒にいさせて……おねがいします！！」
アーチェルもバギーを降りて懇願していた。
アシュマは、アーチェルの決意が強いのを見て取って、
「アーチェル。無理はするな。危なくなったら逃げろ。いいな？
オルバニアン！　アーチェルのことを頼む！」
「はい……」
アーチェルは手を胸の前で組んで喜びを表しが、

「ちっ。一体何時からお前の部下になったんだよ？　俺はよぉ」
オルバニアンは悪態をついて不機嫌の呈を表していた。
「行くぞ！」
アシュマが言う。
「行くって何処へ？」
オルバニアンが聞いていた。
「魔導機兵を戦闘不能にする！」
「はぁ？」
「行って来る！」
アシュマは再び魔導機兵の足首を切る戦法を行おうとしていた。
早くしないと味方機の被害が尋常ではなくなる。
ただ、幸いなのは敵機が味方機を撃つのに夢中になっており、こちらの存在に気付いていない事だった。
「ここで待っていろ」
近くの茂みにオルバニアンとアーチェルを控えさせておいて、アシュマは一人鬼虎を手にし一機目の敵機兵へと向かっていった。
「ねぇ、アーチェル様。アイツは一体何をしようってんだろう？」
「まぁ、見ておいでなさい」
アーチェルは少しおどけて言ったが、アシュマにはいま魔導石はないのである。
その事がアーチェルを不安にさせていた。
アシュマが一機目の魔導機兵の軸足になっている足首を斬り割った。
「えっ！！　嘘だろ！？」
オルバニアンが驚くのも無理はない。
アシュマがやっている事の方が理不尽なのである。
大体にして刀を以って鉄の柱を断つようなものである。
理解しろと言う方が無茶なのである。
しかし、アシュマはそれをやってのけていた。
アシュマが六機目の足首を断ち割ろうとしていた。

しかしその時、五機目の敵機兵が、寝転んだままマシンガンの照準を、アシュマに向ける。
アーチェルは血の気が引いて青くなった。
アシュマは、今、魔導石を持っていないのである。
魔導石を持っていたとしても、質量の大きな機兵の銃弾から、その身を守れるとは思えない。
「アシュマさまぁぁぁ！！」
アーチェルは、身を乗り出して叫んでいた。
「しまった！！」
アシュマは身を凍りつかせた。
「ガガガガガッ！」
敵機兵が、マシンガンの銃弾をアシュマに浴びせていた。
アーチェルは思わず目を伏せ、横を向き、オルバニアンも思わず目をぎゅっと瞑ってしまった。
アーチェルは恐る恐る目を見開いていくと、アシュマが青白い光に包まれて淡く光っていた。
アシュマ自身も両腕でその身を守るように姿勢をとっていたが、徐々に姿勢を崩していき、自身の状態を見ると不思議そうな顔をした。
そして、鬼虎を見ると、光の刀身が伸び出ていて、総刀身長が二メートル程になっていた。
「これが、鬼虎の秘密……」
（我が力がこの程度だと思うでない）
「だれだ！！」
アシュマは声ならぬ声に問うていた。
（汝、我と血の契約を交わすべし。さすれば、汝、無限の力を手に入れん）
「血の契約だと……？」
（汝、我と血の契約を交わすべし。さすれば、汝、無限の力を手に入れん）

「今はそのような力は必要ない！」
（汝、我と血の契約を交わすべし……）
アシュマは鬼虎を振ってみた。
鬼虎は「ぶぅん」と、羽虫のような音を立て青白く輝いていた。
六機目の敵機兵がアシュマに気付き、マシンガンをアシュマに向ける。
それに対しアシュマは、これは試しに、と言わんばかりに敵機兵を袈裟に斬る。
袈裟に斬られた敵機兵は、腰の魔導石も断ち割られ爆発を起こした。
アシュマは爆発の中、返す刀で五機目の敵機兵を断ち割っていた。
「信じらんねぇことしやがる」
オルバニアンは自分でも気付かないうちに喋っていた。
アシュマは、七機目、八機目、と次々斬り伏せて、こちら側最後の九機目を斬って棄てた。
アシュマは向こう側へと行く気配を見せる。
見ると、アーチェルも付いて行きたそうにこちら側へ来ようとしていたが、アシュマは両手を大きく上下して、身振り手振りで茂みで待っているように伝えた。
渋々承知したアーチェルを抑えていたオルバニアンがホッとした様子で腰を着いた。
向こう側の敵機兵もこちら側の異変に気付き警戒をしながら、橋から門内へ飛び込んでくるアルスティーン側の機兵を、狙い撃ちにしていた。
しかし、先程までとは違い、銃弾の量が半減している。
これで、致命的なダメージを受ける味方機は半減した。
アシュマはタイミングを見計らって向こう側へと走り去っていった。
「アシュマさま……」
アーチェルは、アシュマの身を案じた。

尤も、その身を案じてもらわなければならないのは、皮肉な事に敵機兵なのだが……。
アーチェルが茂みから向こう側をみていた。
すると、向こう側で早速『狩り』が始まった。
長大な刀が振られ、先ず一機目が早速爆発し、続いて二機目も鬼虎に斬られ、三機目までが一瞬の内に斬られ爆発をしていた。
後は乱戦になり、敵機兵のマシンガンのマズルフラッシュと鬼虎の長刀身と機体の爆発がコマ送りの映画のように見えて、そして静まった。
味方機は悠々と門を通り過ぎていき、最後の味方機が門を通り過ぎて橋をミサイルランチャーで破壊していった。
敵の追撃を防ぐ為である。
アシュマは門の影から外の方をうかがって見た。
五十機程度の敵がこちらに渡れずに困惑した様だったが、全機、機首を方向転換して反時計回り方向に移動していった。
見ると鬼虎の光る刀身は消えていた。
後ろを見ると、アーチェルとオルバニアンが小走りにこちらにやって来る。
アシュマが茂みに誘い、三人は身を隠し無事を確認しあった。
「アシュマさま、大丈夫ですか？」
「どうやら何でも無い様だ。アーチェルは無事か？」
そう言いながらアシュマは鬼虎を鞘に収めた。
「はい、無事にございます。でもあれは一体なんだったんでしょう？」
「鬼虎の力だろうさ。あれが、全てではないと言っていたがな」
「誰にでございますか？」
「鬼虎自身が……だろうな。あの声は……」
「そら見やがれ！　鬼虎は危険なものなんだッ」
「いま、それを言っても仕方なかろう？」
「そんな事言って、誤魔化されないぞッ」

「ま、まぁ、オルバニアン様……ここは、わ、わたくしに免じて許して頂けないでしょうか？」
アーチェルはオロオロしながらオルバニアンに許しを乞いていた。
「ア、アーチェル様がそ、そう言うのなら……」
「よ、良かった……」
アーチェルは胸をなでおろした。
「ここいらの敵は片付いたのか？」
アシュマが問うた。
（そんな、今、折角折り合いがつきそうなのに、そんな横柄に聞いては）
アーチェルが、ハラハラしながら落ち着かなさそうにしていた。
「いや、どうやら軍司令部の方へ防衛にいったようだぞ」
アシュマの問いに、オルバニアンが応えた。
「どこと言ったか？　そこは」
「南の大塔。単に南塔とも言う……って何で俺がてめえに応えてやんなきゃならないんだよ！」
「よし、その塔へ行くぞ」
「で、なんでお前が仕切んだよ！！」
南塔、軍司令部への入り口付近で戦闘が激化していた。
敵側の機兵が出入り口の前に出張って、土塁を敷き、アルスティーン側機兵、歩兵等を中に入れないように戦闘していた。
他にこの塔の守備隊も加わり、総勢百二十機程に膨れ上がっていたアルスティーンは焦っていた。
この様に陣取られていては、中に入れず、折角の『錐』の戦術が意味を無くす。
双方続けざまに激しく銃撃戦を繰り広げる様な消耗戦は、こちらに不利になる事は、目に見えていたからだ。
焦っていても、ここを突破しない限り中へは入れない。
が、双方シールドを立て、マシンガン同士で撃ち合うような、持久戦を強いられては、こちらが持たない。

アルスティーンは、いっそ自分が突破口を開いて仲間を塔の中へ招きいれようかとも考えた。
「それしかないか」
アルスティーンは自機の装備をマシンガンからロッドに変えた。
ロッドは魔導機兵の武器の中でも、最も強力な武器の一つである。
ロッドから繰り出される一撃はどの兵器にもまして、強力である。
が、ロッドなどの格闘戦用の武器には致命的な欠点があった。
格闘戦を行えるような間合いになるまで、マシンガンなどの接近戦闘用の武器、あるいは中・遠距離支援武器のライフルや、ミサイルなどの武器にさらされる事になる。
アルスティーンは、あえてそれをやろうと言うのである。
「突貫する！　援護を頼む」
「は……しかし……」
「しかしは無い！　余がこの事態を打開せねば局面は動かない！！」
「い、いえそうでは無いので……あのお方が既に突撃しているので……」
「なに？」
アルスティーンが別モニタを見てみると、確かに突撃している者がいた。
アシュマだ。
アルスティーンは拡声器で思わず大声で話していた。
『アシュマ！！　無茶だ！！　戻って来い！！』
アシュマは、静止を聞かずに抜刀し、特攻した。
一機の敵機兵がマシンガンの照準をアシュマにロックした。
（だめだ！　間に合わない！）
アルスティーンはそう思った。
敵機兵がマシンガンのトリガーを引いた。
マシンガンの弾丸が狙いを違わずにアシュマに命中……した筈だった。
（さっきはここで目を瞑ってしまったから何が起きたか分からなか

った！）
アシュマはそう思った。
そして、それは起こった。
マシンガンの弾丸がアシュマの念導力場の境界面に接する。
するとアシュマの場合、弾丸が、はじき返しもしなければ、その場で止まったりもしない。
もちろん、弾丸に当たって体がはじけ飛ぶようなことも無い。
その代わりに起こった事は、その『境界面で弾丸が無くなった』のである。
いや、言い方を変えよう。
弾丸は境界面で別の何かに変換され、放電現象にも似た事が、アシュマの念導力場内で起こり、全ての放電光が鬼虎の刀身に吸収された。
そしてその後、刀身から光りが伸びて、光りの刃が形成された。
だがこれらの事はあまりに瞬間的なことなのでアシュマ自身も何が起こったのか、注意して観察しようにも、未だに訳が分からなかった。
ただ自分自身も周りからも、アシュマの念導力場内が、光ったとしか見えなかった。
アルスティーンは目を見張った。
魔導機兵クラスの兵器の直撃を食らって平気なのである。
それだけでも驚きなのにあの長く光るものは何なのだ？
あれでも、刀なのか？
アルスティーンの疑問は尽きない。
光る刀身をもう一度手にしたアシュマは一人敵陣中央に突撃を開始する。
（汝、我と血の契約を交わすべし）
又、あの声が聞こえてきた。
（汝、我と血の契約を交わすべし）
「今、お前に構っている暇はない！！」

アシュマが、その声を振り払おうと、鬼虎を一閃一閃させる度、敵機兵は両断され、爆散していく。
アシュマは鬼神の如く刀を振るっていた。
敵機兵は足元でアシュマが敵機兵を斬る度に混乱し、それに乗じて、更に敵機兵を斬っていた。
その数、およそ三十以上。
アシュマが敵陣中央で敵機兵を混乱させてくれたおかげで敵の護りは総崩れとなる。
そこをすかさずアルスティーンの部隊が隠れていた建物から躍り出て、一斉総攻撃を加えた。
アシュマも続いて刀を振るう。
敵機兵は次々と爆発もしくは沈黙させられていく。
塔の守備隊及び敵の機兵総勢はほぼ全滅状態になった。
『穴』が出来た。
あとは『錐』で貫き通すまでである。

その頃、軍司令部にて、急ぎの報告の使者がガルマインのもとへ訪れた。
「畏れながら、ガルマイン様に急ぎ御報告申し上げます」
「何だ？」
門の守備隊及び塔の守備隊が全滅、アルスティーンの部隊がここへやって来るのも時間の問題かと」
兵は方膝をつき、頭を垂れて報告していた。
「なぜこうまで守備隊がやられたのか？　呆気なさ過ぎる」
ガルマインは左手で顎をさすりながら聞いていた。
「はい、敵兵の中にとんでもない奴がおりまして、刀で魔導機兵を切り伏せ、その者だけで五十機以上の被害が出ております」
「アシュマ・アトーか？　……鬼虎か。やはり我が野望の前に立ちはだかるのはお前か」

「ええい！　守備隊は何をやっていたのだ！　他の門、及び塔の守備隊を、こちらに回せい！」
ガデウィンが息巻いた。
「いや、間に合わんな。兵を分散させすぎたわ」
「は？　親父殿なんと？」
「間に合わぬと申したのじゃ。ここを撤退する」
「なんと！　父上！　何を申されます！　兵を集め、彼奴等を周りから押し包んで、殲滅すれば……！」
ガデウィンが納得いかぬといった顔でガルマインに訴えていた。
「お前は馬鹿か？　それでは、間に合わぬと言っている！　その間に敵が来るというのだ！　死にたくばここに留まるが良い！！」
「く……」
「全所員に告ぐ！　戦艦『ハーティアー』まで撤退する！　ハーティアーに連絡、塔頂上まで来るように伝えるのじゃ！　その後、軍司令部を西の大塔に移す。敵はすぐそこまで来ている！　急げ！！」
「親父殿……」
「そんなに逃げるのが嫌か？」
「は……」
「なら貴様は兵を集めてこの塔に集結させよ。そして手前の手の者を使って、アルスティーンがここに来るのを出来るだけ防ぎ、我らを逃がせ！　良いな！」
「な……」
要するにガルマインは、ここに自分を残し、囮となってここで死ね、といっているのだ。
「は……」
ガデウィンはそう応えるしかなかった。

塔の出入り口と付随する階段は全部で二つあった。
更に中央ホールにはエレベーターが六機あった。

アルスティーンは手を上げながら、アシュマの方へ小走りにやって来る。
「やぁ、調子はどうだい？」
「見たまんまさ」
アシュマは鬼虎を眺めながら言った。
「さっきの光る長刀……あれは鬼虎の……？」
「ああ……」
鬼虎は光る長刀こそ無くなったが、青く淡い燐光が鬼虎を包んでいた。
アシュマは鬼虎を納刀した。
「そうだ。こんな与太話をしに来たんじゃないんだ。この塔には出入り口が二つあるんだ。そのうち一つをアシュマ君、君にお願いしたい」
「急な話だな」
アシュマは、気に入らなさそうに言う。
「そりゃ、そうさ。こっちだって急に決めた話だからね。とにかく頼む！」
「アーチェルはどうなる！？」
アシュマは問う。
「オルバニアンに護衛させる」
「何処に居させるんだ？　下手をすれば後続隊につかまる恐れがあるぞ！」
「アシュマさまについて行きます」
「おお、王女！　何たる勇気！　男共にも見習わせたいものです！」
「アルスティーン！　茶化すのは止めてもらおう！　何を言ってるのか、分かっているのか？　アーチェル！　ここから先は敵の本陣だぞ！？　ガルマインが居るんだ！！　危険な事この上ない！！」
「いま、この国に安全な所って、無いと思うの。唯一つの場所を除いて」
「唯一つの場所？」

アシュマが尋ねていた。
「アシュマさまのお側……」
「ならばアルスティーン、余計にこの話、無かった事に……」
「時間が……」
と、言いかけたときアーチェルが割って入った。
「アシュマさま、それは、だめ。二人でアルスティーン様を助勢するって約束したじゃない？」
「それと、これとは……」
「オルバニアン様にも手伝っていただきましょう？」
「いや、だから……」
もうこうなってしまっては、アーチェルのペースだった。
「アルスティーン様、こちらの班は何人ですか？」
「十人を回します。あとオルバニアンも付けます」
「どちらの方の入り口から入ったら宜しいでしょう？」
「北口の方をお願いします」
「わかりました。では、いってまいります」
「よろしくお願いします。アーチェル様」
「では、また後程。アシュマさま、行きますわよ」
「何を言う！？　アーチェル！！　自分の言っている事が何を意味するのか、分かっているのか！！」
アーチェルがビクりとする。
「お前の嫌いな血が流れる所を見ることになるぞ！」
「アシュマさまが、戦わなくてはならないのなら、わたくしも戦います！　アシュマさまが、血を浴びるのなら、わたくしも浴びます！　アシュマさまが、血を流されるのなら、わたくしも血を流します！！」
アーチェルが半泣きになって、自分の決意を述べた。
「……分かった。本当に手間のかかるお姫様だ……」
アシュマは苦笑しながら応える。
「まだ、あんた等と組まなきゃいけないのかッ！？」

オルバニアンが憤りながらこちらに来る。
また、アルスティーン配下の十人がこちらについた。
どれも一騎当千の兵ぞろいといった風貌だ。
これなら大丈夫、と思ったアシュマは下知を下した。
「急ぐぞ！　折角の『錐』の戦法を無駄にしたくない！　現地でのフォーメイションを発表する。各自アーチェル王女の前後に五人ずつ付け！　そしてオルバニアン！　お前は王女を直接警護せよ！先鋒は俺が受ける！　分かったなら各自戦闘車両に搭乗、この塔の北口目指して発進だ！」
アシュマの号令とともに二台のバギーにそれぞれ分乗し、発進した。
一台目のバギーには、アシュマ、アーチェル、オルバニアンが乗っていた。
「アシュマさま、先程はつい、でしゃばって申し訳ありませんでした」
「俺も納得してしまったのだ。仕方ない」
「済みません」
アーチェルは消え入りそうな声で、詫びていた。
「もう、忘れろ。俺は忘れた」
「……はい」
ミラー越しに二人を見ていたオルバニアンが割って入った。
「なぁ、お二人さんさぁ。痴話喧嘩もいいけれどさぁ、実戦では、ちゃんとしてくれよ。お二人さん」
「チワゲンカって、何ですの？　アシュマさま」
「たわいも無い……。たいした事じゃない。気にするな」
その時コール音がして皆が皆自分の携帯端末を探し、確認したが自分へのコールで無いと分かると、視線をアーチェルに向けた。
「え？　え？　わたくし？」
アーチェルが自分のポケットを探ると確かに携帯端末のコール音が流れていた。

「わたくしでした」
アーチェルは通信機の通話ボタンを押す。
「はい、アーチェル・アップルトンですが……」
『ああ、アシュマ君じゃないのぉ？　あれだけ使い方教えたのに』
「聞こえてるぞ。アーチェル、アルスティーンにいい加減な教え方をするなって言っといてくれ」
「え？　こんな騒音の中で聞こえてるの？」
『はい？　何ですって？』
「いえ、アシュマさまが、ちゃんと操作方法を教えてくれって……」
『え？　地獄耳だなぁ。まぁ、アーチェル様が管理するのなら、それでいいです。じゃあ随時連絡を入れますので、よろしくどーぞー。では』
「はい分かりました。では」
「アーチェル、頼んだ」
アシュマもアーチェルを便利に使おうとした。
「もぅ、アシュマさまも、ものぐさなんだから」

アルスティーンは南口から塔の中へと侵入していった。
既に中央ホールにある六機のエレベーターは既にアルスティーン手下の者が押さえていた。
しかし、エレベーターを使う気は無い。
エレベーターを使って待ち伏せされるのを嫌ったからだ。
「急げ、奴らを逃がすな！」
アルスティーンは塔の階段を駆け上がっていった。
すると、前方から敵兵が刀を持って駆け下って来た。
アルスティーンは手に持ってきた棒を巧みに操り、敵兵を着き転がしたり、倒したりして、とどめは部下の者が刺して行く。
だが、だんだん階を上がるに連れて、敵兵が強くなってきた。
まだ、全体の半分も登っていない。

アルスティーンは一旦前衛を退き、腕の立つ者二人と代わった。
アルスティーンはアシュマ達の様子がどうなったか気になって、アーチェルに連絡を取ろうとする。
一方アーチェル側といえば、アシュマが獅子奮迅の働きを見せていた。
来る敵来る敵、皆ことごとくを鬼虎で倒して行く。
ただ、アーチェルのことを、おもんばかり、皆、峰打ちだが、アシュマの腕と身幅の広い造りの豪刀鬼虎の一撃は相手の腕を砕き、鎖骨を砕き、胴を抜いては相手を悶絶させ、腰を打っては腰骨を砕き、脚を打っては足をへし折り、相手の自由を奪うという、豪快な戦いぶりであった。
その時端末にコール音が鳴る。
「はぁ、はぁ、はぁ、……はい、アーチェルです」
アーチェルは携帯端末に出た。
無線の相手はもちろんアルスティーンだ。
『はぁ、はぁ、やぁ、どうも……そちらは、はぁ、はぁ、どこいら辺りですか？』
「はぁ、はぁ……え、え～とですね……十三階辺りでしょうか？はぁ、はぁ」
『はぁ、もうすぐ半分ですね……ボクの方は十階辺りですね……アシュマ君ならもっと速く行くんじゃないかと思ってましたが……』
「い、いえ……わたくしたちに、気を使って……るんじゃないでしょうか……実際……歩いているようですし……」
『あ、歩いてる？　……その割には……はぁ、はぁ……息が切れているじゃ、ないですか……』
「はぁ、はぁ……だから、気を使ってるんだと、思います……あれで、駆け上られたら、付いていけなかと……」
『成る程……アシュマ君の、体力も、化け物並み……と……はぁ、はぁ、はぁ……じゃ、じゃあ、全員無事ということで、何かあったら、また連絡を入れる、という事で』

「はい、分かりました……」
アーチェルは通話を切った。
「どうした、アーチェル、つかれたか？」
アシュマは相も変わらず、歩くように階段を登っていた。
「い、いえ、大丈夫ですわ……」
「そうか？　……それに、そんな化け物じゃないぞ、俺は」
「まぁ、聞いてらしたの？　アシュマさま……」
「まぁ、いい」
アシュマは又一人、敵兵を鬼虎の餌食にしていた。
アシュマ達は更に上へと上がっていった。
登っていくと、階段の途中で机や椅子で築き上げられたバリケードと手槍を持った兵士たちが構えて待っていた。
特に机のバリケードは厚さ十センチの分厚さで、刀でも銃でもそう簡単に崩されはしないだろうと言う自負心がありありと窺えた。
アシュマは峰に返していた刀身を表に戻した。
そして無造作に階段を上がっていった。
そこへ兵士たちの手槍が、アシュマに向かって突き出された。
アシュマは何本も繰り出された手槍を、横に、後に、なんなくかわし、手槍が繰り出される度に、穂先をけら首ごと斬り飛ばしていた。
そしてバリケードを鬼虎で切り割った。
バリケードの向こうの兵士達はこうも簡単にバリケードを崩されると思っていなかったので、たちまち上へと逃げ去った。
バリケードが崩れたのを見て、アシュマが
「先を急ごう」
そう、皆に言った。

最上階の二十五階。
その部屋の中央に螺旋階段がある。

その螺旋階段を登ると塔の屋上にでる。
ガルマインは既に階段を登り、そこから戦艦ハーティアーに乗るつもりだろう。
ガデウィンが手下の『影』の者三十名と共に、螺旋階段の前で陣形を取り、アシュマ、アルスティーン等が来るのを待っていた。
ガデウィンが言い出したこととはいえ、自ら招いた背水の陣である。
失敗は許されない。
失敗すれば、即、死である。
先に着いたのは、アルスティーンの部隊であった。
一刻も早くガルマインを追い詰めたい一心での強行軍であった。
アルスティーンの部隊は皆、息が切れていた。
アルスティーンとその部隊の者皆は、愕然としていた。
そこにいる筈のガルマインも、軍司令部にいる筈の人間たちも、そこに居なかったからだ。
「あそこか！　あそこから上に逃げたんだ！　敵陣を何としても突破して、ガルマインの後を追うぞ」
アルスティーンが叫ぶ。
「ふ、愚かな……」
ガデウィンは思わず肩頬を歪めていた。
「皆、行くぞ！」
アルスティーンが鼓舞し、部隊の皆が自らを奮い立たせる。
そして、みな刀を手に取り、ガデウィン配下の部隊を攻撃しに行った。
『影』共はその冷酷な眼で間合いを計り、そして狼の群れが獲物を狙うように、体力の一番弱った者から順に殺戮していった。
元々数で劣っていたのに、技量も体力も劣っていたとあっては、アルスティーンの部隊が勝てるわけがない。
じりじり、一人やられ二人やられと人数を減らしていって、すでに生きているのは、アルスティーンとその部下二人のみとなった。

しかもアルスティーンを除く生きている者全員は手傷を負っている。
ガデウィンは勝利の笑みを漏らす。
（もう駄目か……！！）
そうアルスティーンが思った時、奥の方の『影』が、ぎゃっと言う悲鳴を上げて、真っ二つになったように見えた。
そして『影』共が次々真っ二つになりながらそれはやって来た。
ガデウィンが思わず、
「ア、アシュマ・アトー！！」
と、叫んでいた。
すかさずガデウィンが、ひゅっ・ひゅっ、と口笛で合図すると、『影』どもがアシュマ目掛けて攻撃を開始した。
『影』ども五～六人が、飛び上がり、アシュマ目掛けて爪を伸ばしたその時、アシュマは恐ろしい程の速さで鬼虎を一閃、二閃、三閃と刀身を振るうと、影どもはその場で爪ごとばらばらにされた。
その間にアーチェルやオルバニアン、そしてアーチェル側の部隊の者がアルスティーンの元に集まり、アルスティーンと配下の者二名の応急手当てを行っていた。
アシュマは次々『影』共を葬り去り今度は逆にガデウィンが追い詰められて行く。
「そこまでだ、ガデウィン」
「おのれ、アシュマめ……」
ガデウィンが懐に手を入れた。
アシュマ達皆が警戒して構えた。
すかさず、ガデウィンが懐から手を出し、その手に握っていた物を、地面に叩きつけた。
するとそれは激しい光を発して周囲にいる者の眼を眩ました。
「い、いやっ！！　アシュマさまぁっ！」
ガデウィンはこの隙に、アーチェルを腕に抱え、螺旋階段を登り屋上に逃れた。

「アーチェル！！」
アシュマが叫んだ。
「くそっ！　ガデウィンめ！　……追うぞ！」
アルスティーンが悔しがる。
皆が螺旋階段を登り屋上に出ると、ハーティアーがすぐ上空にいた。
ハーティアーから下ろされたロープを握って、ガデウィンがアーチェルを抱えて、ハーティアーへ収納されて行く。
「ははははっ！　残念だったな！　アルスティーン！　お前たちは良くやったよ。でもここまでだ！」
その言葉が終わると同時に、ハーティアーの船体下部に取り付けられている砲塔を旋回させ、こちらに向けて砲撃を開始する。
ドカッ！
砲弾が轟音とともに塔の屋上を破壊していく。
「いかん！！」
アシュマが叫んだ！
「ああっ！！アシュマさまぁっ！」
アーチェルが悲鳴を上げる。
アシュマはすばやく納刀し近くの手すりに掴まった
次の砲撃が来た。
ドカッ！
やはり轟音がして、砲弾が屋上の床を壊していく。
「うわっ！！」
アルスティーンの側に砲弾が着弾し、炎と破片が飛び散って顔面に直撃した様だ。
だが誰もが自分のことで手一杯だった。
また、砲弾が屋上に直撃した。
ドカッ！
「アシュマさまぁっ！！」
アーチェルの叫びは爆音に掻き消された。

もう駄目だった。
砲弾は屋上の床だけでなく、塔の側面も貫通して、塔を傾けさせていた。
絶体絶命だった。
塔の上部は大きく傾き、南の大塔は後の中央大塔にぶつかりそうだ。
全てがスローモーションのように、ゆっくり、ゆっくりと時間が流れる。
その時アシュマは又、あの『声』を聞いた。
（汝、我と血の契約を交わすべし。さすれば、汝、無限の力を手に入れん……）
（また、お前か！　一体俺にどうしろと……！？）
（汝、我と血の契約を交わすべし。さすれば、汝、無限の力を手に入れん……）
（お前に俺の血をくれてやればいいのか？）
（汝、我と血の契約を交わすべし……）
（そうなんだな？）
アシュマは鯉口を切り、刃を少し出し、左手の親指を押し当てた。
僅かに指が傷つき血がにじんだ。
（汝、我との契約は為せり。汝、無限の力、手に入れたり）
「無限の力を手に入れたって、この状況をどうしろと言う！？」
塔は中央大塔にぶつかる寸前だ。
アシュマは目を瞑った。
その時、鬼虎が光り、巨大な念導境界面がアシュマ達を包んだ。

第九節　偽りの戴冠式

その日は、ルーラン王子が王に即位する日だった。
先だって王の国葬が行われたばかりだが、矢継ぎ早の即位式である。
が、政治的空白を作るわけにもいかず、今日の即位となった。
この光景は全世界にわたって放映される事になった。
人々の前に初めて現れたルーラン王子は弱々しく、いかにも病弱そうに見えた。
予めガルマインはテロリストは完全に根絶されたとして、国内外に発表した。
ただ、南の大塔と中央大塔はテロリストの自爆テロのため使用できないとし、即位式は北の大塔にて行われようとしていた。
しかし、不思議なのは、南の大塔と中央大塔が、ぶつかったであろう部分が綺麗に球状に抉(えぐ)られていた事である。
これも全世界に対して放映された。
これだけは、どうにも説明が出来なく、塔修理の為と称して誤魔化す他無かった。
そしてガルマインは王子が病弱なのをいい事に、自らを王子の後見人とした。
こうしてガルマインは王子の後見人として政治力を、臨時ながら国防委員長として軍事力を手にした事になる。
各国のお歴々も参列した。
大きい所では、軍事超大国『アヘイビア連邦共和国』より国務長官が、ノルブル王国からは外務大臣が、ドラスティス共和国からは矢張り外務大臣が、等、小さい所では、タイン教の総本山レジルデ市国より司教が、そしてレキソタニア王国より王女、即ちアーチェルが参列していた。
いや、司教とアーチェルはルーランが王になるのに重大な役割を

担っていた。
　レキソタニアは黙示録大戦後、その伝説当時からある数少ない国家としての権威があった。
　ガルマインの目論見としては、その権威によって、ルーランを国内外に王として認めさせることにあった。
　今日のアーチェルの役割は、ルーランを正統なノリトレアの王として、承認する事にある。
　しかし、アーチェルの瞳には生気が無く、魂が抜けたようになっていて、表情がなく、ただ美しいだけの白いドレスを着た人形がそこに佇んでいた。
　ただ、アシュマより預かった魔導石のペンダントだけが悲しく光っていた。
　祭壇ではレジルデ市国の司祭がひざまずくルーランに対して何事かを宣下している。
　そしてアーチェルは、王家伝来の冠をルーランにかぶせて、ルーランを王と承認する事になっていた。
　宣下が終わりアーチェルが王冠をかぶせようとした、まさにその時であった。
　祭典室の扉が左右に開いたのは。
「ガルマインッ！　その即位式、待ったぁッ！！」
　現れたのは、オルバニアン・マグマイヤーその人であった。
「テロリストだっ！　ルーラン様を守れっ！」
　警備隊長と思しき人物がオルバニアン捕縛の命を下した。
　だが、オルバニアンが現れてもアーチェルの瞳は虚ろなままだった。
「待てぇッ！　その男はルーランにあらず！　我こそがルーラン・ノリトレアである！」
　オルバニアンは大音声で叫んでいた。
　その言葉を聴いて、警備隊長、以下警備隊はその場で固まり、続けて、オルバニアンは畳み込むように喋り捲った。

「その証左に、ここに前王で我が父、リーマス・ノリトレアより授かったこの短刀と書付がある！　よって、そこにいるルーラン・ノリトレアは真っ赤な偽物！　この茶番を早々に止めよ！」
そう言って懐から白鞘の短刀と書付を見せた。
この即位式は全世界に対して放映されている為、警備隊長は下手な行動が出来ないでいた。
それを見たガルマインは言葉を発せざるを得なくなった。
「何を言うかテロリストの分際で！　前王から賜った書付と短刀ならばここにある！」　ガルマインは見事な蒔絵の短刀と書付を高々と掲げた。
言葉に窮するかと思われたオルバニアンだったがそれに反して応えようとしていた。
「その短刀は拵えが本物でも本身は真っ赤な偽物！　書付は前半が本物でも、残り半分の花押が書かれている部分は、こちらにこれこの通りある！！」
「ぐっ……」
このやり取りで言葉が窮したのは、ガルマインの方だった。
「ルーラン様をかたるとは無礼千万！！　そ奴を取り押さえい！！」
「無礼千万とはどっちの事でぃッ！！　痛い所を突かれて、無理矢理にでも、ねじ伏せようって腹かい！！」
警備隊はオルバニアンをじりじりと押し包もうとしていた。
後ろに逃げようにも既に出口も警備隊に固められていた。
オルバニアンは逃げ場を失った。
しかしオルバニアンは少しも慌てず指笛を、ひゅっ、と鳴らした。
すると祭壇後のステンドグラスが割れるけたたましい音が辺りを包んだ。
アーチェルはゆっくりと後を振り向いた。
会場中もステンドグラスが割れる音で一斉にその方へと視線を向けた。
ガルマインも何事かと視線を向けた。

その男はガラスの破片を体中に浴びながら、ゆっくりと歩いてきた。
いや、念導境界面で護られたアシュマ・アトーに降りかかる硝子の欠片など無かった。
「ア、アシュマ・アトー！！　生きていたのか……！！」
ガルマインは叫んでいた。
各国の出席者の方からざわめきが聞こえてきた。
しかしアーチェルはアシュマを見ても何の反応も示さなかった。
アシュマはアーチェルの方へと歩み寄り、
「アーチェル、暗示をかけられたな？」
アーチェルを優しく抱きしめた。
そしてアシュマは耳元で、アーチェルの名を囁(ささや)いた。
「アーチェル……。アーチェル。さぁ、こっちに戻っておいで」
それで、アーチェルの反応を見てみたが、少し、ぴくり、と反応があっただけにとどまり、未だ、アーチェルの瞳には、光りが宿っていなかった。
「余程、強い暗示がかけられているな」
そう言ってアーチェルの身体をぐっと引き寄せ、強く抱きしめた。
暫くそうしたあと、アシュマは少し離れて暫くアーチェルの様子を伺っていた
すると、やがてアーチェルの瞳に輝きが蘇ってきて、
「……ぁ、アシュマ……？　……アシュマさま！！」
アーチェルは、正気を取り戻した。
アーチェルはアシュマを認めると、アシュマに抱きついてきた。
「もう、あの時死んでしまったものかと……」
「鬼虎が助けてくれた。あの時、鬼虎が発生させた念導境界面に包まれて、地面まで運ばれた」
「そうだったの、良かった。オルバニアン様やアルスティーン様は？」
「オルバニアンなら、あそこにいる。アルスティーンは、あの時以

来、行方不明だ」
「そうですか……」
二人が会話しているうちに、警備隊に包囲されていた。
「行って来る」
「あの、できれば……」
「無駄な殺生はしない。『影』どもが出てきたら保障は出来ないがな」
「……はい……」
ガルマインは警備員たちに号令をかけた。
「アシュマとオルバニアン両名を捕らえよ！　各国列席の方々には、速やかに避難して頂け！　テレビ中継は中止だ！　アーチェルには一切危害を加えるな！　以上のことを速やかに実行せよ！！」
アシュマはガルマインが言い終わらないうちに、警備員に斬りつけた。
警備員の刀を折ってその勢いで警備員の身体を打ち据えていく。
アシュマ側の包囲はすぐさま総崩れになった。
アシュマはその余勢を駆ってオルバニアンを包囲している警備員を打ち据えていった。　オルバニアンは流石に警備員達の攻撃をかわすので精一杯だった。
だが、アシュマが加わってオルバニアン側の包囲網も総崩れになった。
警備員で無傷の者は四～五名ほどになった。
あとの者は、皆気絶しているか、激痛に悶絶しているか、オルバニアンが斬りつけて戦闘不能になっていた。
「ぐぅっ……」
ガルマインは下唇を噛んで唸る。
「ガルマインさんよぅ。もう、年貢の納め時じゃねぇのかい？」
オルバニアンがガルマインに向けてわざわざ伝法な口調で話した。
その時ガルマインがさっと右手を上げた。
すると左右の二階席から『影』共が現れた。

その数およそ五十人。
「へぇっ！こんな雑魚がいくら面ぁそろえても、意味がねぇんだよ！」
ガルマインが再び右手を上げる。
すると、長銃身のライフルを構えた『影』が現れた。
やはりその数およそ五十人。
「へっ！？」
オルバニアンが素っ頓狂な声を上げた。
「どうした、オルバニアン？　何か言ってやれ」
アシュマがオルバニアンに応えを促した。
「なれなれしいな。俺は今回の作戦だけアンタと共闘するだけで、仲間になった覚えは無い！　それにな、ありゃあ対魔導機兵用のライフルなんだよ。しかも対都市制圧用魔導機兵用のな　威力が桁違いに大きい。それに弾丸がもし念封弾だったら、弾丸自身が念導境界面を持つ厄介な代物だぜ」
「つまり？」
アシュマは聞き返す。
「魔導石で身を守るのは不可能って事さ」
「その通りだ。オルバニアン。お前は、いい魔導機兵乗りになる素質を持っているな。だが、それも無理だ。ここで死んでしまうのだからな。残念だよ。くくく」
ガルマインはそう言った。
「くそっ！」
「じゃあ、駄目押しだ」
ガルマインは三度手を上げる。
すると、アシュマが入ってきた時より派手にステンドグラスを割って入ってきたのは、魔導機兵だった。
それも都市制圧用の物である。
脚が四方に伸びており、その四脚の接合部分から下に伸びた鶏卵状の部分に兵装が集中していた。

搭乗者は四人、魔導石も四つ。
二人がパイロットを務め残りの二人が念を送り念導境界面を形成していた。
そして登頂部には、ゴンドラ状のものがついており、そこには、ガデウィンが乗っていた。
「一瞥以来だなアシュマ・アトーよ！　どう言うからくりかは分からんが、よくもまぁ、あの砲撃から逃れられたモノよ！　だが、その悪運もそこまでだ。お前はこいつの銃撃から、逃れる事は出来ん！」
ガデウィンはそう言ってみせる。
ガルマインは魔導機兵の下ろしたロープにつかまって、ガデウィンのいるゴンドラに乗り移った。
「ちなみにその機兵の兵装にも、念封弾を使用している。たかだか君たちに死んでもらう為に、高くつく念封弾を使うのも、勿体無いがね」
ガルマインも続いて駄目押しをした。
（この間のような奇跡は起きんか。無限の力と、うそぶいて、何もしないつもりか、鬼虎よ！）
「全員、撃ち方用意！　間違ってもアーチェルには当てるなよ！」
「アシュマさま！　わたくしを盾にして！　わたくしが盾なら、下手に攻撃は出来ないはず！」
アーチェルは悲鳴に近い声で叫んでいた。
「馬鹿を言うな！」
アシュマがアーチェルを叱っていた。
「オルバニアン！　アーチェルを頼む」
言いざま、アシュマは魔導機兵に向かって走っていった。
「撃ち方始め！」
至る所から銃撃音が聞こえてくる。
アシュマとオルバニアンに狙いを定めて銃弾が降り注ぐ。
アーチェルは咄嗟にオルバニアンの前に出ていた。

「一体何を、アーチェル様！」
その時アーチェルの周りに念導境界面が発生し、なんと念封弾をはじき返した。
（！　……『強念者』だ……アーチェル様は……）
オルバニアンは悟った。
アーチェルもまた念者なのだと。
それも並みの念者ではない。
『強念者』だと言う事を。
一方のアシュマは後を見ている余裕など無く、ただ、がむしゃらに魔導機兵へ向かっていった。
『影』共の放つ念封弾は、アシュマの異常に速い走りの為、運良くも念封弾は後へそれて行く。
魔導機兵による、下部銃座からの銃撃を前方から受けそうになり、それを右に走って避ける。
そして走り抜けざま居合いで機兵の足首を斬った。
都市制圧用の魔導機兵は足首が太い為、一度で斬りきれずもう一度、八双からの打ち下ろしで斬った。
が、その際アシュマの動きが止まったため、銃弾の集中攻撃を受ける。
（しまった！！）
そう思っても、もう遅かった。
敵の銃弾が、アシュマの念導境界面を突き抜けて、アシュマに命中するかと思われたとき、弾丸は念導境界面で光りとなり、稲妻となって、鬼虎の本身に吸収された。
（前と同じだ……）
だが前回と違う事は鬼虎の本身が強く光り輝いている事にある。
（これは何だ？）
アシュマは自分に問うた。
「ガデウィン！！　撤退だ、撤退しろ！！」
一方、ガルマインはあの輝きに危険な物を感じ、ガデウィンに命

令した。
ガデウィンは、
「たかが脚一本何事がありましょうや」
自信ありげに胸を張った。
「だから、お前は愚鈍だというのだ！！　早く下がらせい」
ガルマインは苛つきながら重ねて命令する。
「そして残りの魔導機兵五機ここに入れよ！！」
「五機もでございますか？」
「そうだ！」
ガルマインとガデウィンが乗る機兵が急いで下がって行く。
「臆したか！？　ガルマイン！！」
「後ろを見てみろ、アシュマ！」
ガデウィンが叫ぶ
後ろを見てみるとアーチェルが、アシュマにもらった魔導石でオルバニアンを守っている。
が、なれない念を駆使する事はアーチェルの精神力を激しく消耗させた。
今にも念導境界面がかき消え、念導力場がなくなりそうだった。
「アーチェル！！」
アシュマはアーチェルのところまで一気に駆け戻った。
アーチェルが力尽きて、がくっ、と崩れ落ちるのと、アシュマが左腕で抱きかかえるのが、ほぼ同時だった。
「アーチェル！　アーチェル！！」
「あ、アシュ……マ……さ、ま……」
アーチェルは微笑んだあと力尽きたかのように、体をぐったりとさせる。
微かに胸を上下させている事から死んではいない様子が窺える。
「アーチェルのことは頼むといったはずだ！」
ほっ、としたアシュマは、オルバニアンに怒りをぶつけた。
「す、すまねぇ……反論する言葉もねぇ」

「済んでしまった物は仕方が無い、今度こそアーチェルを頼むぞ！」
「お？　おい？」
アシュマはアーチェルをオルバニアンに背負わせた。
「お、おい……アシュマ……あれ！！」
オルバニアンが指し示した先には先程の魔導機兵が五機が新たに現れた。
「行くぞおっ！　オルバニアン！」
「おぉッ！」
アシュマは八双に構えながら魔導機兵に向かって走っていた。
オルバニアンはアシュマの後をアーチェルを背負いながら追っていた。
『影』共はアシュマ達に銃弾を雨あられと打ってきたが、全て鬼虎の念導境界面で光に変換され、本身に吸収されていった。
（鬼虎の新しい力の発現か？）
アシュマは、鬼虎の本身が銀色に光り輝くのは、鬼虎の力の発現かとも思っていた。
そして
（使ってみるのも悪くない）
とも、思っていた。
アシュマの目の前に、二門、五砲塔の砲口がこちらに向けられるのをみた。
そして、一斉に発射され全て命中し大爆発を起こす。
これで全てが終わったと思われたとき、爆炎の中から白銀色に光る三日月状の光が敵機兵へと飛来して、敵機兵を真っ二つに切り裂いていて爆発させていた。
そして、煙が晴れていくと、刀身を白銀色に輝かせた鬼虎を持ち、魔導機兵に立ちはだかるアシュマがそこにいた。
アシュマが鬼虎を一閃、二閃させると、二つの白銀色の光の刃を飛翔させていた。
白銀色の光の刃は二体の魔導機兵を真っ二つにし爆発させる。

アシュマは再び鬼虎を一閃、二閃と閃(ひらめ)かせる。
残りの魔導機兵が爆発した。
少し離れた所から、ガルマイン親子が、アシュマ達を見ていた。
「見ろ、ガデウィン。ああいうことを恐れていたのだ。それが分からんから愚鈍と呼ばれるのだ」
「は、も、申し訳ありませぬ……」
「それに、下手に攻撃するなと言ったはずだ！　アーチェルに傷がついてみろ！　使い物にならなくなるのだぞ！！」
「は、はあっ！」
ガデウィンは恐縮した
一方アシュマ達は、急に攻撃がやんだ事を、訝しがっていた。
「このまま脱出するぞ！」
どちらにしても、これを好機と見たアシュマは部屋をでて、そう言った。
「それなら、いい物があるぜ！」
「いいもの？」
オルバニアンはエレベーターを探しながら
「ああ、サイコ・フライヤーがある筈だ」
「サイコ・フライヤー？」
アシュマが訊く
アシュマ達は中央フロアに到着しエレベーターのボタンを押した。
「ああ、元来それは王族が緊急的に国外へ脱出する為に使う物なんだ」
「じゃあ、おあつらえ向きじゃないか」
「元来は中央大塔に配備されてた物だったらしいけど、この間の騒ぎで、この北の大塔に配備されたんだ」
チン、と言う音と共にエレベーターが到着した。
「彼奴等を逃がすな！！　捕らえよ！！」
後から、ガルマインの声が聞こえてきたが、時既に遅しと言わんばかりに、アシュマ達はエレベーターに乗り込んだ。

「このまま、最上階へ行ってくれれば良いのだがな」
アシュマは鯉口を切った
「そこまで素早い対応は出来ないさ。大丈夫だぜ」
オルバニアンは天性の楽天家ぶりを見せ、無事であるとの太鼓判を押した。
オルバニアンの言ったとおり、エレベーターは無事に着いた。
後は、部屋の中央にある螺旋階段から屋上に出れば、サイコ・フライヤーがある筈だ。
「アシュマ……少し休もうぜ……はぁ、ふぅ……」
オルバニアンはずっとアーチェルを抱えながら走ってきたのだ。
疲れるのも当然と言えた。
「あともう少しだ！　弱音を吐かずに走るんだ！　来い！」
アシュマは、オルバニアンを叱咤した。
アシュマ達は部屋の中央へ走りより、螺旋階段を登って行く。
屋上に着いたとき、それはあった。
サイコ・フライヤーだ。
見ると、どうやら四～五人は乗れそうな造りになっているようだ。
それもそのはずで、王族を急ぎ脱出する為の乗り物なのだ。
そのくらいの容量は、最低限必要だったろう。
「はぁ、やっとついた……」
「まだだ！　速く乗り込め！」
「そんな事を言ったって」
オルバニアンはアーチェルを抱えながら何とかサイコ・フライヤーの扉を開く。
「！！」
その時アシュマは背後に刺す様な視線を感じた。
背後を振り向いてみると、『それ』は確かにいた。
鋭い視線の元を。
初めて見る者だ。
『それ』の、突然の登場にアシュマは困惑していた。

『それ』は全身を鎧で固め、頭部はつるんとした仮面で覆われていた。
いや、鎧で固められていると言うよりも鎧自体が体の一部といった感じで、蟹などの甲殻類を思わせた。
そして、アシュマは、これまでに感じた事が無いほどの強い殺気を感じていた。
アシュマは、こいつは今まで戦ってきた敵の中で、最強の敵だと言う事を、本能的に察知した。
「……」
流石にオルバニアンも異様な気配を感じたのかアシュマのほうを振り向く。
「どうしたんだアシュマ。行くぞ？」
「……先に行っててくれ」
「なんだ、アイツは？」
そしてオルバニアンはアシュマの後にいる『それ』を認め、問う。
「俺も知らん。しかし、どうやら奴は俺にご執心のようだ。先に行っててくれ」
「しばらくエンジンを温めがてら、待っててやる。早くかたをつけて来いよ。その代わり負けんじゃねぇぞ！　てめえの命はこの俺が貰い受けるんだからよ！！」
「ふっ」
アシュマは口元で笑い、そして『それ』に声を掛ける。
「待たせたな」
「……」
『それ』は無言のままだ。
「名ぐらいは教えてくれ」
「我が名は、アーヌ。七賢人の代理で参った」
「アシュマは驚きを禁じえなかった。
七賢人の魔の手がこうも早くに回ってくるとは。
ただし、いつまでもその想念に関わっている余裕はない。

アーヌと名乗った者は、ゆっくりと佩刀を抜いた。
そして、構えを下段に取った。
アシュマも鬼虎を抜き、構えを同じく下段に取った。
その時ガデウィンが屋上に現れ、
「アシュマ、もう逃げられんぞ！　ぐぁはははは！！」
下品に笑った。
その声が呼び水となって、二人はお互いを求めて走りよっていった。
生死の間仕切りは一気に切られた。
二人とも下段からの円弧を描いた切り付けは、実は見せ太刀でお互いの上段からの打ち込みが本太刀だった。
二人は鍔迫り合いとなる。
「ええい！　銃兵隊！　アシュマをやれ！　はやくやらんか！」
銃兵隊が横並びになり対魔導機兵用ライフルを撃ち始めた。
念封弾の乱れ撃ちがアシュマとアーヌに降り掛かる。
鬼虎は念導境界面で念封弾を光に変えて吸収する。
アーヌは念導境界面では念封弾ををはじき返した。
（なんと言う念の強さか！）
アシュマは自身の鬼虎は言うに及ばずアーヌまでもが念封弾をはじき返した事に驚きを禁じえなかった。
そしてアシュマは
（なぜ、鬼虎の念導境界面でアーヌは光に変換されない？）
不可思議な疑念に思い至った。
（鬼虎と同程度の念導境界面をもっていると言う事か？）
その時『影』共がアシュマとアーヌの上に躍り出てアシュマと、アーヌを襲った。
二人は同時に離れて、まだ空を跳んでいる『影』たちを切り伏せた。
そののち、二人は同時に八双から斬りこみ、相手の刃を宙で受け止めた。

鍔迫り合いを嫌ったアーヌは、後ろに跳んで、間合いを外した。
アシュマは小手を打ったが届かなかった。
このときガルマインが遅れてやってきた。
「あ奴は何者か？」
そしてガデウィンに聞いていた。
「我らにも分かりませぬ」
ガデウィンが言った。
ガルマインはアーヌの構えを見て、
「あやつ、ただならぬ奴」
「そうなのですか？」
「そんなことも分からんのか！？　この、うつけ者！！」
サイコ・フライヤーは、力場口を垂直にし、独特の浮遊音を出しながら、空中に停止している。
『アシュマ！　急げ！　何時までもこうしていられないぞ！！』
オルバニアンが拡声器で言う。
そんな声も耳に入らないかのように、アシュマとアーヌの間には緊迫した空気が漂っていた。
最早、『影』共は二人の間に割って入る隙を見出せないでいた。
そして、アシュマは刀を肩に担いで、思い切り跳んでアーヌとの間合いを詰めた。
アシュマは肩に担いだ刀を、思い切り振り下ろした。
アーヌの所へと飛んだ勢いも合い余って、強力な一撃だった。
だが、アーヌはその一撃を食い止めた。
「……！」
アシュマは驚きを禁じえなかった。
アシュマ必殺の一刀が防がれたからである。
アーヌは鍔迫り合いを暫く続ける。
が、このまま鍔迫り合いをすることを嫌い、後ろにとんだ。
再びアシュマは小手を打ったが外された。
この形はアーヌの得意な形なのだろう。

アシュマは再び鬼虎を肩に担いでアーヌの所まで走りより、肩に担いだ構えから思い切り鬼虎を振り切った。
アーヌはこれをかわしアシュマを頭上からの打ち込みで屠ろうとしていた。
しかし、アシュマの一撃目は見せの太刀で誘いであった。
遠心力のついた強力な下からの一撃がアーヌを襲いつつあった。
だが、アシュマの頭上にも羽風が迫りつつあった。
アシュマはやむなく、体を捻って頭上の一撃をかわしつつ、右腕一本でこれを振り斬った。
アーヌも体を捻って、下段からの攻撃をかわしつつ、やはり右腕一本で振り斬った。
双方剣を躱し躱されて体を入れ替えていた。
力だけをいえば二人は互角と言えた。
ならスピードは？
「ならば、これではどうだ？」
アーヌは言いつつ、刀を納刀し、柄に手を軽く添え居合いの構えを見せた。
それを見てアシュマも素早く納刀し居合いの形をとった。
「秘剣、閃光一刀……」
二人は互いを見たまま微動だにしなかった。
じりじりとした時間がながれた。
何処からとも無くはらはらと枯葉が落ちてきた。
おそらく、ここにいる誰かの服に付いてきた物だろう。
この葉が、落ちきった時勝負が決まる。
皆がそう思っていた。
かさり。
葉が地面に落ちた。
二人の剣士がお互い前に出た。
鯉口が切られ、二条の閃光が走った。
その時、それは起こった。

アーヌの豪刀が砕け散ったのである！
「！！」
「アーヌ！！」
アシュマが叫んでいた。
既にアシュマは大上段に振りかぶっていた。
アーヌは無言のままだ。
「てぇいっ！！」
アシュマは乾坤一擲の一打を見舞っていた。
しかし、
「がきぃっ！！」
と、言う衝撃と共に鬼虎の一撃が止まっていた。
なんと、アーヌの指の股から『爪』が伸びて、頭上で交差させていた。
それが鬼虎の一撃を受け止めていた。
二人は離れあった。
そして、アーヌが
「『また』会おう」
そう言った。
するとアーヌは屋上の手すりを越えて地上へと落ちていった。
アシュマは駆け寄り地上を見たが何処にもアーヌの姿は見えなかった。
『アシュマぁ！　早くしろ！！』
オルバニアンが拡声器越しに叫んだ！
サイコ・フライヤーに影が取り付きつつあった。
その影どもを鬼虎を振るって取り外しつつ、サイコ・フライヤーの入り口までたどり着いた。
入り口のドアをスライドさせて、中に入り込んだ。
中までには影は入り込んでこなかったらしい。
「待たせた。頼む。行ってくれ」
アシュマは詫びたつもりだった。

「何だよ、その言いかたぁ　で、何処に行く？」
オルバニアンは口を尖らせながらそう訊いた。
「任せる。ガルマインに捕まりさえしなければいい」
「逃げるだけなら、性能は保証するぜ。何せ王家御用達だからな。ホンじゃ行きますか！　シートベルトをして、椅子に座ってくんな！」
「うちの眠り王女はどうしてる？」
アシュマはアーチェルのシートの隣に座って訊いた。
「ぐっすりお休み中のはずだ」
「そうか」
アシュマはアーチェルを見に行く。
律動的に胸が上下する。
（やはり眠っているのか？）
とアシュマは思ってみる。
「やはり眠り姫を起こすには、王子様のキスが必要なのかな？」
アシュマにしては珍しく、少し悪戯っぽく冗談を言ってみた。
すると
「ええ。是非に」
そう言ってアーチェルが目を瞑ったまま、言葉を返してきた。

第一話　了

以下続刊

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5470f/

デュエリスト　アシュマ　第一話　見参！秘剣・朧霞

2010年10月8日14時58分発行